鳴門秘帖

上方の巻

吉川英治

青空文庫

よまひるま
夜魔昼魔

安治川尻あしがわしりに浪が立つのか、寝しずまった町の上を、しきりに夜鳥よどりが越えて行く。

びつくりさせる、不粋ぶすいなやつ、ギヤーツという五位鷺いさぎの声も時々、——妙いんぎに陰気いんぎで、うすら寒い空梅雨からつゆの晩なのである。

起きているのはここ一軒。青いものがこんもりした町角まちかどで、横一窓の油障子あぶらしようじに、ボウと黄色い明りが洩もれていて、サヤサヤと縞目しまめを描かいている柳の糸。軒には、「堀川ほりかわ会所かいしよ」とした三尺札さしが下がっていた。

と、中から、その戸を開けて踏み出しながら——

「辻斬つじりが多い、気をつけろよ」

見廻り四、五人と町役人、西奉行所にしぎようしよの提灯ちようちんを先にして、ヒタヒタと向うの辻へ消えてしまった。

あとは時折、切れの悪い咳せきばら払いが中からするほか、いよいよ世間森しんとしきった時分。
「今晚は」

会所の前に佇たたずんだ二人の影がある。どっちも、露除つゆよけの笠かさに素草鞋すわらし、合羽かっぱの裾すそから一本落こじりしの鎧よろいをのぞかせ、及び腰で戸をコツコツとやりながら、

「ええ、ちよつとものを伺うかがいますすが……」

「誰たれだい」と、すぐ内から返辞へんじがあつた。

「ありがてえ、起きていますぜ」

後ろの連れへささやいて、ガラリと仕切りを開ける。中は、土間二坪つぼに床が三畳、町印の提灯箱ていとうばこやら、六尺棒、帳簿、世帯道具の類まであつて、一人のおやじが寂じやく然ねんと構かまえている。

「何なにだえ、今いまごろに」

錫すずの酒瓶ちゅうりんを机こにのせて、寝酒ねさけを舐なめていた会所守かいしよもりの久きゆう六ろくは、入いつてきたのをジロリと眺ながめて、

「旅たびの人ひとだね」

「へい、実は淀よどの仕舞船しまいぶねで、木村堤きむらづつみへ着きいたは四刻頃よつでしたが、忘れ物わすれものをしたために、問屋もんやで思おもわぬ暇ひまを潰つぶしましたんで」

「ははあ、そこで何かい、どこの旅籠はたごでも泊とめてくれないという苦情くせいだろう」

「自身番の証札を見せろとか、四刻客はお断りですとか、今日、大阪入りの初ツばなから、木戸を突かれ通しじやございませんか」

「当り前だ、町掟も心得なしに」

「叱言を伺いに来た訳じやござんせん。恐れいりますが、その宿札と、事のついでに、お心当りの旅籠を一つ……」

「いいとも、宿をさしても上げるが……」と久六、少し役目の形になって、二人の風態を見直した。

「一応聞きますが、お住居は？」

「江戸浅草の今戸で、こちらは親分の唐草銀五郎、わっしは待乳の多市という乾分で」

「ああ、博奕打ちだな」

「どう致しまして、立派な渡世看板があります。大名屋敷で使う唐草瓦の窯二元で、自然、部屋の者も多いところから、半分はまアそのほうにや違いありませんが」

「何をいつてるんだ」側から、銀五郎が押し退けて、多市に代った。

「しゃべらせておくと、きりのねえ奴で恐れ入ります。殊には夜中、とんだお手数を」

「イヤ、どう致して」見ると、若いが地味づくりの男、落ちつきもあるし人品も立派だ。

「そこで、も一ツ、行く先だけを伺いましょう」

久六も、グツと丁寧に改まる。

「的^{あて}は四国、阿波^{あわ}の御領^{ごりょう}へ渡ります」

「阿波へ？ フーン」少しむずかしい顔をして、

「蜂須賀^{はちすかけ}家では、十年程前から、ばかに他領者^{たりょうもの}の入国を嫌って、よほどの御用筋^{ごようすじ}か、

御家中^{ごちちゆう}の手引でもなけりや、滅多^{めった}に城下へ入れないという話だが」

「でも、是非の用向きでござりますから」

「そうですか。イヤ、わしがそれまで糺^{ただ}すのは筋目違い。いますぐ宿証^{やどしょう}を上げますか

ら、それを持つて大川南の渡辺すじ、土筆屋^{つくしやわへい}和平へお泊りなさい」と、こより紙を一枚剥^は

いで、スラスラと筆をつけだす。

その時その間、何とも怪しい女の影。会所の横の井戸側^{がわ}にしやがみ込んで、ジツと聞き

耳をたてていた。

白い横顔、闇にツイと立ったかと思うと、

「どうも、ありがとう存じました」

中の声と一緒に戸^あが開いて、さツと明りが流れて来た。途端に、のしお頭巾の女の魔^{あやか}

魅、すばやく姿を消している。

「あ、お待ちなさい——」会所守の久六は何思ったか、あわてて、出かける二人を呼び止めた。

「え、何ですって？」

唐草銀五郎に乾分の多市、出足を呼び返されて何気なくふりかえると、

「気をつけて行くことだぜ、物騒な刻限だ」

会所の久六が、手真似でバツサリ、いやに小声で注意をする。

「フン、辻斬りかあ」多市が鼻ツ先で受けると、

「これ、冗談じょうだんに聞きなさんな」と、久六は叱るように、「今し方もここへ見えた、見

廻り役人の話では、刀試しじゃない物盗りの侍で、しかも、毎晩殺られる手口を見ると、

据物斬りの達者らしいということだ」

「ご親切様……」銀五郎は丁寧えしやくに会釈をして、スタスタと先へ歩きだした。

教えられた道すじどおり、堀川から大川河岸を西へ曲がる。所々に出水の土手壊れや化けそうな柳の木、その闇の空に燈とうみょう明一点、堂島開地の火の見櫓みぐらが、せめてこの世ら

しい一つの瞬またたきであつた。

「親分」多市は、追いつくように側へ寄つて、

「自身番のおやし奴めよけいなことを言やがつたんで、何だかコウ背筋が少し寒くなつた」

「おや、てめえはさつき、フン辻斬りかアと涼しい顔をしていたじゃねえか」

「そりや、関東者の病やまいでしてね」

「出るなど思う奴やつはとかく出たがる。多市、今からてめえの腕前を頼んでおくぜ」

「鶴つる亀かめ、いい当てるということがあら。第一、うちの親分は至つてたのもしくねえ」

「なぜ」

「こんな時の要害に、永ながの道中、大枚の金をわつしに持たせておくんだからな」

「ばかをいえ、それほどてめえの正直を買つてゐるんだ」

「エエ詰らねえ、明日あしたからは、少し小出しに費つかいこむこつた」無駄口を叩きながら、淀よど

屋橋ばしの上にかかると、土佐堀とさぼり一带、お蔵屋敷くらの白壁も見えだして、少しは気強い思いが

ある。

その二人は知らなかつたが、堀川会所の蔭ひそに潜ひそんでいた、のしお頭巾の女の影はまたいつの間にか後ろをつけて、怪しい糸を手繰たぐつてくるのだった。

「おや？ ……」と、渡り越えた橋の袂で、待乳の多市、不意にギクリと足をすくめてしまった。

「親分、誰か来ますぜ、向うから」

「人の来るのに不思議はない。いい加減にしろよ、臆病者」

「だが、しつかり、目釘を湿してしておくんなさいね」

「心配するな」笑いながら、さつさと足を進めると、なるほど河岸ツぶちの闇から、チャラリ、チャラリ……と雪踏を摺る音。

近づいた時、眸を大きくして見ると、侍だ。はつきり姿の見えない筈、上下黒ぞつきの着流しに、顔まで眉深なお十夜頭巾。

当時、宝曆頃から明和にかけて三都、頭巾の大流行り、男がた女形、岡崎頭巾、露頭巾、がんどう頭巾、秀鶴頭巾、お小姓頭巾、なげ頭巾、猫も杓子もこの風に粹をこらして、寒いばかりにする物でなくなった。

チャラリ、チャラリと雪踏を鳴らして、今、銀五郎の左を横目づかいにすれ違った黒縮緬の十夜頭巾は、五、六間行き過ぎてから、そつと足の穿き物をぬぎ、樹の根方へ押しやツた。

かなぐり捨てた羽織もフワリとその上へ——。

と思うと身を屈めて、双の眼をやり過ごした闇へ——蠟色の鞞は肩より高く後ろへ反らしてススススと追いつたが音もさせない。

「ウム！」と据物斬りの腰、息を含んで、右手は固く、刀の柄糸へ食い込んだ。グイと前へ身をうねらせる。

斬るな——と思えたが、銀五郎の後ろ構えを、多少手強く思ったのか、そこでは抜かずにもう一、二間。

すると、場合もあるように、すぐ足もとの土佐堀で、ドボン！ と真ツ白な水けむり、不意を食わせて凄じい水玉がかぶった。

「あツ——」と音を揚げたのは待乳の多市。そのほうよりは、後ろの死神に気がついて、「親分ツ」と、銀五郎を突き飛ばしておいて、自分も宙を飛んでしまった。

「ちえっ……」舌打ちして戻りかけた侍、ひよいと淀屋橋の上を仰ぐと、のしお形に顔を包んだ美しい女が、橋の手欄に頬杖ついて、こつちへニツコリ笑ったものだ。

取って返し勢いで、十夜頭巾の侍が、ぴたぴたと自分の影へ寄ってくるのに、橋の女は、その欄干に片肱もたせて澄ましたもの。

馴れない頭巾ものと見えて、うるさそうに、解といて丸めて川の中へフワリと捨てた。——ついでに、下からさつとくる風と、頭巾ものくずれの鬢びんの毛を、黄楊つげの荒齒あらはでざつと梳といて、そのまま横へ差しておく。

「女！」ズンと凄味すじみのある声だ。

いうまでもなく今の侍、逃がしたほうの身代りに、斬らねば虫が納まるまい。

「あい、わたしのことですか？」

小棲こづまを下ろした襟掛えりかけの婀娜女あだものはどこまでも少し笑いを含んで、夏なら涼んでいるという形だ。

「知れたこと、なんで邪魔いたした」

「邪魔をしたって？ アアそうか、今わたしが石をほうり込んだので、斬り損なつた飛ばつちりを持ってきたんですね」

「ウム、どこまでも承知でしたことだな」

「百もご承知、お前さんは、縮緬ちりめんぞツッキやいるけれど、辻斬り稼かせぎの荒事師あらいし——、そう知つたからこそ横槍よこやりを入れたのさ。悪かつたかい」

「なんだと」

「お前みたいな素人仕事に、あの二人はもつたない。どこか、河岸を代えたらいいでしょう」

「ウム……、じゃてめえもあれをつけてきたのか」

「それもおまけに江戸からだよ。双六にしたって五十三次、根よくここまでつけてきたところを、横からさらわれて埋まるかどうか、胸に手を当てて考えてごらん」

「読めた、さては道中騙りか美人局の」

「いいえ、これでも一本立ち、お前さんも稼業人になるなら覚えておおき、女掏摸の見返りお綱というものさ」

「あつ、お綱か」

「おや、わたしを知ってるの」

「一昨年江戸へ行つた時、二、三度落ち合ったことのあるお十夜孫兵衛だ」

「まあ……」笑いまじりに寄ってきて、「それじゃ少し啖呵が過ぎたね、早くいってくりやあいいのに」

「なアに、こつちがドジを踏み過ぎている。それにしても、たいそう遠出をしてきたものだな」

「ちつと仕事が大きいのですね」

「たしかに見込みはついているのか」

「お蔑みだよ、お綱さんを」

話してみると、ぞんざい口も、罪がなくなつて艶かしくつて、どこやら、国貞うつしと

いう肌合。この美しさが、剃刀の折れを指に挟んで働くとは、目の前にいるお十夜に

も、思えば不思議な気にされる。

「いけねえ、うっかりすると魅入られそうだな」 冗談に目をそらしたが、同時にはツと

した色で、

「あ、向うから、また見廻り役人の提灯が来るようだ。ええ、うるせえな」と舌打ち

した。

「逃げるなら、私にかまわず行つておくれ」

「なに、慌てることはねえ、支度はあるんだから」と、お綱を手招きして、橋の下を覗いた

たかと思うと、低い声で、

「三次——」と呼んだ。

返辞はなかつたがその代りに、ギーと出てきた剣尖船、頬冠りの男が黙々と動いた。

役方の提灯が来た頃には、お綱と孫兵衛をのせた剣尖船、堀尻を南にそれて、櫓力いッぱい木津川をサツサと下っている。

あがった所は住吉村、森囲いで紅から塗の豪家、三次すなわち主らしいが、何の稼業か分らない。湯殿から出て、空腹を満たして、話していると夜が明けた。

「——お先に、今夜のお礼をいっておきますよ。わたしたち仲間の紋切形で、仕事をするとその場から、パイと百里や二百里は飛びますからね——お前さんも、たまには江戸へ息抜きにおいでなさいな。本郷妻恋一丁目、門垣根に百日紅があつて、挿花の師匠の若後家と聞けばすぐ知れますよ。エエ、それがわたしの化身なの」

お十夜にこういって、お綱はその日昼いッぱい寝る。翌晩も、夜はブラリと出だして、昼寝する。なるほど、これではお嫁になれない性。

と思うと、四日目か、五日目。

朝風呂につかつて、厚化粧して、臍脂を点じて、髪も衣裳もそツくり直した見返りお綱。パチンと紺土佐の日傘を開いて、住吉村から出て行った。

どこへ行くのか、何を目星か、縦から見ても横から見ても、掏摸とは思えぬ品のよい御寮人様。

四天王寺の日除地、この間までの桃畑が、掛け小屋御免で、道頓堀を掬ってきたような雑鬧だ。

日和はいいし、梅若葉に幟の風、木戸番は足の呼び合いに声をからしている。

名古屋八の物真似一座を筆頭に辻能、豊後節の立て看板。野天をみると、江戸上の曲独楽に志道軒の出店。そうかと思うと、呑み棒、飴吹き、ビイドロ細工、女力士と熊の角力の見世物などもある。

「さあ、いらはいいらはい。ナガサキ南京手品ある。太夫さん、椿嬢、蓮紅嬢かけ合いの槍投げ、火を放って籠抜けやる。看板に嘘ない」

唐人ぶりが珍らしいので、この前がまた大変な人ばかりだった。

「変つてやがる、べらぼうな入りだな、ちよつとのぞいて見ようかしら？　だが、待てよ……」

押し揉まれながら迷っていたのは、笠を首にかけた待乳の多市、片手で人を防いでいるが、片手は懐中の前を離さない。

親分の銀五郎は、今日も蜂須賀の蔵屋敷と下屋敷の方へお百度詣りだ。例の、阿

波入りのため、便乗する関船手形、せきぶねてがた 入国御免切手、にゆうこくごめんきつて 二つを手に入れなければならぬので。

願書を出す、身元がいる、五人組証明をとられる、白洲で調べをくう、大変な手数。てかず 元は関船手形だけですんだ。こう厳密ではなかった。それにはわけがある。阿波の鎖国、さこく 徳川幕府の凝視——。だから銀五郎の用があった、押しても渡りたい密境だった。

埒があくまで、多市は用なし、「たまにやブラついて来い」とおつ放されたが、懐中
ちうち にはちよつと重目な預り物、後生大事にかかえているので、肚から楽しむ気になれない。
「おつと、それどころじゃねえ」すぐ性根しょうねになった。「この大金、もしものことがあつた日にや、お眼がねで供をしてきた正直多市たいちがどうなるんだ」とうとう南京手品なんきんあきぢを諦めて歩きだした。

そして、西重門にしじゅうもんの側かわへ寄ろうとすると、楼門ろうもんの内から、ゾロゾロ吐き出されてくる参詣人の中で、

「アー」と軽い叫びがする。

ひよいと見ると、上品づくりのお嬢様。揉みにじられた上、よろよろと、のめってきた。「あぶねえ！」

思わず支えて、多市が手を出すと、ポンと日傘が来た。女の体は風鳥のように、胸を掠つて後ろへ抜ける。

「ア、もし」

手に残された日傘をつかんで、多市が呼んだ。

女はもう五、六間。小走りに過ぎていたが、ふりかえつて、ニツコリ笑った。——そのニツコリがまたばかに絢爛、菊之丞の舞台顔を明りで見よう。

「もし、これを、傘を——」

「ア」女は遠くでうなずいた。

「いいんですよ」

「あれ……」

味な気もしたがまだ解せない。

「よかアねえ、女持ちだ、貰ったところで始末に困ら」と、身を動かした時初めて気がついた。

自分のふところから、晒木綿がダラリと二本はみだしている。
二重に巻いた腹巻を、刃味も凄く夕テに裂いた剃刀の切れ口。

「あ！ 畜生ッ」

逆づかみにした日傘をふって、眼色をかえた待乳の多市は、まっしぐらに駈けだした。

「スリだ、スリだスリだ！」

「ちぼ！ ちぼッ！」

人の声だか自分の声だか分らない。西門唐門のまわり、七堂伽藍を狂気のように走り巡った。と、出会い頭に、猫門の前で、バツタリぶつかった男が、

「おい、待ちな」と、軽く腰帯を取った。

「それどころじゃねえッ」

「まあ落ちつけよ、手配が肝腎だ、そうあがつて騒いだところで、めったに捕まるものじゃねえ」

「何だい、てめえは」

「これだ」ふところを覗かせた。紺房の十手がある。「目明し」と聞くと、多市は何思ったか、振りきって、また一散にそれてしまった。

「妙な奴だ、手配をしてやるといふのにズレちまった。はてな？ ……」目明しの万吉、また何か幻想を描いて、根よくそこらを歩きだした。

堂塔は淡くぼかされて、人氣もない天王寺の夕闇を、白い紙屑が舞っている。

日傘が一本落ちていた、——破れた女持ちの傘。

それを拾って、西門に立ったのが目明しの万吉で、

「ここだナ、ここで女がこう行つて、弾みに、ポンと男へ傘をつかませたんだな。だが、何のためにだろう。アア手を空かせて体と心の両隙を狙つたのか」仕方身ぶり、人の話と現場をしきりに考え合せている。

「とすると、こいつア上方のちぼ流でねえ、江戸の掬摸だ。定めし小粒でもないだろうに、盗られた奴も変つている、何だつて俺をふりきつて逃げたのか……ウーム、こいつあどうもそのほうがよっぽどネタになるかもしれないねえ」

傘をほうって抜け道へ出る。堺尻りの町駕、島の内まで約束したが、気が變つて五櫓の富十郎を一幕のぞき、ブラブラ歩いて帰つてきた。

「おや、あの男は？」と、その途中で、万吉の顔の筋がピンとした。待乳の多市にまぎれなしだ、疲れてしょんぼりした影が、渡辺町の旅籠土筆屋へスウと入った。

一息抜いたところで万吉は後ろからこつそり、

「ご免よ」と主の和平に目じらせして、梯子下の道具部屋にしゃがみこむ。

「ふム、六日も前から泊っているのか、宿帳はこれだな、どれ……」ペラペラとめくって、自分の耳朶をギョツとつねった。何か苦しい考え事をする時に万吉がよくやる癖だった。「連れの、銀五郎というのは？」

「阿波へ入る用向きがあるとかで手形をとるため、毎日蜂須賀様のお役目筋へ手を廻していましたが、どうも御免切手が下りない様子で、今日は早くからお戻りでございました」

「そうか、ちよつと二階を借りてえな」

「ええ、よろしゅうございますとも」

「二番の部屋といったつけな」裏梯子を上がって隣り座敷へ、そつと細目の隙見、鰻なりに寝そべっている。

「多市、そう案じることはねえ」という声は唐草銀五郎のほう。

「一晚派手にやったと思やあ三百両は安いもの、路銀は早打で取り寄せる。……だが、お千絵様から頼まれた大事な手紙、ありや、てめえが別に袷の襟へ縫い込んでいた筈だつかな」

「さ、親分には、そういつけられていたんですが、つい、紙入れと一緒にしておきまし

たので……」

「なに」初めて少し色をなして、

「じゃ、お千絵様の手紙も一緒に掏すられたのか。ウーム、こいつア大弱りだ」とガツクリする。

「もし、親分……」多市はおろおろ、「今度の四国渡りに、あれをなくしちや、お千絵様のご実父が生きていたにしろはるばる来た甲斐のねえことは、ほんくらな多市にも分つております、ドジを踏んだお詫わびに、わっしはこれから夜昼なしに江戸へ戻つて、もう一度お千絵様から手紙をちようだいしてきますから、どうか、それで虫をこらえておくんなさいまし」

「才才、その元気がありや何よりのこと。じゃこうしよう、実は関船せきぶねの便乗もとうとう今日で駄目になっている」

「えつ、阿波入りの御免切手は下りませんか」

「何しろ殿しい馬鹿詮議せんぎで、下手へたをするとこつちの秘密を気取けどられそうなんだ。そこで俺は、道を代えて讃岐境さぬきざかいから、山越えで阿波へ入りこむつもり、一足先に多度津たどつまで延のしているから、てめえは早速、お千絵様からもう一通貰もらつてきてくれ、それが今度の眼目だ

からな」

「そうきまったら、わっしはすぐに飛び出すと致します」

「ま、暁あけの早立ちとしたらよからう」

「一時は、死んでお詫びとまで思ったところ、体を粉こにするぐらいは、何の糸瓜へちまでもありません」氣を持ち直すと江戸者はお先一途す。にわかにな気づいた多市、ポンポンと手を叩いて「オイ、姐ねえさん姐さん、誰でもいいや、お急ぎの夜立ちだ、草鞋わらじに握り飯を揃えてくんねえ」

その間に目明しの万吉、トントンと降りてきた。

「ア、お帰りで」折よく、帳場ちやうば格子ごうしへ投げこまれた飛脚ひきやくづつ包みを持ちながら、和平がそこへ送りに出ると、目早く万吉が眸ひとみを光らせて、

「何だい、今の三度屋どやは？」

「へエ、例のお客様へ届いた飛脚で」

「どれ」いや応なく取って見ると、桐油紙とうゆぐるみ、上に唐草銀五郎様、出だし人ての名は裏に小さく「行き交かいの女より」としてあった。

「お役で封を切る！」と、ぷつぷつ——切った麻糸からすべり落ちたのは、印伝いんでん革がわの大

型紙入れ、まさしく多市の掏すられた品物だ。

「悪い洒落しやれをする女だ……」と苦笑にがわらいた目明し万吉。江戸のスリ気質かたぎには、ほかの盗児にやにない一種の洒落気しやれけや小義理の固いところがあると聞いていたのを思い合せて、

「ははあ、その筆法かな」とうなずいた。で大急ぎに、飛脚包みから出た紙入れをあらためてみると、案のごとく、金はなかつたが、一通の手紙ひそが中に潜ひそんでいた。

丈夫な生紙きかみの二重封じ、しかし、その封じ目は破れていた。お綱が読んだものらしい。柳りゆうえ

——お父上様おんみつやくが阿波へお入り遊あそばしてから蔭膳かげぜんの日も早や十年でござります。柳りゆうえ當いでは隠密役御法則おんみつやくをふんで、十年御帰府ごきふなき父上を死亡と見なし、権現様以来の甲こ賀家うがけも遂に断絶の日が近づきました——

という意味がこの手紙の書きだしで、流麗りゆうれいな女の手跡しゆせきが、順に解ほぐれゆくに従って、万吉の眼底異様な光を帯びてきた。

——千絵も十九となりました、男でない私は絶家ぜっけの御下命をどうすることもできません。けれど私は、九ツの時お別れした父上様おんみつやくが、まだ御存命と信じられてなりません。夢にも世をお去り遊あそばしたとは思えません。そこで乳母うぼの兄唐草銀五郎が、この手紙を持って、

命がけの阿波入りをしてくれます。もし幸いに御無事な上これがお手に入りましたら、甲賀家の断絶も僅かにその命脈めいみやくを延ばすことができます——

ここまで読みかけると、万吉の胸が処女のように躍った。彼にも足かけ十年がしんしやうた臥薪嘗胆おじの事件がある。それへ一縷ゆるの曙光しやうこうを見出したのだ。

「江戸で甲賀を名乗る家といえは駿河台するがだいの墨屋敷すみやしき、隠密組おんみつぐみの宗家そうけといわれる甲賀世阿弥よあみだ……ウウム、その世阿弥が十年前に阿波へ入ったきり行方不明？ こいつアいよいよ他人事ひとごとじゃあない」と、眼を光らして次の文字を辿りかけると、トントントンと梯子段の音。二階から、唐草銀五郎が多市を送って降りてきた。

「おや、もうお支度がおすみで……」帳場格子の前へ、主の和平や番頭も頭を並べて送りだす。万吉はいちはやく、手紙を抱えて梯子裏はしじへ身を隠した。

「じゃ、気をつけて行けよ」と銀五郎の声。多市は元氣よく、道中差どうちゆうざしをおとし菅笠すががさを持って、

「では親分、行つてまいります。道中はお氣遣きづかいなく、やがて多度津たどつの港で落ち合います」土筆屋つくしやの明りを後に旅立ってしまった。と一緒に万吉も、裏から草履ぞうりを突ツかけて、溝どの多い横丁を鼠走ねずみばしりに駆け抜けている。

「この手紙一本のために、あの男を、江戸まで引つ返させるのは、いくら冷てえ目明しても少し気の毒だ。事情を話して返してやろう、だが、こっちの知りたいたい所も充分に聞かなくちや埋まらねえ。常木先生を初め俵様、ご恩を蒙る俺までが一生仕事の阿波の秘密！ 才、やつ、大股になつて急ぎだしたな」

町通りを行き過ぎた多市を見かけて、万吉もヒラリと土蔵の蔭を離れた。手紙と交換に阿波入りの事情や甲賀世阿弥の身の上などを探り取ろうという了簡。

「まだこの辺では人目に立つ、もう少し淋しい所まで歩かせて、今夜こそ、天王寺で逃げだされたような下手をやらずに……」などと加減をしてゆくうちに、天満岸を真つすぐに、東奉行所の前を抜けて、京橋口のとまえ、八丁余りの松並木——お誂えの淋しさである。

「オーイ、江戸の人」と呼びかけようとしたが、まだ逃げられる懼れがあるので、少しづつ万吉が追い着きだして行くと、しまった！ 一足違いに前へ行く多市の影へ、何か、不意にキラリツと青光りの一閃！ 横から飛びかかつて低く流れた。

「わつツ」と突然、多市の声だ。斬られたと見えて苦しそう、京橋堤をタタタタと逃げ転んできた。と、その影を追い慕つて、波を泳いでくるような銀蛇が見えた。無論業刀の切ツ尖である、はツと思うと二の太刀が動いたらしく、途端に、多市は夢中になつて天満

の川波めがけてザブンと躍り込んでしまった。

「ちえツ……」という舌打ちが聞こえた。闇を漂よってくる血の香がプーンと面を衝つ。

「畜生！」万吉の眼は炯々となり、五体はブルブルツとふるえてきた。右手に何かを固くつかんで身を屈ませて行くが早いのか、

「御用ツ！」とばかり一足跳び。

腕の限りヒュツと投げた。方円流二丈の捕縄は、闇をあやまたず十夜頭巾の人影へ

クルクルと巻きついた。——しかし相手は驚かない、絡んだ縄を左に巻きつけ、静かに、

「生意気な手先め、サ、構つてやるから寄つてこい」右手の大刀を片手にふりかぶつた。

「ムツ！」と万吉、毛穴の膏を絞つたが、まるで腕が違っている、こつちで投げた捕縄

は向うの武器、見る間にズルズルと魔刀の下へ引き寄せられる。

和蘭陀カルタ

辻斬り商売のお十夜孫兵衛、本名は関屋孫兵衛である。もと阿波の国川島の原土、丹石流の据物斬りに非凡な技をもち、風采もなかなか立派だが惜しむらく、女慾に

かけても異常という性質がある。

阿波の原土はらしというのは、他領の郷土ごうしとも違い、蜂須賀家の祖、小六家政ころうくいえまさが入国の当時、諸方から、昔なじみの浪人が仕官を求めてウヨウヨと集まり、その際限なき浪人の処置に窮して、未開の山地を割りあてた。これが半農半武士に住みついて、蜂須賀名物の原土となり、軍陣の時は鉄砲二次の槍備えにあてられ、平時の格式は郷高取ごうたかとり、無論、謁見えっけんをも宥ゆるされて、慄悍ひょうかんなこと、武芸者の多く出ることはその特色。なかには、原土千石といわれるほどの豪族もある。

その千石ほどの家柄を潰つぶして、三都諸国を流浪のあげく、この春頃から御番城ごばんじょうのある大阪の河岸かしすじを夜な夜な脅おびやかしているお十夜孫兵衛。

京橋口の松並木で、目明し万吉を子供あつかいになぶった上、「さ、召捕めしとらねえのか」と嘲あざけりながら、斬ると見せた太刀を鞘さやに納め、針金のように、ピンと張った捕繩の端を一ひ尋とひろ手たぐ繰とつてグンと引いた。

「くそウ！」と万吉は死力でこらえる。

目明し仲間でも、少しは顔を売ったかれが、捕繩を捨てて逃げたといわれては男のすたりだ。——そこを狙つて孫兵衛がポンと放したから他愛たわいもなく、

「あッ」と万吉がよろけ足をふんだ、と同時に、生き物のようにはね返ってきた縄尻が、どうする間もなくグルグルと巻きついた。

そして、縛るのが商売の目明し万吉、あべこべに孫兵衛のために捻じつけられ、両手両足、ギリギリ巻きにくくられてしまった。

「殺せ、殺してくれ」とかれが歯齧みをするのを聞き流して、暗い川面をのぞいていた孫兵衛、一つ二つ軽く手を鳴らすと、いつかの晩のような約束で、三次の船がギイと寄ってきた。

「兄貴、何をバタクサしていたのよ！」と川の中から三次がいう。

「目明しを一匹召捕ったのだ。住吉村へつれて行って、四、五日飼ってみようと思つてな」
「何だ、つまらねえ真似を……、鈴虫なら啼きもするが、目明しなんざ可愛らしくもねえ。いッそ川の中へ蹴転がしてしまいなせえ」

「まあいいわ、手先や同心の内幕を聞くのも慰みだし、第一お前の渡世のためだ。ところで三次、今夜おれはいろは茶屋で泊まるから、こいつを乗せて先に帰ってくれないか」

「いい心掛けにはなりてえものだ。お人よしの三次を放つて、いろは茶屋のお品とたくさんぶざけておいでなさい」

「妬やくなよ、明日は早く帰るから」

「まあ体だけをお大事に」

「ぼかにするな、はははは」と、孫兵衛、くすぐったい笑いを残して、雪踏せったの音、チャラリ、チャラリ……と闇に消える。

その晩から、万吉は、森囲いの怪しい家、住吉村の三次の住家すみかへ監禁された。縄目を解かれてほうり上げられた所は、屋根裏を仕切ったような空部屋あきべやである。夜が明けて、鉄格子から流れこむ光に見廻すと、太い綱ロツブ、帆車ほぐるま、海図などの船具ふなぐや鉄砲などが天井裏にまつてある。

「あ！ ここは荷拔屋ぬきやの巢だな」と万吉は眼をみはつた。荷拔屋というのは、御禁制の密貿易をやる輩やからのことで、年に一度か二年目ごとに、仲間で集めた御法度ごはつとの品を異国船いこくせんに売り込むのが商売。この家にいる甲比丹かびたんの三次は、すなわちその荷拔屋ぬきやの才さい取とりなのだ。

お十夜の孫兵衛に、辻斬りをすすめたのもこの三次。懐ふところの金よりはその腰の刀を奪うのが目的である。当時、日本刀は荷拔屋ぬきやの一番儲もちかる品で、また一番買い占めにくい品でもあった。

そこで辻斬りは役人を五里霧中に迷わせ、女色の深い孫兵衛をしていろは茶屋に堪能たんのう

させる方法となった。

だが万吉には、こんな者を縛ってみる気は起こらない。彼の目の前には、もツともツと大きなやまがブラ下がつている。あの手紙から暗示を得た、十年苦節の大疑獄、十手の先ツぽで天下を沸かせるような功名心に燃えている。

「ええ忌々しい、何とかしてここを抜け出す工夫はねえかしら……」

その悶えもいたずらに、三日とたち四日もすでに真夜中に近い頃――。

「おや？ ……」思わず耳を澄ましていると、下の部屋からガヤガヤと大勢な人声。そして時々、ピタピタ、と何か畳を打つような不思議な音がするのだった。

妙な物音？ 階下で何が始まったのかしらと、万吉は、無駄とは知りながら、また昨日

も一昨日も試みた努力を、真つ暗な部屋でくり返した。

出口は錠前、窓は鉄格子、半刻あまりも押したり探ったりしているうち、隅の床板に、指が一本入るくらいな穴を見つけた。

「しめた」とも思わず、何気なく引つ掛けて持ち上げると、偶然、四角な板がポンと開いた。階下を隔てている天井裏、そつと降りて見ると、荷拔屋の贓品がだいぶ隠匿して

あつた。

そんな物には目もくれない。明りのさしている方へ、猫のように匍はい出した。と、一段低い所に、金網張りの欄間らんまがあつて、ひよいと覗のぞくと下の部屋も人間もすツかり見える。

何をしているのかと思うと、三次を初め仲間の輩やからが、きれいな札を撒まき散らし、小判小粒の金銀を積んで、和蘭陀加留多おらんだカルタの手なぐさみをしている。

「何だ、この音か……」と馬鹿げてしまつたが、下で夢中なところを幸いに、万吉そのまま寝そべつて、一応彼らの人相をよく見覚えておくのも無駄ではなからうと考えた。

頭数は五人である。店者風たなもののふうの由造よしぞう、東条隼人とうじょうはやとと呼ばれる侍、十徳じつとくの老人、為ためという若者、それに甲比丹かびたんの三次、中でも三次は、潮焦しおやけのした皮膚に眼の鋭いところ隼はやぶさという感じがする。

「どいつもまるで血眼ちまなこだ。ウム、この分では明日あしたは疲れる、その隙に天井裏を引ツ剥はいで逃げ出すには究くつきよう竟きやうだ」とは万吉がうなずいた腹の底。

案あんじようの定、慾心の修羅場しゆらばはなかなかやまなかつた。鶏鳴けいめいを知らず、陽ひが照りだしたのを知らず、とうとう明日あしたになつても、蠟燭ろうそくを継いでそこだけの夜を守り、いよいよ悪戯わるざがたけなわになる。

そのうち誰からか、きまりものの苦情が出て、何かガヤガヤもめだしたが、不意に向う側の板戸が外からガラリと開いて、度胆どきもを抜くような太陽の光がそこから流れこむ。

「誰だ！」ぎよツとした五人の眼が、期せずして振りかえると、

「驚くなよ、お十夜だ」提げ刀さがたなになつて、孫兵衛がのっそり五日目に帰つてきた。と、その後ろからまた一人、まばゆいばかりな厚帯あつおびに振袖姿のお嬢様、玉虫色の口紅をしていう言葉はあられもなく、

「おや、とんだところをびつくりさせて悪かつたね」とそこへ来て、大の男たちにひるみもなく、小判や小粒の燦めく中へフワリと風を薫かおらせて坐つた。

「誰かと思つたら、お綱つなさんじゃねえか」

三次が眼をみはると後の四人も、加留多カルタの紛ふん紘ぬんを忘れて、しばらくはこの一輪りんの馥ふく郁くさに疲れた瞳を吸われている。

「この間の口ぶりでは、巧うまく行つたら、すぐ江戸へ舞い戻るような話だったが、すると、あの仕事はどうとう失策物しくじりものになつたのか」

「どう致しまして、そんなわたしじゃありません」とお綱は笑つて――。「思う通りに行つたから、ついでに上方見物としやれのめし、道頓堀の五櫓やぐらも門のき並なみのぞいて、大家たいけのお

嬢様に納まりながら、昨日は富士郎芝居の役者や男衆が七、八人も取巻きで、島の内の菖蒲茶屋、あそこで存分に遊び飽きておりましたのさ」

「そこでバツタリおれが出会ったわけ——」とすぐ孫兵衛が話を足すと、一座の中から半畳が出て、

「じゃ、兄貴も一人の筈はない、いろは茶屋のお品か誰かを連れこみで行ったのだろうが」
 「お手の筋だ。しかし、売女のお品と江戸前のお綱とは芥子に牡丹ほどの違いがある。すぐ片ツ方は追いついてしまった」

「おやおや、怖れ入った浮気振り、じゃ昨夜はお綱さんとよろしくあって、見せびらかしにここへ来たという寸法か。何だかこつちは面白くもねえ」

「ところがこのお嬢様、見かけに寄らない心締りで、実はおれも、見事に脛を食っているのだ」

「やれ、それでこつちも、安心した」と笑いくずれている間に、お綱は細い指尖へ、加留多の札を四、五枚取つてながめていた。

「三次さん、これはやっぱり花加留多？」

「長崎から流行つて来たやつさ、異国のものだね」

「面白そうだこと、やって見ようか」

「どうしてどうして、男同士の勝負ごと、はした金ではすまないぜ」

「こればかりじゃ足らないかしら？」帯の間から、手の切れそうな百両の封金をコロリと三つ。五人は思わず膝を退らせ、狡猾な眼色を慾に燃え立たせる。

天井裏では、欄間の金網から猫目を光らしている万吉。「いけねえいけねえ、この様子じゃ、いつになったら奴らが疲れて寝るのだから分らねえ……」と密かに舌打ちをならしていた。

ろくに知りもしない和蘭陀加留多、三次たちのいかさまに手もなく乗って、お綱は他愛なく二百両ほど負けてしまった。

「だいぶ考え込みますね、そつちの番だぜ」

「あいよ」お綱は札を指で弾いて「よくもこう縹織の悪い手ばかり付く……」と、一枚手から抜きかけたが、ちよつと考える様子をして、何の気もなく上眼づかいに天井を見た。と、バツタリ、欄間の隙から下を見ていた万吉の眼とぶつかった。

「おや？」と動じた顔色を見たので、万吉は慌てて首をすくませた。しかし今さら騒ぎだ

しては、かえつてまずいと思つたので苦しい機智、上から皆の手が見えるのを幸いに、お綱の抜きかけている札を打つなと目顔で教えてやった。

「どうしたのよ、じれつてえな」

「まあ待つて……」も一度万吉のほうをチラと見ると、右のを打てという合図、とにかく、その通りにして見ると、思い通りな札が取れた。さあ、それからはトントン拍子、何しろ向うに、敵の手裏てうらを映す鏡があるのだから、思惑おもわく当らざるなしである。たちまち勝ち抜いて場ばしゅう中の金を集めてしまった。

「ああ面白かつた。じゃ、これでおしまい……」お綱は涼しい顔で帯揚げを引き抜き、榧ますで量る程な金銀をザラザラと詰め込み、さつさと体に着けてしまう。

「待て、これでしまいにして堪たまるもんか」と浪人者の東条隼人とうじょうはやとがケチをつけにかかるのを、三次がなだめて、

「まあいいさ……」とめくばせした。

「お綱さんだつて、どうせ三日や四日はご逗留とうりゆうだ。な、その間にや、また幾らでも手合せができるだろうじゃねえか、初心うぶな者にはとかくばかあたりという奴があるものさ……ああ眠い、何しろ今日は寝なくつちやあ……」

へトへトになつて五人がそこへ手枕で転がると、不意に立ち上がったお十夜孫兵衛、いきなり踏込みの押入を開けて、その段から天井裏へ跳び上がり、目明し万吉の襟えりがみをつかんで下へ引き摺ずり降ろした。

「や、この岡おかつ引びきめ、どうしてあんな所へ出てきやがったんだ！」

総立ちになつて騒ぎだしたが、まさか、この男がお綱に勝たせたこととは夢にも思いつかない。ただ岡つ引を憎む凶暴性が勃ぼつぜん然と彼を取りまいたのだ。

「兄貴——」と三次はお十夜の顔を見て「つまらねえ者を引つ張り込んだので、世話がやけてしようがねえ、一体こいつをどうする気だ」

「おれもすツかり忘れていた。ところが、今ひよいと欄らんま間を見たら、金網の蔭に動いていやがったので引き摺り降ろしたのだが……野郎、逃げだす隙すきを狙っていたに違いない」

「面倒くせえし、逃げられでもした日には藪やぶ蛇へびだから、早く片を付けちまっちゃどうだ」
「うん、それじゃ一つ庭先で、丹石流たんせきりゅうの据物斬すえものぎりを見せてやろうか。おい、手を貸

せ！」

寄つてたかつて、腕や襟えりがみを引つつかみ、ズルズルと万吉を庭へ曳ひきだ出した。椎しいの太木、その根へ荒縄で縛りつけ、三次が棒切れでピシピシと撲なぐりつける。

「さ、ぬかせ、てめえはお十夜の兄貴へむかつて、只一人で御用呼ばわりしたくらいだから、この荷拔屋仲間を嗅ぎつけていたに違いねえ。奉行所でも知ってるのだろう、なに、知らねえことがあるものか。さッ、てめえの相棒は誰と誰か、手入れをする謀し合せもあつたろう！ 野郎！ いわねえとこうだぞ！」ピシリッ、ピシリッと皮肉を破る鞭の苦痛を万吉じつとこらえている。しかしその苦痛よりは、最後の一秒間まで、何とか助かる工夫はないかと悶えた。ここで自分が助からねば、せつかく握つた大事件の曙光、再び無明に帰して、常木先生も俵様も終生社会の侮辱に包まれて、不遇の闇に生涯を送らなければなるまい。——と思えばいよいよ命が惜しい。

「駄目だ、こいつア！」三次は棒切れを投げて、「骨を折って口を開かせたところで、大したこともなさそうだ」と孫兵衛の断刀を催促する。お綱だけは、何だか可哀そうに思えた。

「助けておあげな……」おとなしく口を入れた。

「一人や半分の目明しを殺したところで、大びらに悪事ができるわけじゃなし……ね、皆さん、後生だから助けておやりよ」

「とんでもねえこつた！」三次が首を振った。

「こいつを返しや、俺たちの根城ねじろが分る、すぐ御用提灯ごようちんの鈴すずなりで、逆襲さかよせのくるのは知れている。兄貴、早く殺やつてしまわねえとんだことになるぜ」

「うん！」とその注意にうなずいた孫兵衛は、血脂ちあぶらは古く鈍にえの色は生新なましい、そぼろ助すけ広けひろの一刀をギリりと抜いて鞘さやを縁側えんがわへ残し、右手みぎての雫しずくの垂れそうなのを引っさげて、しずしずと椎しいの下へ歩みだした。

天満浪人てんまろうにん

役目不心得につきお咎とがめ——という不名誉な譴けんせき責せきのもとに、退役たいやく同様な身の七年間、鳩はとを飼かつて、鳩を相手に暮らしてきた同心である。

姓なは俵たわら、名は一八郎、三十四、五の男盛さかり、九条村の閑宅かんたくにこもつて以来、鳩使とらひとなりすまし、京の比叡ひえい、飾磨しつかまの浜、遠くは丹波あたりまで出かけて、手飼てがいの鳩を放して自在に馴らしている。

のみならず俵同心、近頃ではこの鳩を、わが分身のごとく操あやつり、腹心の人、常木つねぎ鴻山こうざんの所へ文使ふみづかいさせたり、万吉を呼びにやつたり、妹の所へ飛ばせたりする。

妹はお鈴という美人、身元を隠して、かなり前から、安治川岸の蜂須賀阿波守、その下屋敷へ住み込んでいる。何の手段か、何の便りを頻々と交わしているのか、いつも密書の使者が鳩だけに、誰あつて気がつく者はないのである。

「旦那様、お鈴様から御返事が……」と今も召使の東助爺が、柄の小さな家鳩を拳にのせて、縁の端から一八郎の書屋を覗いた。

「うむ、来たか……」待ちわびていたらしい一八郎はすぐ小鳩の足の蝶結びを解いて、庭の巢箱へパツと放し、机の前に戻つて、その雁皮紙の皺をのばした。

「東助……」読み終つて嬉しそうに、

「いよいよ、阿波守が帰国の時、お鈴も供に加えられて、徳島城の奥勤めに移りそうじゃ」「おお、それはよいご都合でござります。したが、そうなりますと使いの鳩も、あの鳴門の海を越えて行き来せねばなりませんな」

「自信がある。あれくらいな距離は何でもない。どうじゃ爺、これほど自在に鳩を使う者も、またここに着眼した者も、一八郎をおいて余人にはあるまいが」例によつて、そろそろ鳩談義の味噲が出そうな口ぶり。

「へへへへ」毎度のことなので、東助もツイ笑つてしまった。

「折角のご自慢でいらつしやいますが、この老爺は、種を存じておりますので、実は余り感服いたしませぬ」

「ばかなことを、種なんぞと、誰に聞いた」

「天満のお屋敷で伺いましたので。はい、常木様がおつしやいました。伝書鳩を古く使つたのはたしか唐の張九齡が元祖じや、一八郎が初めではないと」

「これはいかん、さようなことをおつしやつたか」

「はい、虫蝕本の『八閩通志』、『還家抄』などと申す書にもいろいろ載っているところでござります」

「あははははは、もうよい、いうないうな」

「いつも旦那様の天狗講釈にあてられておりますので、その鬱憤によく伺つておきましたので……」主従、笑いに紛れている門へ、女客の訪ないがする。東助が出てみると、目明し万吉の女房のお吉であった。何か心配事がありそうに、悄悄々と通されて一八郎の前へ坐つた。

「いかがいたした、たいそう沈んでいるではないか」

「はい」お吉は、ふだん世話になりがちな礼を述べて、「実は旦那様、万吉が、今日で五

日も宅へ帰りませぬ。このところ、御用なしだといつていたのに、一体どうしたものでございましょう」

「ふうむ……」と聞いていたが機嫌が悪い。

「よろしくない心配だな。目明しの居所知らず、または岡ツ引の起き抜け千里などと申して、職業がら是非ないことだ。それを四日や五日帰らぬとて、すぐ女房が妬くようでは、万吉の十手が錆るといふものだ」

一八郎は叱つたが、だんだんに、お吉が話すところを聞くと、どうも叱つたほうが少し無理らしい。

京橋口きやうばしぐちで、万吉の名が彫つてある十手を拾つて、届けてくれた者がある。その前夜、土筆屋つくしやで見かけたという者もあるので訊き糺すと、江戸の客をつけて行つたという話。また、その客の連れ唐草銀五郎という者も、多度津へ立つた後なので、何の事件か皆目知れず、前後の事情、どうも万吉の凶事ではないかという——お吉の心配なのであつた。

「なるほど——」一八郎の顔色も少し怪しくなつた。

「ふう……：：～」

お吉を帰すと、彼はやがて、選りすぐつた小鳩を一羽ふところに入れ、初夏はつなつの陽がか

がやかしい青田や梨の木畑の道を急いで、異人墓の丘へ登って行った。

異人墓の丘に立つて、汗を拭いた一八郎。

「うむ、いいな……」思わず眸を四方へ馳せた。紺青の海遠く、淡路の島影は夢のよう。すぐ近くには川口の濔標、青嵐の吹く住吉道を日傘の色も動いて行く。

そこで、パツと鳩を放した――。

鳩は一八郎の意志をうけたように舞い揚がった。手を翳して見ていると、初めは御城番の方へ直線にツ―と行ったが弧を描いて南へ返り、ハタハタと住吉村の方角へ飛び去った。

すると、異人墓の蔭で不意に声があった。

「あつ、伝書鳩――」

「俵殿ではないか」ひよいと見ると、荒目の編笠に薄羽織、風采のよい四十前後の武士。

「おお、これは常木先生」

「相変らず御熱心だの」と笠の裡で微笑した。

「いや、何……」と一八郎は鳩の行方を気にしながら「実は先生、万吉の身に凶変が

起りましてな」

「ほう、それは心許こころもとない……」

腰を下ろした侍は、元天満てんまよりき与力の常木鴻山こうざん、在役当時の上役で、同じ時に、同じ譴けんせ責せきをうけた人。以来不遇の隠士いんし同士、互に心をあわせて、密かにある大事をのぞんでい
る仲であった。

二人の失脚は、宝曆ほうれきへん変の折だった。——明和二年の今から数えて八年前、京都で起こ
ったあの騒動——竹内たけのうちしきぶ式部の密謀が破れ、公卿くげ十七家の閉門を見、式部は遠流おんる、門人
ことごとく罪科ざいかになつて解決した——あの事件の時、天満組てんまぐみの常木鴻山も佞たわら同心もすば
らしい活躍をした。

が、その後が悪かった。余り二人の手腕が切れ過ぎて禍わざわいとなつた。

「これは根が深いぞ——」と初め鴻山は考えたのである。

「倒幕の大事などが、長袖ちようしゆうの神学者や、公卿くげばかりで謀はかれるものではない。黒幕があ
る！ 傀儡かいらいし師がある！ たしかにある！」と固く信じた。

「あるとすれば——どこの大名であろう？ 無論西国さいこく、一体西国大名は、機おりさえあれば
風雲に動きやすい。島津か、毛利か。いやことによるともつと意外な……」鴻山の苦心へ、

俵同心や万吉も、骨身を惜しまずいろいろな機密を探つて耳に入れた。

阿波二十五万石の蜂須賀重喜、まだ若くはあるが英邁な氣質、うちに勤王の思想を包み、家士の研学隆武にも怠りがない、——前には式部を密かに招いて説を聞き、領土の浜では軍船を仕立てて陣練の稽古をしたともいう噂である。

「ウーム、黒幕は海の向うだ」鴻山は意を得たりとした。「阿波は由来謎の国だ。金があつて武力が精銳、そして、秘密を包むに都合のいい国、一朝淡路を足がかりとして大阪を囹り、京へ根を張る時は、西国大名と呼応して屈強な立場——捨ておいては一大事である」すぐ意見を書いて城代酒井侯へ差しだした。

ところが、御城番、町奉行、所司代誰あつて耳を藉す者なく、彼の上書は嘲笑の種となつて突ツ返された。つまり、どれもこれも事勿れ主義。

「そんな馬鹿げた後ろ楯にはなりませんまい。阿波は松平の御姓を賜わり、代々、将軍のお名の一字をいただくほどな家筋じゃ」

「だからいけない！」鴻山はいよいよ説を持した。「それほど、阿波の力が大きいのだ、将軍家でも怖れているのだ」と、周囲に構わず、俵同心に探りの手を入れさせた。が、その活動に移らぬうちに、二人は譴責！ 出仕に及ばず——という形式をとられた。

「二人とも天狗が過ぎた」「名声に酔って、いわゆる妄想狂になつたのだろう」などと喧しい周囲の侮声に耳を掩つて、鴻山と一八郎はなおその信念はまげず、それから七年、ただ阿波の内情を探ることのみ腐心してきた。

重宝なのは目明し万吉。

彼は身分が軽いので、咎めもなく、今でも東奉行付きで、十手をとつているところから、何か阿波のことを聞きこむとすぐ知らせてくる。今では二人にとってまたなき忠実者だ。

その万吉が行方知れず——常木鴻山も驚いた。一八郎は、今放した鳩を手づるに、彼の居所を突きとめて見せるといった。

「では、及ばずながらこのほうも手を貸そう」と鴻山は立ち上がったが、何か思いだしてスタスタと異人墓の蔭へ戻つて行つた。

そこに一人の連れがいた。武士ともつかず医者ともつかぬ風采の男。墓の蘭字や形を写していたが、鴻山から事情を話され、後について一八郎の側へやって来た。

「わしは江戸の平賀源内、伝書鳩は面白うござるな、ご迷惑でも一つご同伴願いたい」
また一人の加勢が殖えて三人連れ、異人墓の丘を下りて、鳩の飛んだ方角へ急ぎだした。

一方、住吉村の木立の中、荷拔屋仲間の隠れ屋敷。

そぼろ助広の大刀が、椎の樹の下——万吉の頭の上に——きらりと三尺の虹を描いた。

真ツ二つ！ 孫兵衛の息と手が、さつと放たれようとした刹那、甲比丹の三次やほかの者たちと、こつちの縁側にいた見返りお綱が、

「そんな据物斬りがあるものか！」

駈けだして行って、お十夜の手を遮ってしまった。

「危ねえツ、何を邪魔するんだ」

「だって、罪じゃあないか」咎めるような美しい眼、「据物斬りを見せるといったくせに、自由の利かない人間をバツサリなんぞは曲がない」

「いやにお前は底い立てするな」

「それや悪党にだって、少しぐらいの慈悲心はあろうじゃないか。ね、縄を解いて、暴れさせて、対つてくるところを斬つたらどう？」

「どつちにしたつて同じことだ」

「いいえ、ただね、私の気がすむんだよ。見ても見いいし、罪でないような気がするだけ」

いつているうちに帯から抜いた懐剣！ 万吉の縄目をぷつつり切つて、

「さ、これを貸してあげるから、お前さんも男らしく……」と懐剣の柄を握らせてやった。和蘭陀加留多の返礼だよ——という眼でじつと渡してやる。

「ありがとう！」

逆手にとつて万吉がパツと立つた。お綱が蝶のように飛び離れると一緒に、三次、隼人、為なども、腰を立てて凶猛な気配りになる。

「なるほど、このほうが気合いがのるわえ！」

お十夜の声！ 椎の下からスルスルと延びてくる助広の無気味さ。刀の柄糸を捻りぎみに、右手は深く左手は浅く、刀背に蛇眼をすえて寄る平入身——。

万吉は膏の汗。ジリ、ジリ……と一寸づまりに後退つた。

「どうせ命はねえ！」

覚悟はしている。だが、あの妙な心意気の女に、懐の紙入れ——大事な手紙の入っている——あれだけを頼んで俵様に届けたいが、と思つて気を配つたが、素早いお綱はその時はもうこの庭に見えなかった。

「ええ、やぶれかぶれだッ」と、万吉が踏み止まつて、怖ろしい眼を相手に射つけた。ピ

夕と孫兵衛の切ッ尖も止まる……。

その時、風ではない——樵の若葉にバタバタという大きな羽ばたき。一羽の鳩だ。

「あつ、俺を探しにきた！」

と万吉の眼が上へそれるや否、孫兵衛の刃がきつと斜めに走った。切ッ尖に胸を掠られて、万吉はドンと仰向けになったが、はね返って栗鼠のように木の幹を楯にとった。

「野郎！」お十夜の跳びかかったのも真に迅い。白刃と人、渦になってグルグル木の幹を巡り廻った。と、屋根から斜めに落ちてきた今の小鳩、何かに狂いだしたように、そぼろ助広の切ッ尖に飛びまどつて離れない——。

「万吉、しつかりいたせ！」

塀の上に、突然な声があった。

「あつ、旦那」

「一八郎が参つたぞツ、もう大丈夫」

ポンと飛び降りてきた俵同心、力をあわせてお十夜の側面へかかる。わつと、総立ちになったのは甲比丹の三次をはじめ荷拔屋の誰彼、脇差を閃かす者、戸惑う者、かけこんで鎗を押し取る者。据物斬りの見物が、意外な血をみずから見ることになりだした。

するとまた、木戸を蹴破つてきた一人の助太刀、常木鴻山である。常木流の捕縄は自他共にゆるす名人。しかし今は捕るより斬れの場合として、抜くやまたたく由造を薙ぎ、浪人者の隼人の腕を斬り落した。

そればかりか、塀の外では、

「御用ツ、御用ツ」ときかんなかけ声。いよいよ輩は度を失い、孫兵衛一人の悪戦加わるばかりである。

だが、役付でない鴻山や一八郎が、かく早速な捕手を連れてきたのも不審——と外を見ると、捕手はいない、すぐ前の木立の蔭に、たつた一人の男が腰をかけている。

細い丁髷、細い顎。異人墓から同行してきた平賀源内である。医者で作者で侍で商家だが、一つ武芸者ではなかりし源内、快刀乱麻の手伝いはできないので、時々そこから、

「御用ツ、御用ツ」

といつては、支那扇子で顎を煽いでいる。

荷拔屋敷へ真昼の不意を襲った剣戟の旋風は、一瞬の間に去ってしまった。困いの

中に、喚きや雑音の騒動がハタとやむと、後はまたもとに戻ってソヨともしない森の静けさ——住吉村の奥らしく、ジーツと気懶い蝉時雨。

「源内どの！ 源内殿！」

彼方で呼ぶ声に腰を上げて、平賀源内、唐人扇子をパチリとつぼめて帯へ差し、

「ははあ、片づいたとみえるな」

踏み壊された木戸口から、大急ぎに飛び込んだ。

見ると、庭には点々と血汐の痕、戸障子は八方へ無残に倒れ、甲比丹の三次と荷拔屋の手下二人は、常木鴻山が後ろ手に縛り上げてしまった様子。

「やられましたな、常木先生、いやどうも大変な血汐で……」と源内は酸鼻に顔をしかめながら、気味悪そうに、拾い歩きをして入ってきた。

「そして、俵殿はどうなさいましたか」

「お十夜と申す奴だけが、素早く逃げ失せたので、後を追って駄げだしました。ところで、源内殿にはお気の毒ながら、そこに倒れている目明し万吉、ちよつと手当をしてやって下さるまいか」

「承知しました。葉餌のほうなら源内のお手の物……才、これや気絶している、数日の疲

労があるところへ、ドツと助勢が見えたので、一時に心が弛ゆるんだのであろう」

井水いみずを汲んで口へふくませ、自家の薬丹やくたんを印籠いんろうから取り出しなどしている間に、鴻山は、縛くし上げた三次や二人の手下てかを引つ立て、一室にほうりこんで嚴重にとざしてしまつた。

そこへ、俵一八郎が、息を弾はずませて帰つてきた。「残念！」と流るる汗を拭ふきもあえず、常木鴻山の前へ片膝をついて、「森端もりはすれまで追ツかけましたが、孫兵衛めは、腕の鋭いばかりでなく、怖ろしい敏捷びんしょうなやつ、たちまち姿を見失つて、何とも無念に存じます」

「いやいや、万吉さえ救えてみれば、逃げた奴は取るに足らん」と、鴻山は一方を振りかえつて「源内殿、容子ようすはどうでござるな？」

「気がつきましたわい、もうご心配は要いらぬ。これ万吉、万吉！」

「ああ……」呻うめきだした万吉、ムツクリ起きて、きよとんとあたりを見廻していたが、鴻山と一八郎の姿を眸ひとみに映すと、飛びつくように摺すり寄つた。

「あ、ありがとうございしました……ありがとう存じます。旦那方がこなけりやこの万吉は、もう疾とつくに椎しいの木の肥こしになつているところでした」

ペタリと両手をついたさま、心しんから嬉しそうである。

「気分はどうじゃ、大儀ではないか」

「なアに大丈夫です、これしきのことへへコたれちや、目明しという肩書に面目がありやしません。そうだ！ 何より先にお両方へお目にかけている品があります」胴巻の奥からおののく手につかみ出したのは、土筆屋の店でふと手に入れた例の手紙である。

「万吉の命は奪られても、こいつばかりはお渡し申したいと、この四、五日どんなにもがいたことか知れません。江戸表のお千絵という娘から、阿波へ入り込んだ甲賀世阿弥へ宛てた手紙、まあとにかく、中をござんなすつて下さいまし」

「なに、甲賀世阿弥？」

名を聞いただけで、鴻山の面がサツと変る。一八郎もきつとなつて繰りひろげられた手紙の側から、じつと息をひそめて黙読した。

宝曆變の前後、鴻山と一八郎が、公卿の背後に阿波あり、式部や山県大弐などの陰謀の黒幕に蜂須賀あり、と叫んでも、当時誰あつて耳を藉す者もなかつたが、ひとり、大府甲賀組の隠密に、同じ炯眼の土があつて、单身阿波へ入り込んだという噂——またそれが、甲賀世阿弥ということも、ほのかに聞いていたので、二人は今なおその名が深く脳の裏にあつた。

「ウーム、不思議なものが手に入った！」読み行くうちに二人の表情、驚異となり、歓喜となり、怪訝けげんとなり、また感激うろに潤む眼となった。

「こりや、お千絵という婦人に会えば、なおも詳しいことがある。世阿弥その後の消息、彼の目的、また幕府の御意向もほぼ知れよう」

「鴻山様、拙者万吉を召し連れまして、すぐ江戸表へ下向げこういたしましょう」

「おお、其許そこもとと万吉が、甲賀家を訪れ、何かの実相を見てきてくれれば何よりじや。さすれば鴻山こうざんも、その間に甲比丹かびたんの三次や荷拔屋ぬきやの手下どもをさとして、阿波へ渡る秘密船を仕立てさせ、万事の手筈ととのを調べておくであらう」

策謀しめにより荷拔屋の巢は、天満浪人てんまが入れ代つて、常木鴻山を中心に、その日は密ひそかな謀し合せに暮れて行つた。

ひとよぎり
一節切

近江訛おうみなまりの蚊帳売りや、懶ものうい稽古三味の音が絶えて、ここやかしこ、玉の諸肌もろはだを押し脱ぐ女が、牡丹刷毛ぼたんぼけから涼風すずかぜを薫かおらせると、柳隠れにいろは茶屋四十八軒、立慶河岸りっけいがし

の水に影を映していつせいに臙脂色の灯が入る。

舟では音締の撥の冴え、どこかを流す虚無僧の尺八の呂律も野暮ではない。

「どうしたのだろう 由造は？ 今日で四日目、まだ帰つてきやしない……」

お米はひとりでじれったそう。

浜納屋づくりのいろは茶屋が、軒並の水引暖簾に、白粉の香を競わせている中に、

ここの川 長だけは、奥行のある川魚料理の門構え。

榎子の下へ涼み台を持ち出して川長の一人娘、お米の待つのは誰であろうか。恋とすれ

ば、よすぎる縹緞が心にくくもある。

「もう便りがありそうなものだけだ……」

軽く舌打ちしていると、通りすがりの者が振りかえった。

「おや、お米さん、宵の内から待ち人ですかえ？」

「ええ、待つて待つて待ち抜いているのですよ」

「才才辛気、お暑いのにご馳走様」

鬘 盥に、濡れ手拭を持ち添えたいろは茶屋のお品は、思いきりの抜き衣紋にも、ま

だ触りそうな鬘を気にして、お米の側へ腰をかける。

「お風呂の帰り？ ずいぶん研みがきたてたこと」

「そりや私にだって、見せたい人が半分ぐらいはありますからね」

「おやご免なさい。お染そのひさまつ久松、お品お十夜つて、この河岸では評判でしたっけね。そういえばあのお十夜さん、さッぱり影が見えないようだけれど……」

「いつぞや、菖蒲あやめ見物に遠出した時、出先で妙な女に会つてから、急に素振りが變つてしまつたの。ほんとに、男ほどアテにならない者はありやしない。お米さんもせいぜい人には氣をつけてお惚れなさいませよ」

「大丈夫、私には、一生涯そんな人なんかできっこないのだから……」冗談にしていた話が、妙に淋しい調子に落ちて、お米は顔を横にそむけた、——どこかを彷徨さまよう虚無僧ぼろんじの尺た八け、聞くともなしに聞くふうで——。

その透すきとおるほど白い顔、その細ほつそりした襟えり脚あしに氣がついて、お品は、あ、うっかり悪いことをいったと心の奥で後悔する。

川長の愛まなむすめ娘むすめで、縹きりよう緞とんのよさも優すぐれながら、お米に一つの不幸がある。癆ろう咳がいという病やまいの呪のろい——いわゆる肺ろが悪わるかつた。

躑躅つづじの間詰まづめの御子息ごしよへ、縹きりよう緞とんのぞみで貰もらわれて、半年たたぬ間に里へ歸され、出戻り

の身をぶらぶらしているお米であった。隠してはいるが、年はもう二十四、五。女盛りの、燃える炎を包まれて、美が冴えるほど肺が痩せ、気の尖るほど凄艶さが目立ってきた。

「お米さんの病気には、男が一番毒ですぜ」

誰かが冗談にいった言葉も、お米の悶えにこびりついて離れぬもの一つである。

お品もうすす知っていた。浮いた話は、この女に罪だった。けれど話の途中に幕も引けずに、

「じゃ、誰をそんなにお待ちなの？」と、テレ隠しに訊いてみた。

「うちの由造。四日前に、大事な使いに走らしたのに、まだ帰らないので腹が立ってね

……」

「アア、あのぐず由さん？」あれじゃあ、色にも恋にもならない相手だ。

「その由さんがどこまで行つたのですかえ？」

「実はね、この間出入りの鰻かきが、大川筋で旅の者を助けてきて、離れのほうへ寝かせてあるの」

「板前さんからも聞いていた、何でも、太刀傷のある上に水浸りになって、随分容体も重いということじゃないか」

「ええ。だけれど、江戸の伝法肌でんぼうだけに気が強くて、大事な用を帯びているのだから、是非、親分を呼び返してくれ、後生だ、頼みだ、と夢中むちゆうにまでいつているのだよ」

「まあ、何だか可哀そうだね。そして、その人の親分という人は」

「唐草銀五郎という方で、多度津たどつへ立った街道へ、すぐ由造を追いかけさせたのだから、もう今日あたりは連れて帰ってくる時分だけれど……」

話しながら、何気なしに日本橋の方へ待ち侘わびた眼をやると、今度こそたしかにそれ！早はやを打たせて四手よっで駕ちよう、三挺ちよう、エイ、ホイとこっちへ棒を指してくる。

「あ、やツと帰ってきた！」思わず涼み台を離れると、トンと店みせさきへ駕かごじり尻しりが下り、垂たれを揃そろえた三挺よの四ツ手での裡うちから、
「大儀であつた」という武家言葉。

どうやら、それとは人が違っている。

駕屋かごやに簾すだれをはねさせて、川かわ長ちようの明りへ姿を立たせたのは、身装みなり差刀さしもの、いずれもりゆうとした三人の武家揃そろい。

蜂須賀家のお船手ふなて、九鬼弥助くきやすけ、森啓之助もりけいのすけ。ともう一人は、やや風采が異なつて、紺こんじ

上布ようふに野袴のばかまをつけ、自来也じらいや鞆たもとの大小を落した劍客肌けんかくの男——阿波本国あはほんこくの原士はらしてん天堂どういつ一角かくであつた。

どれも馴染なじみの顔ではあるが、お米は少し当てが外はずれた淋しみしきで、

「いらつしやいませ」とだけですぐに案内に立つ。風通しのいい表二階、好このましい酒器や料理ととのが調えられたところで、お米もつい二ツ三ツ酌しやくの愛想あいそをして席にいた。

「いや、いつ見ても艶あでやかだの。一つまいろうか」

「まあご冗談を……」美しいといわれることは、お米にとって、病やまいに錐きりを向けられるような苦痛であつた。

「しばらくの間、またそちの姿も見られなくなる。つまり今宵こよいは別盃べつばいじゃ、まあ一盃ひとつ受けてくれい」

「オヤ、ではお近いうちにお国元へでも？」

「ウム、殿のご帰国に従ついて渡海する筈はずじゃ。ままになるならお米よねも一緒に連れたいが……」

「嬉うれしゆうございますわ、森様、ほんとにお連れ下さいますよ」

「はははは、真まに受けられては大変たいへんじゃ。知つての通り、他領の者は一步も入れぬ阿波の

御領地。ましてや厳しいお関船せきぶねへは、どんな恋女房でも乗せては行かれぬ」

「昔は阿波のお国へも、商人衆あきんどしゅうや遍路へんろの者が、自由に往来ゆききしたそうでございますが、いつからそんな不便なことになったのでしょうか」

「さよう、もう御封地になってから七、八年。阿波の水陸二十七関、いよいよ厳しいお固めである」

「それはまた何のためでございますか」

「何のためか、殿様のお胸、吾々の知るところでない。しかし西国のうちには、阿波以外にも他領者の入国できぬ所がある」

「すると、真しんから、そこに恋しいお方があるとすれば、清姫きよひめのように蛇じやになって、あの鳴門なるとを越えなければなりませんね」

「はははは、当世女に、そんな心中しんじゆうだて立たは聞かぬところ、まず心配のないことじゃ」

「いいえ！」お米は熱を打ち込んで、赤い吉田団扇うちわをクルリと廻しながら「——私が恋をするとなれば、鳴門はおろか、どんな関でも、きつと渡つて見せますわ。ええ！蛇じやにでも夜叉やしやにでもなりますとも」

「こりや怖ろしい。してその相手は森氏うじか、天堂氏か、それともかくいう九鬼弥助やすけか」

「ホホホ、どちら様でもございませぬ。もし仮にあつたらという話——」

「何のことじや」笑い崩れてしまつたが、お米は自分の空想を眞実にして考えこみ、天堂一角は、床柱に凭れて、じつと、何かに耳を澄ましていたので、二人の声はまじらなかつた。

で、はしやいだほうの者も、笑つた後をやや白けて、冷えた盃の縁を舐めていると、すぐ近くから、唳々、水のせせらぎに似た尺八の音階が、一座の耳へ流れてくる——。

「む、いつ聞いても悪くないのう……」さつきから耳心を澄ましていた一角はひとりで眩く。

「あの歌口は宗長流、京都寄竹派の一節切じや、吹き手はさだめし虚無僧である」

「まあ。本当に虚無僧さん——」と、お米は体を手欄に凭せて、二階から下を覗きながら、「まだお若い普化宗のお方。あれ、あのよう一心に吹いているのに、誰か、お鳥目に気がつく店の者はいないのかしら……」

「どれ、拙者が喜捨してつかわそう」森啓之助が、なにがしかの小粒銀を紙入れからつかみだして、手欄の方へ立ち上がった。

「森様、お包み致しましょう」お米が小菊紙を出していうと、もう幾分か酒に酔わされている啓之助、

「何の、物乞いにする投げ銭に、ご丁寧なことが要るものか」と、下を目がけて、

「虚無僧！ 銭をくれるぞ」

パラツと小粒を投げつけた。

と虚無僧は、尺八の手をやめ、肩や天蓋へ落ちてきた金には目もくれず、スツとそこを去りかけた。

ところへ、ドンと川長の前へ投げ出されたのは、道中早次の駕二つ、着くが早いのか、その一挺の中から、半病人で飛び出した由造が、

「お嬢さん！ 由造です！ ただ今帰りました」

「オオ由かい？」お米は二階から身を伸ばした。

「唐草の親分、やつとお連れ申して参りました」

「まあ、早かったねえ！ 今行くから待っておいで」今の尺八も客も忘れて、お米はトントンと袂を舞わして店さきへおりてくる。

「ア痛、ア痛たたた……」

ほとんど半身、外科の手当に繻帯ほうたいされている病人は、夏の夜の寝苦しさ、傷の激痛うづめに呻きを太く、時折ときおり折白い床の上に現の身をもがいていた。

と——樅もみや楓かえでの植込みうえこを縫って飛び石伝いにカラカと、庭下駄の音がそこへ急いで行く。すぐ後から二人の影、一人は由造、一人は今早駕を下りたばかりの唐草銀五郎である。

「多市さん、多市さん」

先に立つたお米、濡れ縁から呼びかけて中へ上がった。二間造りの別棟べつむねで、魚をかこつておく生洲いけすの水がめぐっており、板場の雑音は近いが、屋根から庭木へ掛けてある川かわが狩り使いの網の目に、色町の中とは見えぬ静かな宵の月が一輪。

「さ、親分様、どうぞこちらへ」

「ご免なすツて下さい」

脇差を取り、裾すそを払って、銀五郎もズツと入った。油薬の香が蒸むれてプーンと鼻を衝うつ。ここまで来る間に、使いの由造から、すっかり事情は聞いていたが、見れば、余りに変り果てた乾分多市こぶんの姿——銀五郎そこへ足を入れた途端に、指さきの尖で目がしらの露をおさえた。

幸か不幸か、待乳まつちの多市は、お十夜の妖刀に二カ所の傷を負わされながら、川長の者に救われてここに療治をうけ、今なお氣息喘ぜんぜん々と苦患くげんの枕まくらに昏睡こんすいしている。

「多市さん！」お米は軽く揺ゆすぶツて、

「寝ているの、苦しいの？ —— お前さんがうわごとにまでいっていた唐草親分が、枕元へ来ていますよ、え、お分りかえ」

「えつ、親分？ ……」多市はポツカリ眼を開いた。起き上がろうとするのを、銀五郎がそつとおさえて、その顔を覗のぞきこんだ。

「多市、気がついたか。俺だ、銀五郎だ……」

「おツ。親分」と、細い手を絡からませて、上眼うわめにじつと見ていたかと思うと、その瞼まぶたからポロポロと男泣きの熱い泪なみだ……。

「無理に体を動かしちゃいけないえ、じつとしていろ、もう俺が戻ってきたからには心配はない」

「親分、わつしの傷は助かりません。助かろうとも思いません……ただ心がかりだったのは、親分が先へ多度津へ渡ってしまい、わつしがこうなったことも知らずにいると、飛んだ手違いになると思ひまして、そいつが気になって気になって……」

「うむ、お千絵様の手紙のことか」

「そうです。すみませんが親分、多市はもう駄目ですから、わっしに構わず、もう一度江戸表へ帰つて、お千絵様に事情を話し、誰かほかの乾分こぶんを連れて阿波へお立ちなすつて下さい」

「馬鹿をいっちゃいけねえ」

励ますつもりで銀五郎は、わざと語気を強くする。

「そんな弱気でどうするものか。てめえの気性を見込んだからこそ、今度の旅にも連れてきたのじゃねえか。それも只とは違つて、甲賀家の浮沈とお千絵様の一身にかかわる大事なお使いだ」

「そういわれると、諦めてあきらいる命も急に惜しくなります。だが親分……所詮しよせんこの容体じや助かりツこはありません」

「養生は気の持ちよう、しつかりしてくれ。二人の旅は他国と違って、船路も陸おかも関のきびしい蜂須賀領はちすか、しかも、生死の知れぬ世阿弥様よあみへ秘密な手紙を持って入り込もうというずいぶん危ねえ勝負ごとだ。なんでてめえのほかにめつたな者を連れて行かれるものか」

「アア助かりてえ……親分、多市はきつとこの傷を癒なおして、同じ死ぬなら、阿波の土を踏

んでからくたばります……」眼まなこを閉じ、唇を噛んで、負けぬ気の性根でそうはいったものの、呪のろわれた二カ所の太刀傷ズキズキと痛みだすものごとく、青白い皮膚にはこらえる汗あせらが膏あぶらとなつて滲にじみでる。お米も、何とはなしに貰い泣きして、側わきから額ひたいの汗を拭いてやり、その手拭を由造へ渡した。

「冷たい水で、も一度しぼり直してきておくれ」

「へい」と、由造が立つて濡れ縁へ出た時である。バサツ——と窓際まじぎわの青桐あおぎりが揺すれ、人の駈かけ出すような寒竹かんちくのそよぎがした。

「あつ、どこの客だろう」

「何だえ、今の音は？」お米がそこに出て見ると、表二階の客、蜂須賀家の森啓之助が、妙な気振けぶりでスタスタと植込みの中へ隠れて行つた。

「御両所、この家に油断のならぬ奴ひそが潜ひそんでおりますぞ！」こう息まいたのは森啓之助。表二階へ戻つてくるなりに、偷ぬすみ聞きした銀五郎の言葉、また怪しむべき様子を指摘して、偵吏ていりのごとく同僚の二人へ奥庭の仔細しさいを告げた。

最前から、そこに浅酌せんしゃくしていた天堂一角と九鬼弥助やすけは、お米の後に尾ついて姿を消し

た啓之助を、実はおかしい方へ推量しているところだったが、彼の語調や、聞き流しのな
らぬ事実驚いて、思わず盃を下へおく。

「ふうん、そんな奴が隠れているのか」弥助と一角は顔見合せて、「甲賀世阿弥の名を口
にし、阿波の境へ入りこもうとする奴なら、紛れもなく江戸からの廻し者じゃ」

「引つ縛つてお屋敷へ送り込み、とくと吟味をしてみる値打ちがござりましょう」
「あるとも。すぐ踏み込んで取り押えてくれよう」

「相手は町人、大事はあるまいが念のために、天堂氏も一方を見張つて下さるまいか」

「承つた——」と、やおら自来也鞆を左にひっさげて、巨軀を起こした天堂一角。九鬼弥

助、森啓之助を先に立たせて、酔いぎましの好場所もあらばと腕を扼して立ち上がった。

涼風ならぬ一陣の凄風、三人のひっさげ刀にメラメラと赤暗い灯影を揺がした出会
い頭——とんとんとんと柔かい女の足音、部屋の前にとまって両手をついた。

「あの、お武家様……」見れば川長の女中である。みんな立ち上がっている血相に、やや
おどおどとして遠くから、

「先ほど、お鳥目を投げておやり遊ばしたあの虚無僧が、ご挨拶を申したいから、是非
二階のお武家衆の席へ通してくれと申しますが……」

「何じや、さつきの虚無僧があいたいと？」

「ハイ、物乞いのように銭を投げつけられては普化宗の一分が立たぬと、少し怒っているような口ぶりでございます」

「生意気な！」弥助は叩きつけるような語気で、

「そやつの挨拶とは、何かいいがかりをつけて酒代をねだるつもりであろう。押しの太い尺八を食め、見せしめに素ツ首をぶち落してくるから召し連れて来い」ひどく癩にさわつたらしく、ぐわんとどなりつけるのを森啓之助がなだめて、

「まあ九鬼氏、多寡の知れた虚無僧風情じや……」一方へ大事な出先と目顔に知らせて、女中の方へもこういった。

「これ、さような者の言い草をいちいち受けついであいるから悪い。早く塩でも撒いて追っ払ってしまえ」

すると、一間を越した隣り部屋、今までシンとしていた所から、ポンポンと軽く手を打つ客があった。

「はアい」いい機にしてそこへ立つと、中には女の一人客、五種六種の料理を取ってキチンと静かに寛いでいる。

打ち見たところその女客、文金の高髻たかまげに銀釵ぎんざん篋はこ迫せ、どこの姫様ひいさまかお嬢様かといふうだが、けしからぬのはこのお方、膳の上たねの上に代りつきのお銚子ちようしを据え、粹いきな葎たばこ入れに細打ほそうちの金煙管きんぎせる、ポンとはたいて笹色ささの口紅くちびるから煙をスパツとくゆらした。

「すみませんね、忙しいところを」

「どうぞ致しまして、何ぞ御用でございますか」

「いいえ、何も別段なことにじやないんですけれど、ちようど、お隣で断ことわられた虚無僧ぼろんじさんに一曲きよく吹いて貰もらいたと思いますの。ご苦勞くるわうだけどここへ呼び入れて下さいませんか」

「あの、ただいまの虚無僧ぼろんじを？」と、女中は一方へ気兼ねをして、すぐには応こたじかねていと、案あんの定じよう、向うでは聞き咎とがめた九鬼弥助が、

「皮肉まねな真似まねをいたす奴やつじや！」 憤ふん声せいを洩こぼらして、食たってかかりに来きそうであつたが、

「止よせ止よせ、ばかばかしい」啓之助と一角が、しきりにそれを制とどめている。

「大事だいじの前の小事せうじ、そんな者に当あり散ちらしているひまに、離はなれの奴やつが蜂須賀家さむらいの侍さむらいと知しつたら、風を食たらつて逃にげ失うせぬとも限かぎらぬ」

「そうじや、九鬼氏うづ一刻いっくわも早く！」バラバラと裏梯子ぼしごを降りて川長の庭——夜露よるうをしのいで忍しのびこむと、人の気配きはいにさとい生洲いけすの魚いそがパチャツと月の輪りんを水みづにくずした。

「しッ……」と後ろを制しながら、先に立った森啓之助、生洲の小橋を匍い渡つて、以前の屋の内をそツと覗くと、お米も由造も早やそこには居合せないで、ただ洩れるかすかな声。

「う、うウむ……」というのは多市の呻きであろう。枕元には銀五郎が、その寝顔を見まもりながら、三味の遠音や色町の夜を外にして深い思案に落ちてゐる。

「あれだな？」

と、無言に目指しあつて、パツと家の内へ躍りこんだ九鬼弥助。枕元から立ちかける銀五郎の利腕をムズと捻じ上げて、

「阿波へ入りこもうとする江戸の間諜！ すなおに吾々と同行しろッ！」

凶星をさして真つ向から対手の胆を挫きにかかった。

ぎよツとしたが銀五郎、さすがに練れている所がある。色を隠してさあらぬ様子、取られた利腕を預けたままで、

「お人違いでございませう、高野詣りの帰りの者、阿波へ入りこもうの間諜のと申すような身柄ではございませぬ」穏やかにいい澄ました。

「いうな、最後の密談を聞く者あつて、汝が甲賀世阿弥の縁故の者ということは明白なのだ。言い訳があるならお下屋敷へ参つた上に、何なりと申し述べろ！」

「や、ではあなたは蜂須賀家の」

「知れたこと、お船手組の九鬼弥助だ。天下何人たるを問わず、御禁制の境を破つて

阿波への入国を企つる者は、引つからめて断罪たること知らぬうつけはない筈じゃ」

「しかし私にとりましては、まったく以て迷惑なお疑いでございます」

「えい、この期にもまだ白を切るかつ」いわせも果てず捻じ敷いて、素早く刀の下緒を口にくわえ、両の手頸をギリギリ巻き——それでも銀五郎は眼を閉じてこらえていたが、不意にムックリと身を動かした乾分の多市が、親分の危急！と一心に掴み寄せた道中差、床の上から弥助を目がけてさつと突き出す。

行燈の光を流した刃の鈍、切ツ尖の来るより早く弥助の眼を射て、「おのれ！」パツと片足に蹴返した。

さなきだに重体の多市は脾腹を衝たれてひとたまりもなく、ウームと弓形にのけぞる弾み——行燈の腰へ縫つた共仆れに、一面の闇、吹ツ消された燈火は窓越しに青白い月光と代つた。

大事は破綻はたんした、大事は破れた！ もうこれまでと臍ほぞを決めた銀五郎、いきなり利腕を振りほどき、力任せに弥助の足をトンとすくった。

「あつ——」と不意を食つたうわずり声。置四、五枚向うへよろけて行く隙に、つかむが早いか、スウツと抜いた脇差さやの鞘さやから走る風もろとも、唐草銀五郎真一文字にぬれ縁の外へ飛びだした。

飛び下りた影を狙ねらつて、颯さっせん然はませたる一刀が月光に鳴り、斜めに腰を払つたが、ヒラツとかわして銀五郎が、無二無三の刃交はまぜを挑いどむと、対手あいてはたちまち掠かすりをうけて後退あとすきり、耳から顎あごへかけて赤い一筋——森啓之助は危なくなつた。

と——銀五郎の前へ、また一本の剣つるぎがふえた。九鬼弥助の助太刀である。いや、さらにまた後ろから、彼をうかがう者がある。天堂一角の見張りであつた、まさに三方の敵いに囲い繞にようされた銀五郎、髪はしどろとなり汗は粘ねばり、だんだんと剣気けんきに命を磨すり減らされてゆくものか、月をうけた顔そのものも見る見る死相に変わってくる。

無残、ここに惜しい男一匹が、使命を半なかばにしてズタ斬りとなるか、無念の鬼となろうとしているのを、世間は宵よいの絃歌げんかさわぎで、河岸を流す声色こわいろや屋の木のかしら、いろは茶屋の客でもあろうか、小憎いほどいい喉のどな豊後節ぶんごぶし——。

鏢つばから外はずれた切きツ尖さき傷きず、柄手つかでを朱あけに染めつつ銀五郎、もう受身に受身を重ねてジリジリと生洲いけすの縁ふちへ追いつめられる。

機を計つていた一角は、その時自来也じらいや韜たうの大刀をヒラリと放ち、殺気にからむ二ツの眼まなこにトロトロと燐りんの炎を立てたかと思うと、ピュツと振りかぶってただ一氣、銀五郎の後ろからズバツ——とやりかけた。

すると、カラツと妙な音がして、その大刀は途中から意外のほうへ狂ってしまった。やツ？ と愕おどろいて見れば、風のごとく寄ってきた白い人影、森啓之助の脾腹ひばらを当て、九鬼弥助の腰をすくつてザアツと生洲の水へ投げつけた。

「ウウム……何なに奴やつツ」

怒氣みなきを漲みなぎらして構え直つた天堂一角、きつと月光の注そそぐところを見れば、青てんき天てん蓋がい、銀鼠ぎんねず色の虚無僧衣うろし、漆うるしの下駄めてを踏み開いて、右手めてに取つたるは尺八ひとふしに一ひと節ふし短ひとい一ひと節ふし切りの竹……。

これはただの虚無僧ではない。

一見不用意に似た尺八の構えは、いわゆる八面鉄壁ななな斜せめ青せい眼がん、たしかに一流をこな

している。ましてや天蓋の裡うちの息しずかに、竹とはいえその尺八から、劍にも等しい一脈の殺気が迫つてくるところ——どうして冴さえている！ 奥行の知れない深味がある。棒ぼうふ振り劍術や雜劍客の類たぐいではない。

と——一角はすぐに見てとつた。

彼とても技わざには一かどの見識を持つ男。この虚無僧の只者でないことを知るとともに、ピタツと劍勢を改めて、ウカとは上段を振り下ろさずに、一方の銀五郎へ気をくばつて見ると、生洲から這い上がった弥助と啓之助、二刀とうに一人の銀五郎を挟はさんで、四、五間先へ斬りまくっている。

「よウし！」一角の肚はらがきまつた。「多少の心得はあるうとも、およそは知れた虚無僧ずれ、その構えを割りつけて、天蓋から肋あばらの下までただ一刀！」

漲みなぎりだした殺念は眼がんにあらわれてものすごい。月光を吸いきった三尺たらず無銘のわざ刀もの、かつ然と鏗つばな鳴りさせて天蓋の影へ斬りかかった。

「ム！」と相手も気を含んだ。尺八の穴みなビューツと鳴って、一角の大刀を大輪おおわに払うと、払われたほうは気を焦いつて、さつとその切ツ尖さきを足あしもと下からずり上げる。

途端に、どこから飛んできたか一枚の小皿、闇の空から斜めに風を切つてきた。

「あつ！」とかわすと、またすぐに一枚の小さな皿、独楽こまのように吹ツ飛んできて、柄手つかでを翳かざした一角の刀の鏢つばにあたってパツと碎ける。

「うツ……」粉こになつた瀬戸のかけらに、目をつぶされたのか一角は、片手で顔を抑えたままバラバラとそこを離れて大声に、

「御両所ツ、今宵こよいのところは引きあげろ！」と、叫んだ後も目に手を当てて、虚無僧の入つてきた裏門はらしから一散こに外へ走りだした。

阿波あわの原士はらしの中でも、剛ごうの者といわれている一角が、なぜか真つ先に走つたので、九鬼も森あいても対手を捨てて、空しく川長を飛び出してしまった。

引つさげ刀で銀五郎が、その後ろを浴びせに追いかけると、こなたに残っていた前の虚無僧は、静かに天蓋のふちを上げて、

「銀五郎、銀五郎」と呼びとめた。

「えっ？」不意に名を指されたいぶかしさに、思わずそこから振りかえると、

「そちに齒の立つ対手あいてではない。必ずとも追つてはならぬ」

「や？ ……もし」と銀五郎、戻ってくるなり虚無僧の足もとへ片膝片手をつきながら、

「まず何よりは、今のお礼から申し上げなくつちやなりません。したがこの私を、どうし

て銀五郎とご承知なのでございますか」

「知らないで何とするものか、こりや唐草……」軽く肩を叩いて、傍の庭石へ腰をおろし、
久潤の声なつかしげに、

「そちにも、いろいろと世話をやかせたまま、一昨年江戸表より姿を消した法月弦之丞じゃ」

「ええっ！」弾かれたように寄りついて「法月様でございますッて？ オオ、弦之丞様だ、弦之丞様だ！」飽かず面をジツとみつめ、嬉しいのか悲しいのか、しばらく言葉もないのである。

天蓋を払ったその人物、漆黒の髪を紫の紐でくくった切下げ、月のせいもあるうか色の白さは玲瓏といたいくらい、それでいて眉から鼻すじは凜とした気性の象徴。

年は若い、恋にも功名にも燃え立ちやすい青年である。何流をやったか、今見せた腕の冴えといい、宵を流す一節切の風流といい、ゆかしくもあるがあまりに美男な色虚無僧。その珠玉をつつむ天蓋はおそらく仇を避けるためでもなく、また宗門の掟にでもなく、旅から旅の一節切、浮気につきまとう仇情の女難除けであろうかもしれぬ。

その時、二階欄干に寄つて、

「まあ、いい月だこと……」

眩つぶやいている女があつた。

宵から、天堂一角の隣り座敷にいて、向うで断わつた虚無僧を呼べといい、おまけに手て酌じやくをきこし召めしていたお嬢様——それは見返りお綱つな——小皿を投げたのもお綱であつた。いい月とは何の月？ 欄らんに凭もたれたお綱の眸ひとみは、現うつつのような色気に濡れて、弦之丞の腕の冴えならぬあの姿に、吸いつけられているではないか。

恋の追分おいわけ

川長のお米よねはすこしどうかしている。

あの騒動のあつた翌朝、ここの裏門から、こつそりと三ツの駕が出て行つて、病人の多市も銀五郎も、またその夜泊のりづきげんまつた法月弦之丞のじようの姿が見えなくなつてから早や四、五日。

きのうも今日も、お米は陰気な一間ひとまの塗ぬり箆だんすに凭よりかかつて、ものに憑つかれたような、祈ひとみるような、泣ひとみきたいような眸ひとみをジイと吊つつていた。

「弦之丞様、弦之丞様、……アア、どうしたんだろう、私の心は？ どうしてこの名がこんなにも、私の心へ焼きついてしまったのかしら。たった一夜同じ家に夜を明かしただけの人、こうも忘れられなくなるものかしら？ ……」

出戻りの女にあり勝ちな強烈な恋。分別もあり男の苦労も一通りは舐めながら、押し伏せている情血の沸りに駆られて、吾から囚われてゆくあぶない恋。

「つまらない！ アア淋しい。弦之丞様というものを見たばかりに、あの人が去った後の私の家は、まるで伽藍か墓場のよう……」

軽い咳がこみ上げてきた。細ツそりとした肩のあたりで筆筒の鑲が揺さぶれる。と、二ツ三ツ咽びながら、お米は小菊紙を出して口を押さえた。

離してみると、紙に滲んだ桃色の唾——人にきらわれる癆咳病みの血——。だが、彼女の目には若い血の疼きがそこへ出たかに見える。

「恋をするのも今のうち。どうせ私は、永いことのない命だもの！ そうだ、これから大津へ行ってみよう」

ふらふらと立ち上がった。

「だけれど？ ……」パラリと落ちた足もとの櫛をみつめて、お米はまたふいと迷いもし

た。

「せっかく、家中うちじゆうの者が心配して、人目につかないように、江戸のお方や弦之丞様を、大阪から離れた隠れ家かくがへやってあるものを、私が入りなだすれば、また蜂須賀家の侍が嗅ぎつけようも知れない……。といつてこのまま弦之丞様に、逢わずにはなおいられない」

と悶もだえているかと思うと、見えぬ糸で魂たまを操あやつられている人形のように、

「ええ、もうじれツたい、どうなとおなり……」ペタリと鏡台の前へ坐つた。そして、繻し子ゆすびん鬢びんのくずれを手早く梳すき返し、美艶びえんこう香かうや松まつ金かね油あぶらを溶ときはじめたのは、もう恋のほかななものもなく、一途いちずに大津とやらへ行つて、法月弦之丞に会うつもりであろう。

それにしても、美男の魅力は美女の蠱惑こわくにも優まさるものか、あの夜川長の裏庭で、月下に渦うずまいた一つの争波そうはから、虚無僧姿の若人わこうどへ、剣つるぎ以外に、お綱お米という二つの女の魂まで絡からみついてこようとは、弦之丞その人すらも知らないこと――。

「お米や……」そこへ温か味のある声がした。お米の母で、店から何まで切り廻まわしている老母としよりである。小さな器うつわへ、何か赤い液をたたえた物を持ってそろそろと入ってきた。

「お前、また今日も服のむのをお忘れだね」

「……………」 答えもしないで臙脂べにをさしている、鏡の中のお米の目、やや狂きょうれん恋こいの相かたちがある。

「服のまなくつてはいけませんよ。え、お米や」

「今日は服のみたくないんだもの」

化粧のできた鏡の吾をみつめたまま、お米は見向きもしなかった。

「そんなわがママをいつて——、自分の体を自分で大事にしない者があるものか。さ、お服のみ、せっかく今、竹やがしぼってくれたのだから……」と、口へ持つて行くばかりに、母の出した器の中の赤いもの。それは癆ろうが咳がいに利きくといふので、お米が人目に隠れて服のむすつほんの生血いきちだ。

「いや、いや、今日は何だか見るのもいや……」

「何こだえ、この娘こは。まるで駄こ々ツ子のよう」

「だって今日は嫌なんですよ」

「お前はまあ、自分の命を惜しいとは思わないのかえ？」

「ええ、なんだか惜しくなくなりましたわ」

「ばか！ 人の気も知らないで」

と睨んだ眼には女親の泪がいつぱい……。

「お米さん、逢いたいという人が来ましたぜ」

何も知らないで下働きの由造、ひよいとそこへ顔を出した。

「え、誰が？」

「この間きた蜂須賀家の森啓之助様。今日は一人で、二階へ上がって待っています」

美艷香の薫りが、そこへ忍びやかに流れてきて、

「森様、ようおいでなされました」と、お米の姿が、小座敷の萩戸へ透いて中へ入った。

とにかく、蜂須賀の船手の衆は、店にも大事な顧客であるので、いやいやながらも顔を
だした。

待ちわびていたらしい森啓之助、

「お米か、ずっとこつちへ寄つてくれい」

「はい、いつぞやはまた、とんだお粗相をいたしまして」

「何の……」といったが啓之助、素姓のしれない虚無僧ずれに、生洲の水へ投げこまれた醜態を、お米にも見られていたかと腋の下から冷汗をおぼえている。で、テレ隠しに、

「いつにも増して、まばゆいばかりな化粧あがり、どこぞへ出かけるところであつたか」
訊かれたのをいい機しおにして、

「ええ、はずせない急用がございますので……そして森様、私に御用とおっしゃるのは？」
「ウム、ほかではないが」と啓之助、声と片肘かたひじを前へ落して、お米の顔を覗のぞきこむ。

「当家の離れにおつた江戸の男とあの夜の虚無僧、もはやここにはおらぬそうだが、まさか、他へ匿かくまつておくのではなからうな」

「いいえ、決してそんな……」すぐ打ち消したが、これからそこへ行こうと思ひ燃えてい
るお米の胸。ギクリと一本釘を刺されて、動悸どうきに顔色をさわがした。

「覚えがなければそれまでのこと、深く追及するのではない。わしはただ同僚の手前、役
目として一応ただ糺ただしにまいっただけじゃ……」優しく砕くだけた啓之助は、すくんでいるお米の
手を握つてグイと側へ引きよせた。

「まだほかに一つの相談。それを謀しめしあわせたいのが今日の大事な用向きじゃ。これお米
……何とそちは近いうちに、この啓之助と共に、阿波へ渡るつもりはないか」

「えつ、阿波へ？ ……」

「ウム、阿波はよいぞ阿波の国は——八重の潮うしおめぐに繞めぐらされて渭いのつ之津の城の白壁がある。峰

や山には常春とこはるの鳥も歌おうし、そちの好きな藍あいの香かが霞かすみのようにけむっている……」

ささやきながら啓之助は、お米の肩から胸へ手を廻して、心臓の音をさぐるように、じつと心を現うつにする。ひと頃は、お米のあこがれでもあった国、これが弦之丞というものを、知らない前のお米であつたら、そのささやきに一も二もなく魅惑みわくされているであろう。

「どうじゃ、お米、わしと一緒に阿波へこぬか。この川長へ来はじめてから、それをどれほど思っているか、それは今さういうまでもない。松のよい所ところ、水のよい所、そちの好きな所へ寮を建ててやろう、どんな榮華えいがもさせてやろう」

「ですけれど森様、阿波のお国は、他領の者を入れぬという、きびしい掟おきてではございませんか」

「もとよりそれに相違ないが、そちさえウンといえば、どんな手段てだてでもしてみせる」

「手段といつて、あの海や関のお固めを、どうして潜くぐって行かれましょう」

「お船手組ふなてぐみのこのわしが、内から手引きすることじゃ、決してそこに抜かりはない。いよいよ殿のお渡りもあと二月ふたつき、九月の初めと決まっている」

「でも、何だか私は怖ろしゅうござります」

「なに怖ろしいことがあるものか、それにはこうして渡るのじゃ……」お米がもかく力を

おさえて、耳へ顔をピツタリ寄せた啓之助、何か一言二言ひとことふたこと小声に口を動かしたが、それは今のお米の心を惹ひく何ものの力もない。

「あ、誰かきます、森様、その手を離して下さいませ」

「よいか、承知であろうな」

「エエあとでよく考えておきますから……」

「何の思案があるものか、お米、そちは心の奥で、このような男の力がほしゆうはないか」
 「あ……あ……森様、息がつまります。離して、離して！」落ちた笄こうがいも拾わずに、男の手をふりもぎツたお米は、ふらふらと外へ出て、辻に見えた馴染なじみの駕屋かごやを呼んで、

「あの駕屋さん、急いで大津の追分おいわけまで行つて下さいな、だちんは幾らでもあげますから」

両の簾りょうすだれを下ろしてスツと身を隠してしまった。そして駕がゆれだすとともにフラフラと軽い目まいをおぼえ、まだ残る男の匂いが気持わるくこびりついた。

「じれツたい駕屋だこと、どうしてこんなに遅いのだろう——ああ弦之丞様、弦之丞様」
 上の空なお米の心は、森啓之助の仲間ちゅうげんが、目早くそれを見つけ、この駕の後からつけてくることを夢にも知らない。

京大阪へ別れの辻、東海道へはふりだしの大津追分、宿の家なみはうす黒く暮れて、馬や駕や旅人のかげも絶え、夕顔の花と打水に濡れた道と軒の明りがとところどころ。

針屋、そろばん屋、陶器屋、その隣には鬼の念仏の絵看板、鉦と撞木をもって町の守り神のように立っている門は、大津絵をひさぐ室井半齋の店である。

「おじさん、今晚は」

藤を持たない藤娘のようなのが不意にこういつて入ってきたので、行燈と蚊やりを寄せ、夜業に絵の具をなすツていた半齋、びっくりして鼈甲ぶちの眼鏡を上げた。

「おや、お前はお米じゃないか」

「ええ……」といったきりで川長のお米は、上がり框へ駕づかれの身を寄せて、明りをうしろにうつむいている。

お米には叔父にあたる大津絵師の半齋、

「一人で来たのかい」ジロジロと姪の様子を見まわしていた。

「ええ、急にあの……心配になったものですから」

「何が心配に？……」

「この間、おじさんのほうへお願いした三人の方が、もしやまた、蜂須賀家のほうへでも知れていやしいかと思ひまして」

「なアんだ、くだらないことを」

「だって、怪我けがをしている多市さんの容体も、いいのか悪いのか気にかかるんですもの」

「お前は、それでわざわざやつて来たのかい」姪の甘えるような言葉を、そのままの意味で聞いた半齋は、クツクツ笑いながら線描せんがきの大津絵に、紅べにや黄土おうどを塗りはじめる。

「ね、おじさん、あの方たちは奥にいるの？」

「それがさ、奥へおけるようなら心配はないが、病人の傷なほが癒なほるまで、匿かくまつてくれという

お前の方からの注文だろう、ところがここは街道筋で、わけても人目に立ちやすいから、実は関明神せきみやうじんの下で、時雨堂しぐれどうという一軒家が、庵主あんしゆさま様がおるすなのを幸いに、そこを借り住まわせてあるんだよ」

「ほんとに、いろいろご苦労をかけてすみませんでした。そしてあの多市さんの傷は」

「大津から外科げかをよんだり、薬風呂をたてたりして、あの銀五郎という親分が、親身になつて世話をするので、だいぶよいという話だ」

「それはよいあんばいでした」お米は店の壁にかけてある金泥きんでいの仏画ぶつがに眸ひとみをう

つしたり、袂たもとの端をいじつたり、何かもじもじしていた後に、ヤツと心の奥のものを持ちだした。

「そしておじさん、あの若い虚無僧の方も、まだご一緒にいるでしょうね」

「ウウム、いるらしいよ」と半齋はんさい、無心の筆で、鬼の頭をバサリと描かいた。

「じゃ私、これからそこへ行ってみようかしら……」

「あなたにおし、明神様のあたりは真つ暗だからの」

「時雨堂なら、よく知っているから大丈夫でございますよ」とすぐにお米が門かどを出したので、半齋は慌あわててうしろへ声を送った。

「おいおい、お米や」

「あい」

「お前はこツちへ来て寝なくつちやいけないぜ」

「分つてますよ」ちよツと邪慳じゃけんに眉をひそめて、もうあらかたとぎした宿しゆくを急ぎ足に、

関明神の石段の下まで来た。逢坂山おうさかやまの杉木立が魔のように見えて、ごうツと遠い風音も

常なら気味の悪い筈だが、お米の今は体の疲れも何の怖さも知らないのだった。

夜気冷やかに瞬またたいている二基きの常夜燈。ささ流れを跨またいで竹林ちくりんの小道へ入ると、水の

声でもない笹の葉のそよぎでもない、耳覚えのある尺八の音……時雨堂から洩れてくる。

その一節切の竹の音は、吹く人のすきびでも聞く者の興でもなく、病人の苦痛を忘れさせて眠りに導くためであったとみえて、やがて一つの曲が終ると、

「銀五郎、どうやら多市は寝たようじやの」

と、お米の胸を沸き返す、法月弦之丞その人の声がする。

「いかさま、あなたの尺八を聞きながら、よく寝込んだようでございます」答えたほうは銀五郎であった。

細かい竹の葉がくれに、時雨堂の中がすツかり覗けた。奥には蚊帳が釣つてある。白
衣の法月弦之丞は唐草と向かいあつて、縁の端居に蚊やりの櫃をいぶしていた。

「もう何刻であろうかの」と弦之丞。

「そろそろ四刻すぎでもございませうか」と、軒廂から明星を仰ぎながら銀五郎。

「あの山の上のツ灯は、関明神のお明りでございませうな。ああどこを見てもただまっ暗、何だかわしのようながさつ者も、しみじみと旅の淋しさがこたえてきます」

「して、そちが江戸を出たのはいつごろであつた？」

「梅雨へ入るとすぐでしたから、もうかれこれ一月前。それがてんから食い違つて、阿波の関を越えるどころか、多市は倒れるし路銀は掏られるような始末。どうやら悪日に立つてきたかもしれませぬ」

「そして、この後の策はどうするつもりじゃ」

「さ、弦之丞様、実はそのことでございますがね……」真剣になつて銀五郎、そこでもり声を沈めた。

外ではお米、その人恋しさに、矢も楯もなく大阪から飛んできながら、弦之丞の影をちらと覗くと共に、迷いと羞恥につつまれて、はしたなく声もかけられずにいるうちに、二人が密話になりだしたので、なおさらそこを驚かす勇気がくじけ、ドット鳴る血の音を感じながら、胸を抱いて籬の裾へしやがんでしまった。

ひそかではあるが力をこめて、銀五郎の声がすぐつづく――。

「どじをふんだ旅の空で、あなた様にお目にかかったのは、まったく甲賀世阿弥様のおひき合せ——こう銀五郎は信じております。自体こんどの阿波入りも、わつし風情には荷の過ぎた大役です。どうぞあなたのお力をお貸しなすつて下さいまし」

「わしに力を貸せいというか」

「へい、倒れかかっている駿河台の喬木きょうぼく、甲賀のお家を支える力は、あなたのほかにはございません。とりわけお気の毒なのは、この世に頼る人というものをお持ちなさらぬお千絵様……。もし弦之丞様、あのお方を、あなたは不愼ふびんとは思いませんか」

「……………」白衣びやくえの人は無言である。

見るとその眼は閉じられてあつた。何か心に痛みをおぼえるのか、かすかに唇がふるえている。

「もし弦之丞様、あのお方をよもお忘れではございますまい。わ……わつしですら、お千絵様のお身の上を考えると、野郎のくせに、つい、なみだが出てしようがねえんです……」
太い腕ぶしをグイと折つて、泪なみだの両眼を隠したまま唐草銀五郎、しばらく顔をそむけていた。

「——だが、御不運なお千絵様にも、たつた一人あなた様という強い力がありません。ところが、その一人さえ一昨年おとしから、プイと虚無僧寺へ隠れてしまい、心強くもお千絵様をすてておしまいなされました……。正直、わつしはその時怨うらんだ、ばかにしてやがる、前髪立ちの頃から、恋の何のと誓つておきながら、それが世間へ知れたからつて、虚無僧寺へ隠れたあげく、江戸を去つてしまうなんていう法はねえ、第一、大番頭おおばんがしらの若様とも

ある弦之丞様に似合わねえ、男らしくもねえ！ と、こう独りでどなりましたぜ」

「では何か、わしがお千絵殿をすてて、江戸から姿を隠したのを、そんなに怨んでおったのか」

「お怨み申しておりましたとも！ 乳母に上がっているわっしの妹も、そういう薄情な若様と知らずに、お千絵様との仲をおとりもちしたのが申し訳ないと、どんなに悔んだか知れません。いやいや、わっしや妹の齒軋りはまだのこと、あなたに捨て残されたお千絵様の嘆きよう……アア思いだしてもお気の毒、まったく罪でございませぬ」

「……………」 愴然たる白衣の人、口はかたく結ばれたまま、その姿は氷のよう、その横顔は死せるようだ。

お千絵様？ お千絵様？ その名はいちいち首のように、籬のかげに潜んでいたお米の胸を抉ってきた。そして、ここまで描いてきた彼女の恋のまぼろしへ、見る間に悪魔のかげが踊る。

弦之丞の態度が、いよいよすげなく、いよいよ冷静になりゆくほど、銀五郎の語調はまごころをまし、熱そのものとなってくる。

「そればかりではございません。今お千絵様のまわりには、あのお美しさと、甲賀家の財宝を狙う魔ものが、つきまとっているのです。——それを誰かといえ、あなた様にもお心当りがございましょう、粘り強い悪智をもった旅川周馬という男を……」

「ウウム、旅川周馬？」

こう口のうちに呟きながら、初めて瞑目をみひらいた法月弦之丞、その涼やかな眸には、何か強い記憶のものがよみがえっていた。

「はい、その周馬めでござります。恋敵のあなた様が、江戸を去ったのを幸いにして、陰に陽に、お千絵様を責め悩ますじやございせんか」

「さては、いまだ諦めておらぬとみえるな」

「手をひくどころか、いよいよ意地を曲げての横恋慕です。おまけに手をかえ、品をかえて、甲賀家の財宝まで、おのれの物にしようという腹……太い野郎でござります」

「オオ、あの周馬なら、そのくらいなことは企むであろう」

「わつしは元より今戸の瓦師、とてもあいつに齒は立ちませんが、またお千絵様の境遇をよそに見てもいらねえ。そこでにわかには阿波入りを思いたち、あのお方の手紙をもって、世阿弥様の御安否をさぐり、もし生きていたらばしめたもんだ！ 甲賀のお家に春が

来る！ というので実あ飛びだしてきた訳です」

「なるほど、いつもながらの俠おとこぎ気じや。恋はすれど意気地もなく、天蓋てんがいの下に身をかくしている、この弦之丞などは面目ない」

「ど、どういたしました。ところが、こいつア一世の大難事。細工はりゆうりゆうという訳にはゆきそうもねえ、まずわつしの命は鳴門の関をこえねえうちに、たいがい無いものだろうと覚悟をしました。しかし、あとあと思いやられるのはお千絵様、春にも逢わずお家の御運と共枯れに散るよりほかはねえのです……。もし弦之丞様、それやこれも察してあげて、どうぞわつしが立った後は、江戸表へお帰りなすつて、不幸なお千絵様の力となつてあげて下さいまし……。このとおり、銀五郎が両手をついてお願い申します」

「……さて何としたものやら？」

「なに迷うことがございましょう。嘘うそもけれんもないところ、お千絵様はあなたにしんから惚ほれていきます。顔だけ見せてあげただけでも、どんなにお欣よろこびかもしれませんぜ。弦之丞様、銀五郎が一生の頼みでございます、どうぞ一度あのお方へ帰つてあげて下さいまし」

これほど真摯しんしな声も、まだ相手の心を衝うつにはたらないのか、依然としてその人の横顔は冷たく、諾たくの一語を洩らさない。

が——あまりに強く衝たれたのは、その人にあらずして、さつきから籬まがきの裾すそにしゃがんでいたお米の胸。

「弦之丞様には女がある！ お千絵様という深い深い恋仲の女子おなごがあつた！ ……」
 こう知つた心は、火へ水をぶツかけられたよう。くらくらとめまいがして、深い闇へつきめされた心地に、側の竹へすがつてしまった。

支えささになつた竹の幹は横に撓しなつて、むら笹ざさの葉からバラバラと瑠璃るりの雨……お米へ無残な露しぐれ。

と、その時一人の男。

そこを離れてひた走りに、闇から闇へかけ去つた。根こんよくお米をつけてきて、この時しぐれ
 雨堂どうを見とどけた森啓之助の仲ちゆうげん間であつたらしい。

しばらくして……。半刻はんときほど後お米はふいと気がついた。

見ると目の前に提ちようちん灯がある、大勢の人がとりまいている。その中には、叔父の半齋もいるし、店の者もきているし、銀五郎と法月弦之丞もまじつていて、何かしきりに低い声でささやきあつていた。

やがてお米は、ソロリと戸板へ寝かされた。

提灯が先に立つ、そして、時雨堂の明り——悲恋の灯はだんだんと遠くなり、暗い追分の宿しゆくを通つてゆく。

「あ……私はあすこで、仆れた時に血を吐いたのだ……着ものに血が……血が」

指に冷たくぬれるものを感じながら、お米は戸板の上でポツカリ星を見つめている。

「私の恋はかなわぬ恋——弦之丞様には女子おんながある、それでなくとも、こんな病を知られてしまった……」頭だけは澄みきつていた。

阿波侍

ほこりツぽい街道すじに、これはまたきれいとも華やかともいいようのない行列が、今——三条口から大津の方へ、おねりねで練つてくるのである。

桃色の日傘、あやめの絵傘、とりどりに陽へかざす麗人二十二、三人、派手模様の袂たもとや藤いろの褙つま、緋ひのけだしやら花色の股引ぽつちやら、塗りの下駄ぬだの紅緒べにおの草履ぞうりだのが風にそそられて日傘の下にヒラヒラと交錯こうさくし、列に挟はさまれた駕か一挺ちよう、一人の美女がのっている。

どこの陽気なみだい様かとまちがえそうな人数だが、歩きながら、たえずペチャクチャ

とさえずるお供の方の風俗や、また、口三味線だの小唄だのを、はばかりもなくさんざめかして行く態ていからみても、この人々は、決してきような、やんごとないご連中ではない。だが、往來ゆききの旅人や馬子や荷もちの人足などは、その華奢きゃしゃにして洒然しゃぜんたる道中ぶりに眼をうばわれ、

「なんだろう？ ……」と、あツけにとられて見送りながら、そこでさまざまな風評が立つ。

どこかしらのお大尽だいじんが、京の芸妓げいこや色子いろこをこそツて、琵琶湖へ涼みに出かけるのだらう。いやいや、お大尽様というものは昔から男のものに限っている、あの駕の中に納まっているのは女じやないか。なアるほど女ですね。女も女、すてきな別嬪べっぴん。してみると金持の御寮ごりょうにん人様かな。もしもしばかをいってはいけませんよ、良家の箱入娘があんなまねをして、臆おく一面めんもなくこの真つ昼間あるくもんですか。イヤごもつともごもつとも、それもそうだ。それじやア何だ？ 何だかさツぱり分りませんな。

こんな噂うわさやげんがる目が、その行列をいっそうはしやぎ立たせて、程もなく逢坂おうさかの麓ふもと、走井はしりいの茶屋の店さきへかかると、一同はまん中の駕を下ろし、群蝶ぐんてつのくずれるように茶店の内や外に散らばった。

「さあ、お嬢様、お嬢様」

祇園あたりの仲居なかいであろうか、装なりをすかさぬ年増たちが、駕のぞを覗いてこういった。

「——いよいよここが追分手前で、あのとおりに井水いみずが吹きこぼれている。走井はしりいの名物茶屋。お名残り惜しゅうございますが、お見送りもここまでといたしましょう」

「まあ、もうお別れの場所へきたの。何だかあつけない気がするね」

「なろうことなら、お江戸まで従ついてまいりとうございますが、それではお嬢様がお困りでしょうし……」

「ほんとにね、みんな京人形ならいいけれど、お米を食べる虫だから……」

「あら、あんなお憎い口を」

「じゃ、とにかくそこで休みましょうか」

「さアさア、ごゆるりとお支度をなさいます」

頭の青い男芸者や仲居たちがすぐ駕の屋根からはきものを取ってそろえると、また一方から、ソレお扇子せんすが落ちました、ヤレお裾すそが砂へつきました、と下へもおかずに藤棚の前の座敷へお迎え申し上げる。

そこではまた、きれいな舞妓まいこや色子いろこたちが、団扇うちわの風を送るやら、吹井ふきいの水で手拭てぬぐいを

冷やしてくるやら、女が女をとり巻いて、何しろ大したもて方である。

「もうたくさんたくさん——そんなに風を貰つても、江戸のお土産みやげに持ってゆかれるわけでもなし、さアみんなも少し涼んでおくれ」

「はいはい、そんなら私たちも、しばらくここで休ましていただきましょう」

「アアそれがいい。そら、ここまで送つてきてくれたご苦労賃ですよ、仲よく拾つて遊んでおいで——」

帯の間からつかみだした金銀を舞妓たちへバラバラと撒まいてやる。たいこや仲居大供おおどもまでキャツキャツとなつてあばきあつた——。なるほど、これなら女のお客にしても、たしかにもてるに違いない。

さはあれ、このお嬢様、べつに女紀文きぶんを気どる次第でもなく、厭味いやみな所もさらさらない。ただこうした色彩の雰囲気ふんいきにつつまれているのがわけもなく面白いのであるらしい。

と、何思つたか「姐ねえさん——」と茶店の女を手招きして、お嬢様はこうおつしやる。

「あの、あすこに灘なだの樽たるがみえるようだが、ちよつと一本つけてちようだいな……いいえ、肴さかなはべつにいらぬよ、あるなら枝豆えだまめか新生姜しんしょうがでも……」

一方では舞妓たちが藤棚の下へ床しょうぎ几こをもちこみ、銀のかんざしはなぐし花櫛くびのきれいな首くびをあ

つめて、和蘭陀おらんたカルタをやりはじめていた。

お嬢様なるあやしい女、それは見返りお綱であった。——お綱が江戸への帰り途である。天王寺で掬すりとつた三百両や、和蘭陀おらんたカルタで思いがけなく勝ちぬいた金、合せて七百両あまりを、伏見や京都で男のような遊びぶりにつかいちらし、まず上方を見物したし、重たい金の荷もとれたし、これでサツパリ帰ろうというのである。

そこで、京の芸子や仲居たちは、江戸蔵くらまえ前の大通だいつうのお嬢様が、いよいよお立ちというので、走はしり井の茶屋まで見送ってきたものである。そのためにお綱はまた、つかい残りの小粒まで、洗いざらいフリ撒まいてしまった。

だが——お綱の目でみると、人通りの多い東海道、路銀はどこにでも転がっている。で、どこまでも触れこみ通り、金に大様おおようで通つうでお俵きやんな札ふださし差の娘——という容子ようすになりすまし、仲居を相手に、美食のあとの茶漬好み、枝豆かなにかでお別れの一合をチビチビと飲んでいる。

と、茶店の外で一服すつていた駕かきが、

「あつ、いけねえ——」と、藤棚のほうをのぞいて声をかけた。

「舞妓まいこさん、舞妓さん。早くカルタを片づけてしまいなせえ。あいにくと向うから、お役

人らしい侍が大勢こつちへ来るようですから」

「大丈夫よ……」

和蘭陀カルタに気をとられている舞妓の組は、それに耳もかさなないで、床しょうぎ几まわの周りにたかっていた。

「大丈夫じゃねえ、往来からみえる所で、そんな物をいじっていると、きつとガリを食うにきまつていら」

「だって、お菓子をかけているのももの、お役人様が見たって叱りはしないわ」

「おや、またはじまつているのかえ」

お綱もこつちで苦笑したが、何か思ひ出したように、

「あのカルタは、私が長崎からもつてきて、舞妓さんたちに教えたのだけれど、もし後でお咎とがめでもあるといけないから、こつちへ返して貰もらいたいね」

「はい」仲居が立つて、すぐ札ふだを集めてお綱の前へさし込んだ。お綱はそれを重ねたまま、ピリツと裂いて煙草盆の火にくべてしまう。

「アラ、つまらない……」

舞妓たちの眼は、和蘭陀カルタの煙を見あげて、うらめしそうにつぶやいている。

「では、私は勝手に支度をしなおして、日蔭ができたならここを立ちますから、みんなも構わずに戻って下さい」

「さようなればお嬢様、ぜひ来年の祇園祭ぎわんには、またおいでなされて下さいませ」

「ええ、またきつと上のぼつてまいりましょう。アア、それから私の頼んでおいた道中着物は？ ……」

「こちらへ包んでおきました。ではお嬢様、どうぞご機嫌よろしゅう」 「道中お気をつけなさいませ」 「水みずあたりやゴマの蠅はえにも……」 などと入れ代り立ちかわり、送り言葉のあいさつを述べて、この一行はまた、三条口へつづく並木をゾロゾロと引返してゆく。

ほんぼんと手を叩いて、お綱はそのあとで女中を呼んだ。

「永く店を塞ふさいでいてすみませんでしたね」

「いいえ……あの、御用は何でございますか」

「こんな姿をして歩くと、道中駕かごかきや人足にばかりにされて困りますから、ちよつと支度をなおしたいと思うんですが……」

「それなら、あちらの部屋に鏡台もございますから、ごゆるりお使いなさいまし」

「じゃ、ちよつとそこを借りますよ」

立つて奥へ入ろうとすると、ちょうど茶店の前をおびただしい数の侍が、いずれも野袴のばかまをわらじがけで、シトシトとわき目もふらずに通り過ぎてゆくのを見た。

「おや？」

お綱は、ペタと壁のかけに身を隠して、

「あの先達せんだつになつてゆく男は、たしかこの間川かわちよう長の座敷で隣合つた阿波侍……たいそうぎようさんな身支度で、一体どこへゆくのかしら？」

と横目づかいにジイと見送っていると、あの、天堂一角とおぼしき眼が、鋭くこつちへふり向いたので、お綱はスツと奥の部屋へ隠れてしまった。

そして、立て膝の鏡立てに、両手を髪へ廻したかと思うと、見るまに笄こうがいをぬき簪かんざしをとり、鹿かの子結びこのお七鬘まげを惜しげもなくこわしてしまふ。

そら寝の駈引かけひき

あれから一刻とぎばかりたつて、お綱は、すきや縮ちぢみに小柳こやなぎの引っかけ帯、髪もぞんざい結びに巻きなおし、まるで別人のようになって、

「アア、せいせいした……」

と「走り井」と書いた団扇うちわを片手に、ぶらぶら大津の方へあるいていた。

ちようど、どこかの粹いきなお内儀かみさん——というかつこう、誰の目にも旅をしている者とはうけ取れまいと思えるが、さすが、街道かせぎの駕かこかきは目が高かった。

「こウ、姐ねえさん」

すぐ蠅はえのようなやつが二匹、一匹は空棒からぼうを通して駕をひツかつぎ、一匹は手ぶらで後からくツついてくる。

「どうだい、ええ、姐さんてば」

お綱はふり向きもしないで、団扇を使いながら歩いていたが、

「うるさい人だね！」チエツと舌うちをして睨にらみつけた。

「うるさかったら乗ってくんねえ。陽のあるうちに矢走やばせの渡船わたしを越えて、草津泊りは楽なもんでさ。下駄ばきでカラコンカラコンやっていた日には、これから大津までもむずかしゆうがすぜ」

「大きなお世話だよ」

「こいつアごあいさつ。親切に教えてやっているんじゃねえか」

「雲助とゴマの蠅の親切なんかは、まっぴらご免ですとき。それとも、まったく親切気があるなら、これから江戸の日本橋まで、押ッとおしでやってくれるかい」

「ええ、ようがすとも、泊りさえ取ってくれば、江戸だろうが、奥州だろうが、決して嫌たアいいません」

「そうかい、だがね」

「まあとにかく、先へ乗っておくンなさい」

「無代ただでだよ」

「えっ?」

「こう見えても私は一文なし、タダでいいなら乗ってあげる」

澄まして行き過ぎるうしろ姿に、いつそうムツとした二人の雲助、いきなり空からかご駕をほうりだして、バラバラうてツと腕うでまくりのただ一打ち!

「けッ、ふざけやがるな」

驚わしのごとく飛びついたが、お綱の体に触れない前に、あっ! と雲助が音ねを揚げた。と思うと、何者にか、二人とも襟えりがみを引つつかまれてブーンと一ふりふりまわされる。

「街道のウジ虫め、悪くあがくと命がねえぞ」

「アツ、ごめんなすつて——」

下からその太腕を見あげると、服は黒麻なりに茶柄ちゃづかの大小をさし、夏ではあるが、黒紗くろしやの頭巾に半顔をつつんで、苦み走つた浪人の伝法肌はだ。

お綱は、ひよいと振りかえつて、

「おや、お前は、お十夜じゅうやじゃないか」と、二足三足戻つてくる。と孫兵衛は、両手にしめつけていた雲助を、ドンと向うへ突つ放した。

「あ、お待ちよ、駕屋かこやさん——」

ほうほうの態ていで逃げかける雲助を、駕屋さんと優しく皮肉に呼びとめたお綱。

「街道すじは生馬いきうまの目を抜く人通り、他人様のふところを狙う前に、よく自分たちの胴巻でも用心していたほうがいいよ」

ニツコリ笑うと、いつの間に拘すつていたのか汗じみた雲助の財布をポーンと足もとへほうつてやった。

「こんなビタ銭せんは、痛々しいから返してあげる。だがネ、これから正直に働かないときかないよ」

「あつ、こいつア俺のだ」あつ氣にとられた雲助は、それを拾うとお十夜の眼も怖く、一

散からかごに空からかご駕かをさらって逃げてしまふ。

「ホホホホ、雲助なんて、何という他愛たあいがないんだらう……」お綱は見送って明るく笑つた。

「おい——」その肩へ、ソツと手をのせて、お十夜孫兵衛。

「相かわらずすばしツこいなあ」

「あんまり憎いから、ちよツとからかつてやったのさ。だがお十夜さん、妙な所で落ち合つたねえ」

「そツちは不意に思うだろうが、この孫兵衛は、ぬきや屋敷のあの騒さわぎから後、どんなに跡を探していたか知れやしねえ」

何か一物もつありそうなお十夜——あのそぼろ助広の鉄かね色いろのようにトロリとした眼でお綱を視みる……。

曇るかと思うとカーツと照る、松並木の葉は洩もれ陽びが、肩をならべて行くお綱とお十夜のうしろ姿へまばゆい明暗あやを綾あやどつてゆく。

「じゃ、あの騒さわぎから後に、それほど私の跡を尋ねていたのかい」

「こんどのことをきツかけに、一つ江戸へ出てみたいと思うのだが」

「アアそれもいいかもしれないね」

「女のところへ男が転がり込むなあ、少し逆縁かもしれないねえが、当座の間、お前の家へやつかいになるつもりだ」

「おやすいこと、江戸へ帰ればお綱だつて、少しは顔がきくから、安心しておいでなさいよ」

「ありがてえ、これでおれも気が落ちついた」

「気が落ちついたのは私のほう……」白い歯なみを笑みこぼして、ニツと流しめに媚を向けたので、あまり近く寄り添っていた孫兵衛、息づまるような眼づかいを迷わせた。

「はてな……」と好色な孫兵衛は、もう情心の闇に好きな痴蝶を舞わせて、勝手な想像を心の奥でたくましゅうする。

「お綱のやつめ、ばかに今度は当りがいい……ジロとおれをみる眼元、何ともいえない色の露がたれている。ヤツぱり女は女ざかり、男がほしいに違いない。とするとこの金的、案外もろくポロリとおれに落ちてくるかもしれないわえ……」ひそかに伽羅の薫りを偷み、その肉を想いなどして、今宵の泊りの夢までを描くのである。そういえばお綱の

手が、歩きながら、ときどき味を持たせるように孫兵衛の指へ触^{さわ}ってくる。ここで、ギョツとその手を、握り返してやりさえすれば、侠^{きやん}なようでも女のことだ。そうなつてはもう啖^{たんか}呵^{かね}の音も出まい。きつと、俺のこの強い力にほだされて、いつの間にか俺のこの胸へ抱きこまれてくるんだろう。甘^{あめ}えものだ。何といつてもそのほうにはお綱も初心^{うぶ}なところがある。世間にすれていて男に初心——男にすれていて恋には初心——、という女がこのお綱だ。深^{しんそく}窓^{まど}にたれこめている御^ご守^{しゅ}殿^{でん}女^{にょ}の初心よりは、お綱のような女の初心が、時には、ばかばかしいほど男に血道をあげるものだ。

……孫兵衛の情心妄想、あるきながら果てしもない。

お綱の、あの鈴^{すずなり}形^{かたち}に澄んだ目も、きりツと蓄^{つぼ}んだ口元も、板木師^{はんぎし}が一本一本毛彫^{けぼり}にかけたような髪^{かみ}の生^はえぎわも、ふるいつきたい襟^{えり}あしの魅力も、小股^{こまた}のきれ上がった肉づきも、おれの手にかかれば翌朝は、そのおもかげも残しはしない。お綱がうわべにまどつている、張^{はり}だの侠^{きやん}だの意気地だの、そんな虚勢^{きよせい}はみんな脱^{だつ}がして裸のお綱にしてみせる。そして五十三次^{つぎ}の泊^{とど}りの間に、この女を生れ変つたようにしてやつたら……こりや、そばろ助^{やいば}広^{ひろ}の刃^{やいば}に、辻斬^{つぎざ}りの血をぬるような快^{こころよ}さの比^ひではない……と、孫兵衛の魔情はニツタリとするのであつた。

と、いつか並木がザワめきだしてザーツと砂をまぜた風が、お綱の裾すそを煽あおり、孫兵衛の幻想をうしろから吹き払ってしまった。

「おや、ポツリと降ってきやしない？」

お綱の眸ひとみが、雲足の迅はやい空をみていた。

「オオ、夕立雲！」

「困ったねえ、まだ大津へも着かないうちに」

「しかたがないから早泊りとするさ」

「向うに見えるのが追分だね」

「ウム、どうせ二人とも急ぐ旅じゃねえ。オ！こいつアいけねえ、本降りだ！」といううちに大粒の雨、サーツと斜めに吹っかけてきたので、二人はにわかには走りだした。と、その後ろから一ツの笠が風に舞わされてクルクルツとお綱の足へ吹きよせてきた。

「アアア——」と追いかけてくる旅人があった。べんけい縞しまの単衣ひとえに紺脚絆こんきやはん、笠を抑えたらしい時、お綱はちよツと振り返って、何だか見たような男と思つたが、雨と風に吹き別れて、街道筋の旅人もみな散り散りに影を潜ひそめてしまった。

お綱とお十夜は、追分端はずれの静かな旅籠はたごへおちついた。雨樋とを溢あふれるドシヤ降りと、青

光りの稲妻に障子をしめて、お綱はグツスリ枕についた……、しきむとえ 闕一重の隣には、宵に、お綱のなま媚めいたしやく酌に酔った孫兵衛が、これもグーツと寝ついている。

だが、心から寝ついているかどうか？ ……。

お綱も真からおびひも帯紐をといて、寝こんでいるかどうか？ ……。とにかく、目にみえな

いあるものが、ほのぐら 仄暗い灯にまたたかれている二ツの枕を通っている。

そら寝のかけひき、どうなるか？

つきよ
月夜の風邪かぜ

そのあした。

雨はやんだが曇りもよう。湖水の色や、ひえい 比叡の雲の行きかきを見るに、もう一降りドツとこなければ、この天候はは霽れあがるまい、というので、はたご 旅籠の門には、とうりゆう だいぶ逗留
延ばしのはきものが見える。

「おい、誰かいねえのか、ごめんよ——」

そこへ一人の男が立つた。

「あい、お泊り様で……」宿の女中が出てみると、土間に突つ立つた男は、べんけい縞しまの尻はしより、笠の前つばを抑えているので人相は分らない。

「うんにや、泊るわけじゃねえ。——ちよつとこの客に言ことづて伝て貰もらいたいのだが、昨日きのうなんだろう、……あのドシャ降りがやってきた時、頭巾をかぶった浪人と小粋こいきな女が、この家へ、駈かけこんできたろう」

「はい、お泊りでございませうが」

「その女の人に、これを渡してくんな。昨日、走はしり井いの茶屋の前で拾ひろいました、おおかたあなたが落したものと思つて、ついでに持つて上がりました……とな。いいか、忘れちゃいけねえよ」

ふところ 懐ふところから、妙な模様のついている一枚の札を出し、それを女中の手に渡して、

「だが、そいつはついでで、肝かん腎じんなのはこの次だぜ。ところで、この札を届けました男が、いつぞやは飛んだご恩をこうむりました。おかげ様で命拾いのちひろいをいたしたようなもの、くれぐれもありがとうぞんじました……と、こうお札をいつて貰もらうんだ」

「それでは、ちよつとお呼び致いたしましょうか」

「おツと。逢あうわけにはゆかねえんだ、外とちには連つれも待つてゐるから、今いまいったことだけ

を頼んだぜ」ヒラリと戸外へさして帰ってしまった。

「お客様、ごめんなさいませ……」女中はすぐに、その札を持って奥の客間をさし覗く。

二間のうち一間のほうには、お十夜孫兵衛、宿酔でもしたのか、蒼味のある顔を枕につけ、もう午頃だというに昏々と熟睡している。

「おや、まだおやすみでございますか」

「いいえ……」中仕切の向うからお綱の声がした。お綱はすっかり朝化粧まですまして、服もきちんとできていた。

「お連れ様は、たいそうよくお寝りでございますね、おや、朝飯もあがっていらつしや
いませんようで」

「そつとしておいて下さいな。昨夜少し持病が起きて苦しんだところですから……、なア
にこの分で、夕方までグツスリ寝ていれば、気分がよくなりますから心配しないで」

「はい。それからお客様……ただいま下へ、旅のお方が見えまして、これを渡してくれとおっしゃいましたが……」女中は、べんけい縞の男からいわれた通りの言伝を添えて、
きれいな模様のある札をお綱の前へさし置いた。

「えっ、これを誰かが届けてきたって？ ……」

お綱は畳の上へ眼をみはつた。その一枚は、まぎれもない和蘭陀おらんたカルタの一枚である。

走井はしりいの近くで拾つたといえ、送つてきた舞妓まいこたちが、あの茶店先でもてあそんでいたから、その一枚が往来へ散つたのであろう——それに不思議はない、しかし、この一枚のカルタをたぐつて、自分へ届けてきた男の眼力がんりきがなんとなくもの凄いい。

だがまた、女中の言伝ことづてによると、その男は、別に悪意を持つている様子もない——いや、悪意どころか、陰いんに何かを感謝している口ぶりであつたという。

「じゃ、べつに、もう御用はございせんか」女中が立ちかけると、今度はお綱が問いかけた。

「あの……妙なことを聞くようだけれど、この辺に、虚無僧寺てらがありますか」

「虚無僧寺？ ……さアよく存じませんが」

「では昨夜、雨の小やみな時に、時々一節切ひとよぎりの音ねがしていたようだけれど、あれはどこで吹いていたのだろうかね」

「一節切と申しますと、あの尺八でございませるか」

「まア同じようなもの、何か心当りがありませんか」

「そういえばこの間うちから、関のお山の麓ふもとにある時雨堂しぐれどうで、誰か時折吹いているよう

でございませす」

「関の麓の時雨堂？ ……ああ、そうですね、ありがとうございます……」と、女中が立った後でお綱は黙って眼を閉じた。——ゆうべの雨の絶えだえに聞いた、あの一節切ひとよぎりの遠音とおねを、ふたたび耳の底に聞くように。

「ウウム、ウウツ……」不意に寢床の上の孫兵衛が身を動かした。とたんに、お綱はスツと立って、背なかを壁に貼はりつけたまま、その蒼白い寝顔と寝息をうかがっている……。

時雨堂。なんとなく心を惹ひかれる名だ、恋しい情けが運ばれる名である。

でなくともお綱の心は、一途いちずにそこへ向いていた。とにかく、垣間見かいまみにでも覗のぞいてみたい、声だけでも横顔だけでも——という恋慕が矢のようにはやる。

で、宿からそツと抜け出した。

その時、お十夜は、まだ昏々こんこんと眠り落ちていた。

関せきの明みょうじん 神かみへフラフラと歩きだしながら、お綱は、ふと、自分の気もちを不思議に思う。

「おや、どうかしているよ、私は？ ……」

だが、引つ返す気にはなれない。

「どうかしている、そろそろ、お綱のやきがまわったのかしら。今まで、男の中にまじりあつて、その男が何とも思えず、女だてらに大尽遊びをして、色子や男芸者に水を向けられても、どんな気もしなかつた私だけけど……妙だねえ、今度だけは、あの一節切だけが忘れられない。魔がさしたというものかしら？」

はつきりと、自分でその気心の怪しさを意識しながら、足と心だけは、グングンと惹かれる方へ惹かれてゆく。あの時雨堂へ。

とはいえ、世間に一節切の上手は多い。宗長流もたくさんある。ゆうべ夜半に、宿の枕へほそぼそと通つてきた音が、必ずしも、あの虚無僧とはかぎるまい、世間に虚無僧も大勢ある。

だが——あまりよく似た音色でもあつた。立慶河岸を流していたのを、川長の二階で聞いたあの音色。ほんとにソツクリな節廻し、曲もたしかに宗長流の山千禽。

「ああ、どうしたんだえ、この、お綱さんは！」自分の胸を叱つても、ヤツぱりいつかお綱の心は、その人らしく考える。

あの晩、川長の隣り座敷にいた阿波侍が、何かコソコソ謀しあわせて庭手へ出たので、

お綱は、見るとしもなく二階から見下ろしていると、たちまち月下に劍つるぎの聲がおめきだした。そして一人が危うくなる……あつと思っていると、裏木戸から、あの虚無僧が白鷺しらさぎのように立つて、ピタリと對手あいての阿波侍へ尺八を向けた——その阿波侍の刀の鋭さを見ていたお綱は、やにわに膳の小皿をとって、パツ——と二つ三つ投げつけたのだ。

しかし、お綱はあとで後悔した。

あれは余計なことだった。あの時虚無僧の構えた尺八には、充分な自信と研みがきぬいた腕の冴さえが、素人目しろうとめにも分るほど光っていた。なんだかはしたくないことをしたように気が咎とがめて、お綱は、侠きやんにも似ず、その時、恥かしい気に責められもした。

そしてしばらく、月を浴びて、ひそひそと話しているその人を、上の手欄てすりから見つめているうちに、お綱は夢ともうつつとも知らない境に、骨の髄ずいまで沁みわたるほどなゾツとする恋慕の寒気さむけにとりつかれた。

お綱は、恋だなんて嫌味なことを、いいもしなければ思いもしない。

自分で自分の心にいった。

「わたしは、月夜の晩に風邪かぜをひいたよ！」

世間にすれていて男にすれず——男にすれていて恋にはすれていない、これがお綱の実

感だった。

月夜の風邪は重くなつた。

あれからも二度三度、立慶河岸のお茶屋に上がつて、一節切の主を待つ夜もあつたが、とうとうそれきりその尺八もその影すらも見かけない……。京や伏見で七百両のやけ費いも、華やかだつたには違いないが、月夜の晩にひいた風邪は、お綱の髓からぬけないのである。

「あ……うツかりして、妙なほうへ来てしまつた……」お綱は目先を拭われたように、ふいと気がついて立ちどまつた。

関の明神の高い石段は、さつき右手にみて左へ折れた薄おぼえがある。道はいつかダラダラ上りにかかつていて、緑の濃い竹林の中に、涼々としてゆく水の声がある。

「この辺じやないかしら？ ……こんな時に昨夜の一節切が聞こえてくればいいけれど」と、一二筋の道を見廻していると、やや上りになつた檜林の暗い蔭に、一人の女が泣いている。檜にもたれて泣いている。

木の間を透く空も、どんよりと銀燻しのように鈍く、樅や松や雑草の、しめツぽい暗緑色につつまれた山蔭——。そこにサメザメと泣いている女は、井の字緋の着物をきてい

た。

泣いている顔の袖を離して、林の細道を、一、二間ウロウロしていたかと思うと、女は、ものの怪けに憑つかれたように、フワ——と赤いしごきを木の枝へ投げかけた。

「あつー！」

お綱は夢中になつて駆けた。

蔓草つるくさに足をとられて、一、二度倒れかかったが、あぶないところで間に合った。

今にも、梢こすえにしごきを投げかけて、幽ゆうじゃく寂な林の中に首を縊くろうとする女。その後ろから、しツかりと抱きとめたのである。

「めつたなことをするもんじやない！ めつたなことをおしでない！」

お綱は声を絞しぼつて、井の字がすり緋の娘を抱き戻したまま、よろよると熊笹くまざさの中へ坐つてしまった。

途端に、抱き倒された娘は、声をあげて泣き伏した。泣いても泣いても、涙の尽きぬように慟れうこく哭した。それもやがて声がかれると、背なかに波を打って苦しげな嗚咽おえつとなる。

「まあ、あぶないところだった」お綱はほつとしたように、しげしげと娘の容姿すがたを見なお

して、

「アアびつくりした。みれば、お年もまだ若いらしいのに、一体、どうしたのですえお前さんは。え、え？　話せることなら話してごらん」

「いいえ、いいえ、別にわけも何にもないのでございます……どうぞ、私はこのままに泣かしておいて下さいまし」娘はかすがすれにいう。

「そう、じゃあ、人には話せない訳なんだね」

「すみません、ご親切を無にしまして……」

「それでは、あまり深く訊かないことにしましょうね。誰にしたところで人にいえない胸の裡はあるものだし、ましてやこんな場合に、根掘り葉掘りされることは辛いでしょう。けれどもねえ、お前さん、私だつて若い身だけけれど、お互に咲くや咲かずの花のうちに、森の死神なんかを取ツつかれちやつまりませんよ。え、お分りかえ」

「あ、ありがとうございます」

「分つたら、無理な注文だろうけれど、カラリツと気を晴れさせて、早くお家へお帰りなさいね……え、よござんすか」

優しい手を、ソロリと肩へ廻し、髪を根くずれさせてうつ伏している娘の顔をさし覗い

た。と、お綱はその時はじめてびっくりした。

川長で見たことのあるお米よねなのだ。

ハツと思つて、妙な疑惑につつまれていると、その矢先に、陰いんしん森とした空気を破つて、後ろで不意な人声がする。

「旦那！ お米さんはここにいましたぜ。ここにいますよ、ここに！」

「えッ、いたか！」バラバラと木の間から、四、五人の者が集まってきた。追分の宿の大津絵師、室井半齋むろいはんさいとその召使たち。

「オオ、縊くろうとしていたのじゃな。ばかな奴じゃ！ ばかな奴じゃ」と半齋は、木の枝から下がっていたしごきを、腹立たしそうにスルツとはずして、二人が坐っている熊笹の前へきた。

「お助け下さったのでござりましょう。どうもありがとう存じました。やれやれとんだ世話をやかす奴、実はちよつと前から、大阪の親戚みよりの者で遊びにまいつていたのでございませぬが、そのうちに、ちと持病がありましたな、カーツと血を吐きましたもんで、それ以来、鬱うつうつ々と焦れじきつて、まあ半狂人はんきちがいというありさま。今日もソロリといつの間にか抜けだしまして、あまり姿が見えませぬので騒ぎだしたわけでございます。何ともはや、お礼の

言葉もございませぬ」

言い訳やら礼やらいつて、半齋は召使たちと一緒に、泣きじやくるお米を騙しすかしして連れて行つた。

その人たちが林の細道からダラダラと竹林の中へ下がってゆくのを見送つて、お綱は、ひよつと、こう口の裡で呟いた。

「あんな縹緖で可哀そうに……病を苦にするばかりでなく、あの女もどこかで、月夜の風邪をひいたのじゃないかしら？」

その時——それは、鶯の啼く音に似たような、哀れに淋しい尺八の調べが、林の静寂に低くふるえて、どこからともなく聞こえてきた。

耳心をすまして聞き惚れると、音色はまぎれもあらぬ宗長流、しらべはゆうべの山千禽である。お綱の恋慕、お米の吐く血、二ツの女のたましいが、おののくごとく咽ぶごとく、尺八の細音からんでいるよう……。

まげつくぜつ
魔舌紅舌

お綱が、宿をぬけだしてから、やや二刻もたつた時分……。

ズキンと、頭へ錐をもみこまれるような痛みをおぼえて、お十夜孫兵衛、ふいと眼をさまし、枕の上からあおむけに、ジイト、天井板に眸をすえた。

どこともなく、漂いだした黄昏の色あい——煤けた狩野ふうな絵襖のすみに、うす赤い西陽のかげが、三角形に射している。

「オウ！」

フイに、憑き物でもおちたように、ムクムクと蒲団の上に身を起こした孫兵衛は、両手をうしろへついたまま、ややしばし、濁つた頭を澄ましながら、不思議にたえぬという面もちだ。

ゆうべ……あの吹き降りに宿へついて……湯上がりにお綱の色ツぽい酌で二、三合……たしかにほんの二、三合だった……飲んでそれから……鬨をへだててほろ酔いで床につく……お綱が鬢を枕へつけながらニツとこつちへ媚をむける……意味ありそうな、水向け微笑……初心だなあ、口にだしてはいえないとみえる……だが、少しじらしてやろう……と蒲団をかぶるとその煽りで、行燈の灯がメラメラとした——までは孫兵衛おぼえている。しかし、その先が渾沌だ。

自分は、そら寝入りでいるつもりだったが、それから後は、底なしの沼へ落ちこんだよう——まったく仮死かしの眠りであった。

「ウム……」と、腕をくんで、部屋のあたりを見廻すと、ハツとした、お綱お綱がない！衣桁いこうをみると、ゆうべ、かれによく似合っていた宿の貸浴衣かしゆかたが、皺しわになって脱いでる。

鏡台が散らかっている。だが、お綱のものは、櫛くし一枚も残っていないなかった。ただ抜け毛を丸めた紙屑かみくずが、お十夜の眼に、さびしく映うつったばかりである。

「やツ？ ……」

何をみたのか、孫兵衛。

「はてな？」といいながら、蒲団を立て、向うの畳へ手をのぼした。そこに落ちていた、和蘭陀おらんたカルタの札一枚——それをつかんで、不審そうな眉をひそめたのである。が、すぐに両手をこめかみに当てて、クラクラとした唇のふるえ、

「ウウ……」と、畳へうつ伏ぶしてしまった。

胃の腑ふからこみ上げてくる吐き気と一緒に、口へ湧わいてたまる不快な睡つば、そして、齒ぐきの根から、浸しみだして、孫兵衛の神経を、ムウと衝ついたのは——眠り薬のにおいであつ

た。

魔薬をのんだ！ いや、のませられた！ ゆうべの酒！ お綱のやつが、あれへ仕込んでのませやがったに違いない。と、思い当った孫兵衛、ふたたび上げた顔の筋には、おもて面も向けられない佞相ねいそうの怒りが、蒼白あおしろく漲みなぎっている。

「うぬ、このお十夜を甘くみて、まんまと一杯くわせやがったな。ウーム、どうするか見ていやがれ」

思わず、和蘭陀おらんたカルタをつかみつぶして、その方の疑念は忘れ、ただ一途いちずに、この復讐をどうしてやろうかと思いつめる。

こういう場合に、肚はらの底では、焼酎しょうちゆうび火のような怒気をムラムラ燃やしながら、あくまで、ジイと眉間みけんに針をよせて、かツとならないのが孫兵衛の性格である。——たとえば、京橋口で、斬るべき万吉を斬らずにフン縛しばったり、ぬきや屋敷の椎しいの下で、そぼろ助広の切きツ尖さきでなぶつてみたり、それはみな孫兵衛の粘ねばりツこい悪の悦楽で、助広の刀をかまえる時も、女の肉をむさぼるにも、人に恨みを酬むくいるにも、かれのやり方はどこまでも暗く陰険である。

気分が癒なおった様子——。

孫兵衛は、黙然もくねんと立つて、廊下仕切しきりの障子をみなスーと閉めてしまう。

しばらく、なんにも音がない。とやがて、帯をしめる絹すべり、鏡台を摺する気配……容よ子はみえないが、頭巾をかぶりなおしているらしい。そういえば、お十夜孫兵衛、まだ今日まで、他人ひとに頭巾をぬいだ顔を見せたことがない。

それには、よほど、細かい気配りをしているとみえ、風呂へ入るにも、人なき時をえらび、酒に熟睡している時でも、頭巾へ他人ひとの指がふれると、かッと眼を開く——というかげ口を、ぬきやの三次もいつていたことがある。

「では何か、一二刻ふたとときほどまえに、時雨堂しぐれどうへの道をきいて、関の山へ参ったのだな。よし。それでは、このまま帰るまい、払いは女中へ渡しておいたぞ」

宿の男へ、こういつて、お十夜孫兵衛はそとへ出た。

空を見あげると、一面に、まっ黒なちぎれ雲——逢坂山おうさかやまの肩だけに、パツと明るい陽がみえるが、四明しめいの峰も、志賀粟津しがあわづの里も、雨を待つような、灰色の黄昏たそがれぐもり。

孫兵衛の姿は、明神みょうじんの麓ふもとから、竹林の中へ消えた。とまた、だらだら上りの中腹に影がみえ、やがて、左へうねった檜林ひのきの細道へ入る……。

誰か、人でも踏んで行つたらしく、草の寝ている跡がある。と——お十夜の足もとへ、ふわりと、何か柔らかに絡からみついた物がある。赤い絹のしごきである。もしや、と思つたが、お綱のものとは柄がらがちがつていた。

何だ——という顔つきで、孫兵衛はそれを捨てて、またピタピタと林をぬけて行くと、目の前、パツと夕陽が明るく展ひらけて、かなり高い崖がけ際の上へ出た。

「あ、行き止まりか……」と孫兵衛。雑草の中から、覗のぞいてみると、下は、関こせきの古跡の裏街道、峨々ががたる岩の根に添つて、海のような竹林がつづいている。そして、その一帯な竹林の中から、古い塔の水煙すいえんや、阿弥陀堂あみだどうの屋根や、鳥居のあたまが浮いている。

「畜生！ あんな所にいやがつた」不意に、草むらへ、身を屈かがめた孫兵衛は、かまきりのように、ソロリと根を分けて、その崖ぎわを進みだした。

お綱がいる！ すぐ十間ばかりの向うの所に。

そこには、いッぱいな、蝨ほたるぐさ草が咲いていた。お綱は、後ろから、お十夜が近づいてくるとは知らずに、藍あいをこぼしたような花に埋うずまって寝ころがり、鬢びんを、夕風になぶらせ、吾をも忘れている眼まなざし……誰に女の胸す摸と見えよう。

ここから見下ろせる竹むらの辺り、どことも知れず尺八の音が響いてくる——月夜の晩

にひいた風邪、お綱は、それに聞きとれているらしい。

しかし、孫兵衛の瞋恚の耳には、そんな、かすかな旋律がふれても、心にはとまらなかつた。息をこらして草むらを匍いだし、お綱のうしろに又ツと立つた。

それでも、お綱は気がつかない……。

お十夜の口が、夜叉のように噛み締まつた。右手がソロソロと助広の柄にかかり、両眼は、おそろしい殺気をふくんで、お綱の白い襟あしをハツタと睨める。

そぼろ助広へ気合がかかれば、お綱の胴か細首かは、ただ一閃に両断される。

あやういかな、いつものお綱であれば、草一本のそよぎにでも、敏くなければならない筈だが、今はまつたく、一節切の音色にしんから聞き惚れていて、心は時雨堂の、あの虚無僧のまぼろしへ凭れている。

現なだけに、無心なだけに——お綱の姿態も、常より増して媚めかしい。鬢の垂るるまに、うつむいている、頸すじの匂わしき、肩から足へと、流れている柔らかい線の情味、螢草に押されて、むツちりとした乳のあたり……。その妖冶な漂いが、いつそうお十夜の鬱憤をムカつかせて、所詮、ただ魔刀の酬いだけではあきたらない気もちと変つた。

そして、そのためらいの間に、孫兵衛の殺念は、さかんな獣心と代り、眸はトロトロとお

綱の姿態しなに焦やきついていった。

うぬ。おぼえていろよ。

男のおそろしいことをしらしてやる。

その色香いろかをかきむしツてやる。

そして因果な身にしてやるのだ。終生つきまとい、呪のろいまわして、泣きの涙で送るよう
にしてくれる。それが、ゆうべの仕返しだ。

「お綱ツ」

呼びかけるが早いか、孫兵衛の体は、蛇のごとく、女の姿へ跳びかかっていた。

「うツ……」とお綱の声がかすれる。

口は大きな掌てにふさがれ、咽のどは、太い腕に絡からまれている……それを、はね返そうとする
白い足の力に、草の葉が散り、土くれが飛び、蛍草が揉もみにじられた。

ちツ……とお綱は歯をくいしばって、唇へ触さわった孫兵衛の小指を、力まかせに咬かみつい
た。

その痛さに、孫兵衛は、女の口から手をふり離れた。

はね起きると、またすぐに、胸の辺りをドンと突かれたが、お綱は、うしろへよろけながら、きつと、柳眉りゆうびを逆さかだてて、

「お十夜ツ、何をするんだえ！」

ひツ裂くような声で叫ぶ。

もみ散らされた黒髪の根くずれ、裾すそを踏ふまれた緋ひのはだかり、それは、いつそうお綱の凄艶せいえんをきわ立たせて、孫兵衛の盲目な獣けものごころ心は、いやが上にも煽あおられる。

「お綱！」

二足……三足……。

孫兵衛が寄ってゆくと、お綱も、ジリ、ジリと、うしろへ身構えを退ひいてゆく。

「オイ、逃げる気か。ふうん……逃げられるものなら逃げてみる」

「どうするツてんたい。私をツ」

「眠り薬の返礼をしてやるのよ」

「……………」

「てめえのような小娘に、あんな甘手あまてをくったままで、眼をつぶっているお十夜じゃねえんだ。おい！」

「……………」
 「御城番の膝下でさえ、夜ごとに、五人や七人の生血を塗った助広はここにある。ぶつた斬ろうと思う分には、女の一人や半分は、なんの雑作もねえところだ。それをやらねえお十夜の肚の底を知っているか？」

「……………」

「なんとかいえ。そうか、さすがにお侠なてめえも、すこウし凄くなってきたのだろう。素直に折れるなら今のうちだ。歯ぎしりしてもおれの女、溶けて添ってもおれの女。どつちにしても、この孫兵衛が、これと睨んだものを逃がしッこはねえ。いいかげんに、諦めをつけてしまえ」

一足……また、ズツと迫ってきたが、こんどはお綱、うしろへ退かずに、きりりと蘭の紅を裂いた。が——声はかえって落ちついて、

「お十夜さん」と皮肉にでる。

「——ずいぶんお前も鈍ですね。エエ、なんてえ血の巡りが悪いんだろう。あれほど、私が嫌だという気ぶりをみせていたものを、自分一人でオツにとって、その腹いせだの仕返しだのツて、とんだこツちが迷惑ですよ」

「やかましいわえ、もう嫌いやも応こたも、この土壇場どたんばでいわすものか」

「おだまんなさいよ、瘦浪人やせろうにん！ 第一さ、見返りお綱に惚れるなんて、身のほど知らずというものだ。このお綱さんに好かれたければ、もつと立派な腕前か、もつと立派な悪人になっておいで、辻斬りつじぎりかせぎで色侍いろぎむらい、才嫌だ、そんな男は！」

「ウウム。毒どくづいたな」

「いくらでも毒づきましようか、まだもう一つ、虫の好かないものがある。お前さんのその頭巾、よつぽど、ゆうべ眠り薬のきいてる間に、引っぱいで見てやろうと思つたけれど、どうせ自分の亭主でもない男と、おやめにしといてやったのだよ」

「エエ、うるせえ！」

と、その隙すきに、孫兵衛は猛然と、豹ひょうのように、女の手もとへ躍つていった。

キラリ！ と輪を描いたのは、お綱の帯から走つたヒ首あいくち。

もとより、お十夜を扶えぐるには技わざが足らず、風を孕はらんだ袖うらが、空しく、ヒラ——と流れたのみ。途端にかいくぐつた孫兵衛、その利腕ききうでをねじとツて、左手で女の喉のどをせめつける。

二つの体が、よじれ合つて、ヨロヨロと仆たおれかかった時である。

——ピユツと唸^{うな}つて飛んできた捕^{とり}縄^{なわ}！ 縄の先には鉛^{なまり}がある。小具^{こぐ}足術^{そくじゆつ}の息一つ、クルクルツと、お十夜の首にからみついた。

「しめた！」という声。

「あツ——」と、一方が引かれた間に、お綱は、素早く逃げ退^のいた。

檜^ひ林^{のき}から笹^{ささ}むらへ、お綱の迅^{はや}さは飛鳥^{ひや}のよう。

「ツ、ツ、ツツ……」と、喉^{のど}の捕^{とり}縄^{なわ}をつかみながら、孫兵衛だけは、弦^{つる}を張られた弓の形^{なり}に、そこへ、食いとめられてしまった。

だまり合い

お綱にばかり気をとられていたところへ、不意に、投^なげての知れない捕^{とり}縄^{なわ}が飛んできて、自分の頸^{くび}すじへ引^ひつ絡^{から}んだので、さすがの孫兵衛も、畏^{わな}へかかツた獣^けのよう^{よう}にうろたえた。

すばやく、お綱が逃げた、とは知^しつたが、それを追^おうどころでなく、左^{ひだり}の拇^{おや}指^{ゆび}で、肉^{にく}へ食^くいこむ縄^{なわ}の力^{ちから}を撓^ためながら、あおむけざまに踏^ふみこたえる。

喉のどの筋は蚯蚓みみずのように太り、面おもては充血して、みるみるうちに朱そを注そいだ。そして、「うツ！ ……」と、息いきを絞しぼり、必死めいじに繩なわを抜けようとあせっていると、ふたたび。

「や、畜生ちくせいツ」という物蔭ものかげの声があつた。

捕繩とらなわの一端から、電流でんりゅうのような力がピンと張はつてくると、孫兵衛まごべゑは、踵かかとを土つちにめりこましたまま、ズルズルと二、三尺うしろへ引ひかれた。

「ウーム」と、最後の息いきを呻うめいた時、反それるだけ反そり返かへつた孫兵衛まごべゑは、片手ひとてを助広すけひろの差さ添しぞえへかけるや否いなや、渾身こんしんから気合きあいをしぼつて、ぱツと一つ身みを捻ねじつた。

ヒラリツ——と虚空こくうへ抜ぬけた助広すけひろの刀光やぶらに、繩なわの断きれ目がクルクルツと躍なつた。

同時に、あつと思おもう間まもなく、孫兵衛まごべゑそのものも、繩なわの残のこりを体からだに絡からんだまま、崖がきから雑木ざつぼくの谷間やまへ跳はびおりてしまった。

「ちえツ」と叫こゑびながら、すぐに、草くさむらから駈かけだしてきた男おとこがある。

断きられた捕繩とらなわを、舌したうちしながら、キリキリ手元てもとへ巻まき込んで、崖がきぎわから、削けり立たつた急勾きゆうこう配ばいを、残念ざんねんそうに覗のぞいていた。

草くさほこりのたかつた鬚まげ先さきを散まらして、べんけい縞しまの单衣ひとえ、きりツと裾すそをはしよつて脚あし絆やはんがけ。それは目明めあきしの万吉まんきちであつた。

「ええ、惜しいことをした。投げた呼吸は確かだったんだが、たぐり寄せたのが一息遅かった……こんなことじゃ、おれの方円流ほうえんりゅうもまだ上手とはいえねえなあ」

すると、そこから少し離れたところの一本松、その松の根元の青芒あおすすきから、ムツクリ身を起こした侍が、こつちへ足を運んできながら、

「万吉、鳩が見えたのか」

こう声をかけた。

みると、常木鴻山つねきこうざんの腹心、俵一八郎たわらで、万吉と同じように、旅ごしらえの軽装である。

「なあに、鳩を見張っているところへ、思いがけねえ奴が来たので、出来心の方円流、ブーンと投げしてくれたはよかったが、とうとうお十夜孫兵衛という、大物を逃がしてしまつたところですよ」

「はははは」一八郎は磊落らいらくに笑つて、「うつつと居眠っているうちに、そんな様子だとは思つたが、お前のヤツと投げた縄の息を聞いて、ははア、こいつは逃がすわいと見切りをつけていたんだ」

「え、じゃ、旦那はうすうす知つていたんですね」

「女の声もしていたようだな」

「それが見返りお綱だったんです。あの女には、ぬきや屋敷で、あぶねえところを助けられていますから、その恩にも、縄をかける気はありません。実あ、走井はしりいの茶屋の先で、チラと姿を見かけたので、和蘭陀おらんたカルタにことよせて、それとなく札をいいにいったくらいですからね……。だが、あのお十夜の奴だけは、ここで逢ったのを幸いに、引つ縛ひからめて代官所へでも預けてやろうと思つたのに、旦那も人が悪いや、あの時、ちよつと手を貸してくれば、きつとうまくいったんですぜ」

調子にのつて目明し万吉が、逃がした魚の大きいことを嘆じてやまずにいと、一八郎は、それをなだめようとはせず、かえつて、

「これ、万吉」と、岩角へ腰をすえて、まじめに開きなおり、さて、その上で叱言こしごがでた。「出立のみぎり、常木先生つねぎが、くれぐれもそちにおつしやつた言葉を、もう忘れていてみえる……」

「へい」と、万吉は少ししおれる。

「その、目明し根性を、なぜ捨てぬ。こんど江戸表へまいるのは、さような用向きでは決してない筈。常木先生と平賀殿ひらがは、ぬきや屋敷へ残つて、阿波へ渡る何かの御用を急ぎながら、われわれの吉報を一日千秋の思いでお待ちなされている」

「分りました、ツイ目の前に、捕物がブラ下がったので、うっかり手が出てしまいましたんで……」万吉は一も二もなく謝あやまって、

「おつしやる通り、天下の大事へのり出そうとする門出かどで、もう、人殺しと道連れになろうが、泥棒と合宿あいやどになろうが、決して、小さなことに、目明し根性は出さねえことにいたします」

「ウム、忘れッぽいのもお前の特色だが、早分りがするのもそちの取得とりえというもの。一つの大事にかかる以上は、それくらいな気組でいてくれなければ困る。……おお、それはそうと、鳩の密使はどうしたろう？」

住吉村へ万吉を救いに行つて、ぬきやの手下どもを取り押さえ、そのままそこを、密議の場所と定めた常木鴻こうぎん山は、あれから後、源内や一八郎を相手にいろいろな相談を試みた末、とにかく俵同心と万吉とを、江戸表へ、出立させることになつた。

いずれにしても、阿波へ潜入する前に、一応は、甲賀家こうがけの一人娘——お千絵様というものに逢つておく方が便宜でもあり、また、蜂須賀家の内情についても、意外な材料を得られぬかぎりもない——というがためである。

そこで、大阪表から、東海道へかかってきた二人は、今日の途中、何か知りたいたいことがあつて、携たずえてきた伝書鳩を、この関の山から人知れず放したのである。そして、その返事を待ちわびていたのだ。

飛ばした先は、安治川の近所、鳩の翼では一はたきである。もう帰らねばならない時刻の筈。

その頃から、チカツ、チカツと、白い電光が雲間から目を射てくる。夜のとばりの迫るとともに、嵐の先駆せんくらしい風が、そよそよと草を撫なでてきた模様ように、一八郎は、わが子を待つような、心配と焦しょう躁そうにかられつつ、空ばかり気にして眺めた。

「まだ見えぬのう」幾度、こうつぶやいたかしのれない。

「どツぷり暗くなつたので、方向が、分らなくなつたのじやありませんまいか」

万吉も小手こてをかざしていた。その間にも、二人の影を隈くまどつて、稲光りの閃光せんこうがしきりに明滅した。

「いや、まだこれくらいな薄明りがあれば……」

「それとも、雷らい気にすくんでしまったかな？」

「そんな筈はない。こんど携たずえてきた鳩は、数ある中でも、ことに遠放とおはなしもきくし馴れ

ぬいている一羽。どこにおろうと、この方のいるところへ必ず戻ってくる質だが」

「あ——」万吉が、話の途中で、躍り上がるばかりに指さした。

「旦那、来た来た、たしかにあれですぜ。ほら、ほら、白い矢でも飛んでくるように、一気にこちらへ向いてくるじゃありませんか」

「おお」その指さきの空に、一点の影、舞い下りてくる小鳩を見出したとみえ、一八郎も、眉から憂いのかげを払いつつ、

「戻ってくれた、戻ってくれた、手飼の密使——」ハタハタという音さえ嬉しく聞いて、拳を出していると、馴れきつている銀色の家鳩、スーと下がってきて、その手へ止まった。

「大儀、大儀」

足に結んである雁皮紙を解いてパツと離すと、鳩は今宵の塹をさがすのか、ふたたび、木立の中へ隠れてしまう。それを見届けてから、一八郎は、細く折りこんである薄紙をていねいに開いて、

「ちと暗いのう……」と、読みなやんだ。

「お待ちなさいまし、手軽い箆をこしらえますから」万吉は、少しばかりの枯杉をあつ

め、燧ひうちぶくろの道具をだして、カチ！ カチ！ と火花を磨すりつけた。

ポウと、燃えついた明りへ寄つて、俵一八郎は雁皮紙の密書へ目をたどらせる。それは、かねてから蜂須賀家に住みこませてある一八郎の妹、お鈴からのものであった。

（お問合せの、阿波守様お国帰りは、九月上旬という噂、お下屋敷しもやしきもお引上げの御用に
取り混んでおります。御渡海のお座船ざふね、まんじまる丸も、きよう安治川へ入つて、ふなよそお艀装ふなよそおい
やら何かの手入れにかかりはじめました。とり急ぎお答えまで。お江戸の吉報、待ち上げ
まする）

読み終ると、も一度、初めの方へ目を返して、

「九月上旬……、すると、今からまだ二月の間つきまがある」

「それまでには、常木先生のお支度も十分にできるし、こつちの方も楽に江戸から帰れま
すぜ」

「なるべく、阿波守が入国の混雑に乗じて、その隙に、関を破つて密境へ入りこむが上策
であるという謀しめし合せ。あしたはこのことを、常木先生のほうへも知らせておこう」

「しッ……」

何思つたか、その時、万吉が突然声を制して、燃え残りの火をめちやめちやに踏み消し

てしまった。

それを、なぜと怪しむまでもなく一八郎もぎよツとした。いつの間にか、後ろへ近よつていた七、八人の侍が、じつとこちらを見ていたのである。

気転きてんよく、万吉の蹴ちらした枯杉の火の粉が、草から草へ吹かれてしまふと、星明りもなき真の宵闇……。わずか四、五尺の隔てながら双方の姿は、その輪郭りんかくすらもよく分らない。

ましてや、その何者であるをや。

こつちで口をとしていると、一方も果てしなく黙りぬいていた。ただその間、鋭い神経だけが、眸ひとみとともに互に相手を探りあっている。

何者だろう？ 単なる通りかかりの者とも思えず、物盗ものどりの浪人らしい挙動もない。と
いつて、立ち去る様子もなし、あくまで黙りこくツて、威圧いあつするように、こつちを凝視ぎようし
している七、八人の侍。害意はないまでも、なんらかの敵意は持っているらしく考えられる。

勘のいい万吉も、炯眼けいがんなる一八郎も、さらに見当がつかなかった。せめて、対手あいての風

貌でも見ればだが、まったく漆壺うるしつぼのような天地——時折の稲妻は、ただ、そこに立った侍のどれもが、一様に覆面しているらしいのを、チラと見せたにすぎないのである。

「妙な奴らだ、大刀だんびらでも抜いてみやがれ、こつちから先にグワンと一つ食らわしてやるから」

万吉は、手の裏に十手を隠して、しばらく息を殺していたが、かくべつ、抜いてくる気色しきはなく、依然として、すくみあいだ。そのうちに万吉は、ばからしくもなるし、神経も疲れぎみになって、フイと気をそらしてみた。

「旦那……」

小声にささやいて、一八郎の袖へ合図をしながら、

「雨にでもなると困りまさあ、腹へ底が入ったところで、ぼつぼつ麓ふもとへ下りましようぜ」
火を焚たいていた言い訳にこういつて、万吉は、スタスタ先へ歩きだした。と、一八郎も、いい機しおにしてついてくる——が、まだ。

「後から、追いかけてくるかな？ ……」と、予想していたが、七人の侍、追ってくる様子もなく、また、待て！ と浴びせてくる声もない。

「なんでえ！ つまらねえ気を揉もんでしまった」

下り坂へ来てから、急に足を軽くして、万吉の声がふだんの通りになってきた。

「わっしはまた、旦那が密書あれを読よんでるのや、阿波の噂うわさをしていたのを、あいつらが聞き咎とがめたのかと思つて、すツかり胆きもを冷やしてしまいましたよ」

「拙者も一時はぎよツといたした。しかし、考えてみれば、こんな所へ、蜂須賀家の侍が立ち廻まわつてゐる筈はずはないからのう」

一八郎も今になつて苦笑を禁じられなかつた。

「ですが、一体あいつらは何でしょう」

「どうやら覆面かくめんしていたらしい」

「それが合点がてんがいかねえんです。言葉を交わせば、侍つてやつあ、きつとお国訛なまりがありますから、どこの家来か、浪人かぐらひは、すぐに察しがつくんだが、ああ黙もくつていちや判断はんぱんがつかねえ……おや、道みちが二筋ふたすぢに別わかれていますね」

「右へまいろう。どうやら先に明ありが見える」

「今夜は大津泊りでしょうな」

「ウム、空模様ささえよければ、夜旅やぼをかけて矢走やばせの渡船わたしに夜よを更ふかすのもいいが、この按あ配んぱいでは危あなツかしい……」一八郎が、闇やみと知りつつ、険悪けんあくな空そらをまた見上げてゐると、

万吉は敏感に、誰かここへ急ぎ足に来る蹻音を聞きつけたらしく、ふいと、わきの杉の木へ身を隠した。

油断のない、気配りをしながら、一人の仲間態の男が、麓から小走ツこく駈け上がってきた。その蹻音の行方を聞き澄ましていると、今、二人が来た方角とは反対に、関明神の社殿のほうへ、猿上りに急いだらしい。

「おかしいなあ、どうも妙だぜ」と万吉。杉の後ろから出てきて、ギユツと自分の耳朶をつねっていた。例の探索癖で、それからそれへの幻想が暗示を描いてやまないのである。

「どう考えても、ただごとじゃねえ。何かおかしなもの、この山に包まれているぜ。気というやつだ、魔気か悪気か妖気か殺気か。旦那は、そんなふうには思いませんか」

「ははは、すっかりさっきの侍に脅やかされたな」

「笑いごとじゃありません。これだけは、万吉が、持って生れた訳じゃねえが、十何年間、十手で飯を食ってきたお蔭に、自然と備わってきた勘なんです。何かこう、ひとりで、頭へピーンと来ることに、今まであんまり間違ったことはねえんです……。おツと、いけねえ。また目明し根性が出やがった。旦那、今のは冗談ですぜ」

いつか、二人の降りてきた道は、風の騒がしい竹林をうねっていて、草鞋わらじの裏から、やわらかな朽葉くちはの湿ッぽさがジメジメと感じてくる。

そして、あたりの夜露に、どこからともなく淡い明りがさしていた。見ると、竹むらのすぐ向うに一字うの堂。そこから洩れる燈火である。

「万吉、ちよツと道を訊たずねてみる」

「あ、誰かいるようだな」と、青苔あおこけのついた敷石を五、六歩入って、目明し万吉、何の気なしに時雨堂を覗のぞきこんだ。

隠れ家かくが

道をたずねるつもりで、木槿もくげの垣越しに、ふと時雨堂しぐれどうの庭先を覗のぞいた万吉は、そこに何を見たものか、オヤと眼色を動かせて、口まで出そうになった声をのみ殺したが、どうそのまま、何も問わずに忍び足で戻ってきてしまった。

「どうしたのじゃ？」

咎とがめるように進んできたのは、暗闇に待っていた俵たわら一八郎である。万吉は、しツという

眼くばせをして、ふたたび、時雨堂の奥をうかがいながら、人さし指を向けて一八郎の耳へささやいた。

「旦那……あすこに誰かいるでしょう。もう少し、こつちへ寄つてごらんなせえ。ほれ、縁側へ行燈あんどんを出して二人の男が何かしているじやありませんか」

「いかにも、庭先へ盥たらいを出して、湯浴ゆあみを終えたところらしいが、それが何と致したのじや」

「一人はたしかに怪我人けがです。ごらんなせえ、側の男そばが、腫れものにさわるように、体を拭ふいてやっています。ここからでは顔までしかと見えませんが、今向うの垣根越しにヒョイと見ると、どうでしょう！　ありや待乳まつちの多市ですぜ」

「えつ、あれがか」

「天王寺や土筆屋つくしやなどで、再三見覚えていた顔ですから、決して間違いはありません」

「さすれば、側そばにいて世話をやいているほうの者は、彼の親分銀五郎とやら申す男ではないか」一八郎は、万吉から、疾とく今度のいきさつを聞いてもいたし、また唐草と待乳の二人が自分たちと同じ目的か否かは知らぬが、阿波の密境へ入りこもうとする者であることも知っていたので、偶然、これはよい者の居所を尋ね当てたと心密ひそかに欣よろこぶのだった。

「なるほどそういえば、一方は唐草銀五郎かも知れません。いつかの晩、京橋口で孫兵衛に斬り捨てられたとばかりに思っていた多市が、こんな所を隠れ家かくがにして、療治をしようとは夢にも気がつかなかつた……」と万吉は、意外な現実にはぼんやりとあたりを眺め廻している。

それに反して一八郎の頭脳あたまは、怖ろしい緻密ちみつさと速度でこの奇遇きぐうの利害を考え始めた。あの二人も阿波の密境へ入り込もうとする者、また自分たちも久しく阿波の内情を探ろうとして腐心ふしんするものだ。偶然、その目的が同じ蜂須賀家にあるのであるから、打ち溶うとけて話しあってみれば、必ず何か、双方の利となることがあるに違いない。

一歩退しりぞいて、仮に、互の目的が違っていたとしても、これからはるばる尋ねて行こうとするお千絵様のことは、銀五郎や多市が充分詳しい筈である。とにかく一つ訪れて見よう——こう心に決めたので、万吉に相談すると、もとより万吉にも異存はない。

静かに出なおして、庭口らしい柴折戸しおりどを押し、向うでびっくりしないように、「少々ものを伺いますが……」とていねいに声をかけてみた。

時雨堂の縁先では、銀五郎が、多市に薬風呂をつかわせて、傷の塗ぬりぐすり薬や浴衣の世話をみてやっているところだった。

「どなた様？」聞きなれない訪れに、銀五郎の眼が闇へ光ると、もう木戸を押しして一八郎と万吉が、つかつかとそこへ入ってきて、

「不意に失礼なお訊ねではあるが、もしや御身おんみは、唐草銀五郎という者ではござらぬか」

銀五郎はぎよツとした。蜂須賀家の廻し者ではないかという疑念が、彼に油断のない身構えをさせた。その様子を見ると万吉も前へ出て、

「お隠しなさることはございません、そこにいる多市さんという者とは、確か天王寺の境内で、お目にかかったことのある筈です」

「あア」銀五郎のうしろで、多市が思いだしたようにいった。

「じゃ、あの時、俺の腰帯を取った目明しの？ ……」

「そうだ、万吉という手先の者です。また、ここにいるのは、もとてんまごうしん一元天満同心の俵一八郎と

いうお方。いきなりこういう物騒な奴が、お前さんたちの隠れ家へ飛びこんで来ちゃ、さだめし、妙に疑うかも知れねえが、決して、蜂須賀家の諜者いぬじゃありません。安心のゆくように、まずこれをそっちへ預けておきやしよう」と万吉は、紺房こんぶさの十手を引きぬいて、縁側へポンとほうりだした。銀五郎は、それと唐突な客の顔とを見くらべていたが、度胸をすえたものであろう。心の落ちつきをとり戻して、

「どういふ御用か存じませんが、とにかく、こちらへお上がりなすつて下さいまし」
蚊帳かやの吊手つりてを二所ふたところばかりはずして、脇差の側へピツタリ坐つた。

「これは巧く話し合えそうだ」

と、心の底よろこで欣よろこびながら、一八郎と万吉がわらじを解といている間に、時雨堂の別な戸口から、白い人影が静かに外へ出て行つた。

雨氣あまけをふくむ冷やかな風は、秋のような肌ざわりである。白衣びやくえの人影は、五、六歩ふみだしてから、乱雲の空を、少し氣遣きづかわしげに仰いで立つ。

背丈せいのスラリとした輪郭りんかくと、手に尺八たすきを携たえているところから察しても、それは同宿の虚無僧のりづきげんのじよう、法月弦之丞とと分る姿。

弦之丞は、やがて大津の裏の近道を抜けて湖水のほとりまで歩いてきた。琵琶びわにも、今宵は底浪が立ち騒いでいて、松から松の間には茶屋の灯もなく、また涼りようをいれる人影ひともない。弦之丞は、かえつてそれを心安そうに、携たえてきた尺八を吹くでもなく、独ひとり行きつ戻りつめい、そつ瞑想めい、そつの闇をさまよっている。

「お千絵どのも今頃は、さだめしこの身を、どこにいるかと思うていよう……」吾とわが

懊惱おうれうの無明むみょうに独りつぶやくのである。

この間も銀五郎が、涙を流して、両手をついていったではないか。

「倒れかかっている甲賀家の喬木きょうぼく、この世に頼り人たよてのないお千絵様——、それを支える力ささ、救うお方は、あなたのほかにはごいません」と。

その時の、自分の態度は、なんとという冷血に見えたらう。お自分は冷血だ、銀五郎のあの熱血のほとぼしる頼みも、恋人の不幸な境遇をも捨てて顧みないこの法月弦之丞は、冷血ののしと罵られても、それを言い解とくことのできない男だ。

そのくせ、お千絵様という名を、自分は片時も忘れてはいない。昔にかわらぬ——いや、あの頃よりは、なおさら強い恋は不断に燃えているのだ。

「ああ……」松の根方へ腰を落して、じつと額ひたいを膝がしらに伏せた弦之丞には、いつか、抱きしめている尺八が、お千絵様そのもののように思いなされて、恋人の棲すむ駿河台の墨す屋敷みやしきや、なつかしい江戸の風物までが瞑想めいそうの霧に描きだされてくる。

しかし、法月弦之丞の胸には、どうしても、その愛着のある江戸の土を踏むことのできない事情ひそが潜ひそんでいた。

そうしたわけがあればこそ、彼は、家を捨て、恋人を捨て、江戸から外の世間を、旅か

ら旅へと漂泊ひょうはくしているのである。

帰るに帰られぬ江戸の空。折にふれ時にふれ、思慕の悩みを送る尺八の音は、お千絵様の夢に通うこともあるうけれど、銀五郎はそれを知らなかった。いや、銀五郎のみでなく、多情多感な青年劍客法月弦之丞の心に秘めている人間苦のせつなさを知る人はないのである。

.....

弦之丞が出て行ったあと。

時雨堂しぐれどうでは、俵一八郎と万吉が、だんだんと話をすすめて、宝曆ほうれきの変以来、阿波の秘密を見破ろうとしてつぶさに苦心を舐なめてきた実情を明かしたので、銀五郎も、さてはそうであったかと、初めて疑いを晴らして次には、自分の素姓すじょうや、お千絵様と世阿弥よあみとの境遇も、つつまず二人の前へ語ることになった。

こう打ち明け合ってみれば、十年前に甲賀世阿弥が阿波へ入った目的も、宝曆以来、一郎や常木鴻山つねぎこうざんが心を砕いていた目的も、偶然、ピッタリと一致していることが明瞭になった。

初めからすべてが分り合っていれば、万吉も、無論二人を助けたろうし、銀五郎や多市

も、こんなにまで苦勞をせず、今頃は、首尾よく阿波へ入り込めていたのかも知れないのだが、見返りお綱に、あの紙入れを掏すられた一事が、糸のもつれとなりはじめて、何もかも蹉さ跌てつしてしまったのは、よくありがちな運命のいたずらともいうべきもので、是非のないことである。だがしかし、これから先は、阿波という大きな謎の鍵かぎを握るために、どこまで、お互に力を協あわせてやろうではないか。と俵一八郎は、余よの者ものをばげまして、意氣軒けん昂かうたるものがある。

病人の多市も、それを聞いて、寢床の中からニツコリ笑った。銀五郎としても、思わぬ同志に巡めぐり会あつて心強さを覺えたが、また心の一部では、

「こうした人さえ世間にはあるのに、あの弦之丞様は、お千絵様の生涯を、何とも思つていねえのかしら……」と、その冷酷な仕打うちを怨うらまずにはおられなかつた。

今夜の宿は時雨堂ときめて、一八郎と万吉が、別な一間の床につくと、パラパラッと横なぐりに大粒の雨が吹ツこんできた。

それも時折にやんで、夜はだいぶ更ふけたらしいが、弦之丞はまだ帰らず、逢おう坂山さかやまの上あたりに、不気味な怪鳥けちようの羽ばたきがする。

関せきの明みょうじん神いただきの頂むみょうは、無明びわの琵琶を抱いて、ここに世を避けていたという、蟬丸道せみまるどう士の秘曲しを山風にのしのばせて、老杉ろうさん空をかくし、苔こけの花を踏む人もない幽ゆうじやく寂につにつまれている。

ちようど、北関きたせきの裏崖うらがけへ、誰も知らぬ銀の小鳩が下りた頃。その、蟬丸のように瘦やせた老禰ねぎ宜が、社家しゃけの一隅に、わびしい晩飯の膳ぜんをすえて、箸はしをとつていと、

「こりや、誰かおらぬか。ここの神かんぬし主はおらぬか」

表口に、ぬツと立つた自来也じらいや靴の武家があつた。

あわててそこへ出た神主が、蚊ばしらの立ち迷う中に立つた侍をみると、面おもては眉まぶか深く熊く谷まがいがさ笠につつみ、野袴のばかまに朱色を刻んだ自来也靴、いっこう見かけた覚えもない者であつた。

「どなた様でござりましょうか。まず、こちらへお掛け遊ばして」

「いやいや、ここでゆるさツしやい。実は少々頼みたいことがあるのだが……」と、武士は、笠の顎あひを上の山へ向けて、「あの頂に見える、蟬丸神社の額堂がくどうを、今夜だけ、借りうけたいと思うが、別に差しつかえはあるまいな」

「ほう額堂を？ ……」と、神主は少し変な顔をして、「いつもあの通り空あいております

ものゆえ、別にさしつかえはございせんが、一体何にお用いでもござりますな」

「不審に思うであろうが、実はこうじゃ。身どもは大阪表のある蔵屋敷詰つめの者であるが、同僚たちと語らつて、何ぞ趣しゆうこう向の変つた連歌れんがの催しをやりたいところから、この山の額堂ならば、雅味がみもあり、静かなことはこの上もないので、是非、今夜だけ借りうけたいと申し合せてまいつたのだが」

「ああ、なるほど、連歌の運座うんざでもござりますか。それはご風流なことで……さようなお催しならば、どうぞご遠慮なくお使いなされて下さいませ」

「早速の承知でかたじけない」

「また、御用とあれば、渋茶ぐらいは、ここよりお運び申してさし上げます」

「勝手のようだが、それは固く断りたい。静かに連歌の三昧さんまいを楽しみたいため、わざわざ不便な所へきたのじゃ。今夜だけは、誰か他の者が山へまいっても、これから先へは上つて来ぬようにして貰いたいの」

「ごもつともでござります。では、お邪魔をせぬことにいたしますゆえ、どうぞごゆるりお催しなさいまし」と、神主は立ち去る武士を見送つて、何の疑心もなく、また膳へ戻つて茶漬はしの箸をとりはじめた。

社家の門かどを離れた自来也韜の侍は、神主へ一応の念を押ししてから、安心したように、そこからなお、右折左折、苔清水こけしみずに濡れた石段を上つて、やがて、神さびた額堂の方へスタスタと歩いて行く。半ば朽ちかけた額堂の欄間らんまには、琵琶びわを抱いた蟬丸の像や、関寺せきでら小町こまちの彩画や、八景鳥けいちようかん瞰おわがくの大額などが、胡粉ごふんに雨露うろの気をただよわせ、埃ほこりと蜘蛛くもの巣の裡うちにかけられてあつた。

しかし、それは、昼ここを訪れた人の見られるもので、今は額堂全体も四囲いの山もトツプリ暮れて、社家の方から、大股おおまたにここへきた武士の影は、すぐ額堂の濃い闇の中にかき消えてしまった。

と思うと、低い幾人ものささやきが、自然に声を高めて、そこからガヤガヤと洩れだした。よく見ると、額堂の中には、少なくとも二十人以上と思われる人数が、あぐらをくみ、柱にもたれ、欄らんに倚より、思い思いなかつこうをして怪異かいいな集合をしているのだった。

神主へ断つてきた言葉のように、妨さまたげのない額堂の席を、夜涼やりようの山嵐さんらんをほしいままにして、連歌の競きよう詠えいを試みているのかと思うと、闇の中に、眼ばかり光らしている武士たちの顔には、みじんもそんな風流気は見えず、一人として筆をかみ句を案じているような者はない。

片隅でムクムク動いている者があれば、それは用意の黒布こくふを出して、顔の覆面あしごしや足拵あしごしらえにかかっている者で、中には腰のこうとう刀を抜き払って、刃こぼれをあらためてい者がある。

すると、北関きたせきの崖の方から、またここへ攀よじ登ってきた七、八人の覆面がある。中に先立つた一人の武士、額堂がくどうの下から、

「天堂氏てんどうじ、天堂氏」と呼びたてた。

「おう……」と、すぐ欄干らんかんから身をのぼしたのは、自来也らいや鞆の武士……すなわち蜂須賀の原士はらし天堂一角であった。

「や、森氏もりか——」とうなずいて、一角は、額堂の上からそこへ降りてきた。

裏崖から、ここへ登ってきた中には、お船手ふなての森啓之助と九鬼弥助がまじっていた。いずれも、同じように覆面しているので、夜目には互いの間にも、それが誰かさえ分らない程である。

「時雨堂しぐれのほうは？ ……」

「別に変ったこともないようです」

「銀五郎やその他の奴、よもや、こつちの手廻しを、気づいてはおりますまいな」

「そんな憂うれいは万々ござりませぬ。ちようど、夕刻から今がたし方まで、北関の裏から見張っておりましたが、向うは何も気がつかずに静まり返っておりまする」

「では、完全に袋の鼠だ……。まず、もうしばらくの間、あの額堂で、夜の更けるのを待つと致そう」

「しかし、天堂氏……」その時、横から話頭をかえてでたのは弥助である。「ただ一つ、これへ帰ってくる途中で妙な奴に出会いましたな」

「妙な者に？」

「されば、どこから飛んできたものか知らぬが、鳩に結ばれてきた薄紙を解き、しきりにそれを読んでいる奴がござりました」

「何かの書物で見たことのある、伝書鳩を使う者ではあるまいか」

「あるいは、そうであつたかもしれませぬ。とにかく、怪しい奴と睨にらみましたので、ツカと側へ寄つて、ジツと拳きよこ動をみつめておりますと、格別、あわてて逃げる素そぶりもなく、そのまま山を下りて行く様子。引ひつ捕えてみるまでもないと、その場はやり過ごしてしまいました。が、どうも、今になつて考えると、少し不審がないでもないように思われ

ます」

「そして、風態ふうたていや年頃は」

「一人は旅装たびよそおいの三十二、三、これは武家態ていでござって、一人は弁慶べんけい格子ごうしの着ものを着た町人でござりました」

「拙者にも思い当りはないが……なんでも、御本国の様子を探ろうとして、密かに苦心している天満浪人てんまの何某なにがしとやらいう者もあるという噂、そいつを逃がしたのは残念だったな」

「その代りに、彼奴きやつがこつちの姿を見かけた時、あわてて草むらへちぎって捨てた薄紙を、後で拾ってまいりました。しかし、あいにくと星かげもなく、それを読む明りに窮きゆうしますので、啓之助殿が大切に持つておられます」

こう話しあつているところへ、息を喘あえぎながら、森啓之助の仲間ちゅうげんが飛んできた。目明しの万吉と一八郎が、麓ふもとへ下る山の道で姿を見た男というのは、ちようど、時刻から考えあわせて、この仲間であつたことに間違いはない。

森啓之助が、川長へ行つた日。お米よねの駕かじをつけて、時雨堂の隠れ家をつきとめたのも、啓之助の働きではなく、この仲間の気転かじだった。そこで、天堂、九鬼、森の三人は、各

《めいめい》八、九人ずつの侍を連れて、この関の山に集まり、今度こそは、水も洩らさぬような手配りの下に、怪しい虚無僧、阿波の国内をうかがおうとする銀五郎、多市などを、余さず引つ捕えようとするのである。

七、八年前から、阿波の領境を封じて、かりそめにも、領土の内状をうかがおうとする者には、恐ろしく神経を尖らせている蜂須賀家では、今日までの間、銀五郎以外の者でも、ずいぶん仮借なく縛り上げて、その目的を糺さねばやまなかつた。しかし、それを遂行するにも、白昼公然ではなく、いつも、夜陰、あるいは人目のない所で行われるので、世間は知らないが、家中では、そういう嫌疑者の多くを上げてくること、すこぶる誉れであり、殿の首尾もめでたかつた。

なぜか？ ということは、この物語の進むにつれ、また、阿波の本体があばかれると同時に、おのずから明瞭になるであろう。

それはとにかく、啓之助の仲間が、今も、細かに時雨堂の様子を探ってきたところから、時分はよしと三十人近い黒装束、一度にムクムクと立ち上がった。

裏道を下りて、女坂の中途から右へ入ると、もう五尺と隔てては人影の見えない山神の森。そこを、ちりぢりに降りて、例の竹林へ入ると、やがて、この辺りにただ一軒

の時雨堂の灯が見える。

「しッ……近いから静かにしろ」

「誰か、向うの空地へも忍んでおれ」

「心得た……。合図は？ 手筈は？」

「天堂氏が、声をかけたら一度に斬りこむんだ」

こんな声が、笹の葉の音よりかすかに、ささやきあつて、黒い影が、ヒラ、ヒラと地を掠り、いつか一人も見えなくなる……。

夜は深沈と更けた。

嵐の前のおそろしい静寂。

空には、団々たる雲のたたずまいがあり、ここには、時雨堂の四方に、姿も息もひそめきつて、時刻を待ちかまえる覆面の群れ。

と——その中からただ一人、ソロリと庭へ這いこんで行ったのは、真ッ黒ないでたちをした弥助だ。

背よりも高い南天の株から、ポロポロと夜光の露がこぼれたかと思うと、弥助の体は臺

のように、戸袋の裾すそから床下へ這った。

上から洩れる話し声……

銀五郎に多市、それと折悪しく宵にここへ来あわせた俵一八郎と万吉の話し声。それはきわめて低い密話だったが、弥助の耳には、手にとるように聞こえてくる。

九鬼弥助は、自分たちの手廻しがいたずらでなかったことを得意に思った。さらに、それからそれへと洩れてくるささやきは、想像以上の驚きを彼に与えた。

「オー、これは大変な相談をしているわえ。もし吾々が、気づかずにいようなものなら、家の破滅を招く由々ゆゆしい大事となつたかもしれない……」顔の蜘蛛くもの巣のを除けながら、なおも根こんよく息を殺している。

そこで、俵同心と銀五郎の打ち明け話は、残らず弥助が聞いてしまった。

「ちようどいい！ お家の秘密をうかがう奴めら、今夜を期して一網打尽もっだしんだ」
心のうちで叫ぶのである。

さらに、何より好都合だと弥助が喜んだのは、今夜に限って、あの虚無僧が居あわせないことだった。

「あいつばかりはなんとなく怖ろしい——」と、腕利うでききの天堂一角すらも、二の足を踏ん

だったので、ぎょうさんと思われるほどの、若侍の人数をすぐってきたのであるが、誰より怖れていた雄敵が欠けているとすれば、これに越したことはない。

刻、刻、刻。

一瞬の空気は、いやが上にも静かだった。

時雨堂の者は、ちようと、台風の中心にあるようなもの、見えない魔のかげ、感じがたい運命の気流が、尺前へ迫り、寸前に圍繞しつつあるのだ。

けれど、勘の鋭い万吉も一八郎も、話に実が入って、それとは夢にも知らなかった。あまり夜更けては病人に悪かろうと、また明日の打合せを約して、二人は別間の寢床へ入った。

銀五郎は一人でそこらを片づけたり、多市に蒲団を掛けてやりなどして、何気なく縁側から空を仰いでいると、パラパラと大粒な雨！ 黙しぬいていた闇の一角から、にわかにかげ味の悪い冷風がサーツと一陣に揺すり立ててきた。

「あ！　とうとう降り出してきやがった」

多市の枕元まで吹ツかけてきそうな雨に、銀五郎は、あわてて、一、二枚雨戸を繰りだしたが、まだ何か不安そうに眉をひそめて、戸の間から外の様子を眺めまわした。

「困つたなア、ひどい雨だ……」

青白い稲光りが庭を照らした。

「弦之丞様げんのじょうは、どこへ行つておしまいなされたのだろう。ちよつと声をかけて行けば、一走り傘を持つて行つてあげるのに、町ならいいが山へでも行つたとすると、この雨にズブ濡れだろう。どうかしているぜ、弦之丞様は……妙にこの頃めいつているし、俺にも口々に話しかけたことがねえ……」

吹ツかける雨に向つてつぶやいてみると、縁の下の九鬼弥助は、その戸がピツタリ閉まらないうちにと、ジリジリと、銀五郎の足もとへにじりだしてきた。

そつと体を横ねじに捻つて、床ゆかした下から上を覗のぞくと、銀五郎の半身は、濡るるを忘れて、弦之丞の帰りを気づかないながら、また独りごとを洩もらしている。

「ひよつとしたら、この間、俺おれがあまりくどく頼んだので、それを気にしているのかしら？ それともお千絵様がさすがに恋しくなつたのかな。いやいや、お千絵様の身を、それほどに思うお人なら、あれまでの俺の頼みをウンといわねえ筈がない。ああ、もう頼むめえ。頼むめえ。いくら腕のできる弦之丞様でも、薄情ときちやアしかたがねえ。俺はどこまで一本立ち……。いや、捨てる神があれば助ける神だ、思いがけねえ人たちと力を協あわす

ことになったから、弦之丞様はあてにしねえで、この銀五郎の一心で、キツと阿波の内幕を探ってみせる！ お千絵様の身もお幸せしあわにしてみせる……」

思わず、吾とわがつぶやきになみだ涙ぐまれて、男らしい唇くちをきつと結んだ。——と九鬼弥助は、その時、油断のない眼くぼりで、すぐ銀五郎の足元から、口に手を当てた作り声で、

「唐草の親分……」

と、名を呼んだ。

らんしん
乱刃

「唐草の親分」

不意に、床下から呼ぶ者があるので、銀五郎はぎよツとしたが、すぐに、自分にも似に気げないおびえぎまを恥じて、「誰だ」と、少し、身かがを屈めた。

怪しい者なら、向うから声をかける筈がない。この附近の竹林に住んでいる物乞ものごいに、二、三度食べものを恵んでやったことがあるから、そのお菰こもであろうと気をゆるした。

「唐草の親分」

九鬼弥助は、また作り声で呼んでから、反対に、ジイと床下に身を退ひいていた。そして、肱ひじと右足だけを、のめるように前へ出していた。

「誰だつていうのに、変な野郎じゃねえか。そんな所へ潜もぐり込まれちゃ迷惑だぜ、ええオイ、おおかたいつものお菰さんだろう」

「へ……」

「へえじゃねえぜ、今頃来たつて何もありません」と、銀五郎は覗のぞきもせずにつたが、ふと思いついたかの様子で、

「あ、そういやあお前は、あの虚無僧の姿を宵に見なかつたかい。この雨に、どこかで降りこめられていると思うんだが、知っているなら、傘を持って行って上げてくれないか」

「……………」

「知らねえのか」

「知っています」

「知っているなら頼まれてくんねえ。よ、後生だから」

何の気なしに、釣り込まれて、銀五郎の片足が、庭下駄へ下りていった途端である。柄つかを握りしめて、根よく、力を撓ためぬいていた九鬼弥助。

「ええいッ！」

横よこなぎ薙なぎに一刀を払った。

床下からではあるが、十分、居合いあいの肱ひじが延びて行つたので、鞆さやを脱したことうとう 咬刀は、刃を横にして銀五郎の片足——浴衣ゆかたの上から返り血の飛ぶほどな傷手いたてを与えた。

不意を打たれた銀五郎は、

「あッ——」といつて、片足を引く気が、傷手に堪たまらず、体ぐるみ、どうツと、雨の降りそそいでいる庭先の闇へ転げ落ちる。

が、弥助の太刀たちが、肉へ斬り込まれてくる前に触れた浴衣の裾すそは、時にとって、大きな障害物となつていた。傷は骨まで届いていない。

「ちツ……畜生ッ」

よろよろと立ち上がった。

「ちツ……ちツ……」と深股ふかももの傷を押さえながら一心に、脇差をとりに行こうとするらしいが、何せよ深傷ふかでだ。一、二歩よろめいたかと思うと、ふたたび、どうと仆れ、浴衣の影は、雨と血と泥にまみれて、雨に白く、無残なもがきが見えるばかり……。

「む……」

九鬼弥助は、したり顔をして、要心ようしん深く床下の土にへバリつきながら、片手に抜刀ぬきみをつかんだまま、もういつそう、奥の方へ、ジリジリと身を退ひいて、その様子を見届けていた。

サーツと、地を払ってゆく雨の飛沫しぶきが、濛々もうもうと、霧のように白くたちこめた。時雨しぐれど堂どうの破れ底やびさしからは、滝となって水玉が溢あふれ、半ば開け放されてある中の灯ひは、消えんばかりに揺らめいている。

「どいつだツ……卑怯ひきようなやつ……、多市、多市」

降りしきる雨の中に、銀五郎の叫びが切れぎれにするのだったが、叫ぼうとする息も、起きようとする懸命はいぜんも、沛然はいぜんたる雨の力に压倒されて紫陽花あじさいのように気崩きくずれてしまう。

出来ごとが、あまり瞬間だったので、奥の居間に入った俵一八郎も万吉も、少しもそれを知らず、ただ、屋根を走る疾風しつぷうの雨の声に、顔を見合せていたのである。

だが、たツた今、銀五郎の手で寝せつけられた多市は、何かを感じて、

「おや？」と、胸を騒がした。そして、不自由そうな身を蚊帳かやの中からいざり出しながら、

「親分、親分！……」

呼んでみたが、返辞はない。

閉めかけていた戸もそのまま開いている。

戸の間から、外の暗澹たる凄色が、悪魔の口のように見えた。吠えたける風の中に、まっ青な稲光りが明滅していた。

「どうしたのだろうか？　そういえば今、妙な音が……」多市の顔色に、泣きだしそうな不安が掠った。もしや？　と思わず縁側までペタペタと這ってきて、

「親分ッ……親分ッ……」

肉親のものを案じるような、悲痛な声で呼びたてていた。

「万吉」

「なんですか」

「誰かしきりに、大きな声をだしているようではないか」

「へ、どこですか？」

「向うの部屋らしい。この大雨の響きにまぎれているが、今、少し落ちついていると、さような気がしてならぬのだが」

「そうかしら？　……おや、なるほど、親分親分と呼ぶ声がしますね、何だろう」

「最前の席にいた、病人の多市と申す者ではあるまいか」

「そうかも知れません。だが、おかしいな、なんだって大きな声で喚わめいているのだろう」
奥の部屋へ入って、帯を解ときかけていた一八郎と万吉は、棒立ちになって、じつと聞き耳たてている。

憂いをおびた多市の声が、今度は、廊下の近くで、二、三度つづけざまに聞こえた。

「旦那」万吉は、眉に深い皺しわをよせて、声をのむように相手の顔をみつめる。

「また妙なことをいいますようですが、どうもわつしは、宵から胸騒さわぎがしてならねえんです。あの関の山を下ってきた時からそうなんで……、なにしろ気をつけるこつてすぜ」

「銀五郎が怪しいと申すのか」

「いや、あの人たちに毛頭疑うところはねえが、明神の裏崖で逢った侍が腑ふに落ちねえ。

ことによると、銀五郎へ目星をつけて、早くも蜂須賀家の奴らが立ち廻まわっているかも知れませんぜ」

その言葉も終らぬうちに、いよいよはつきりした多市の声が、物狂ものぐるわしくまた聞こえた。

「親分がいねえ。親分ツ……」

「どうした！」

帯を締めなおして、二人がバラバラと元の部屋へ駈けだしてみると、縁先から畳まで、吹ッこむ雨にビツシヨリ濡れ、今にも消えなんとする灯影に照らされた多市の姿が、障子に縫すがつておろおろしていた。

「親分が……親分が見えませんが」

「銀五郎が見えぬと？」一八郎は声を弾はずませた。

「たツた今、ここで」

「おう、戸を閉める音がおつたが」

「と思うといつの間にか、姿が見えなくなつたんです」

「やっ」外を覗のぞいていた万吉が、仰ぎょうてん天して、飛沫しぶきの庭へ、行あんどん燈の光を向けた。

見ると、雨の中に、何やら白いものが倒れていた。銀五郎の浴衣ゆかたである、傷口から血の流るるに任せたため、あたりを血の池のように染めて悶もんぜつ絶してしまつたらしい。

「あつ……」というと、多市の顔はまるで死人だ。万吉と一八郎とは、意外な変を見ると同時に、なんのためらいもなく、ザツとかかる雨をうけて、庭先へとび降りた。

降りた途端に、万吉の肩が、腐れた雨戸を衝ついたので、一枚の戸が、屏風びょうぶ仆しにころげ落ちた。

「お！ 斬やられている」

「銀五郎ッ、気をたしかにもて」

一八郎が抱き起こし、万吉が耳に口をつけて呼ぶ間も、雨は仮借なく横なぐりに降った。

「これッ、銀五郎、銀五郎」

「ううむ……」

「気がついたか、急所の傷ではない、心を緩ゆるめてはならん」

「佯よう様……」銀五郎は、その手を借りて懸命に立ち上がりながら、かっと四方を睨ねめ廻した。

「わつしのことに気をとられて、ご油断なすつちやいけません、蜂須賀家の手が廻まつています」

「やつ、蜂須賀の？」

その時であつた。

床下に潜ひそんで、頃合ころあひを計つていた九鬼弥助は、ふところから用意の呼笛よびこを出して口にくわえた。

緩ゆるい——しかし物々しい呼笛の音ねが、床下から、四方へピリピリと鳴り響くと、たちま

ち、庭手の三人を取り囲んで、真つ黒な影が乱れ立った。

細く白い刃やいばのかげも、人に添って、あつちこつちに閃々せんせんと動き、早くも切ツ尖さきを低く泳がせて、狙い寄ってくる覆面もある。

「ちえツ、足がきかねえ」と、面前の敵に齒がみをする銀五郎をかばって、俵一八郎は、さすがに落ちついていた。

「万吉！ 油断いたすなよ」

「おお、こいつだ。宵から虫が知らせたなあ！」と、万吉も、内懐うちぶとこの十手をつかんだ。

輪をなしてきた人影が、等しくジリジリと輪をちぢめて、魔刃まじんのそよぎを詰めよせてきた時、どこからか、

「待て」

と、鈍どん重じゆうな声走った。

立ちすくみに、身を構えていた三人が、ふと眼をつけると、庭の一方大樹のかげに、雨を避けつつ見張っている自来也しらいや靴ばあ。

いうまでもなく、天堂一角である。

一角だけは、覆面をせずに、野ばかまの高股だち。その側そばにいて、鯉こいぐち口をつかんでいるのは森啓之助であろう。

「おう、それなる三名の者……」

傲岸ごうがんな調子で吠えかけた。もう縄にかけた囚人めしゆうど扱あつかいである。一角の言葉は、ピュ

ーツという風雨が横から声をさらって、ちぎれちぎれに掠かすれて聞こえる。

「もう駄目だ！ 諦あきらめて後ろへ手を廻まわしてしまえ。いわずともものことだが、吾々は、蜂須賀阿波守にさし向けられてまいった者、生殺せいさつ与奪よだつの権があるぞ、ジタバタすれば弄なぶり殺し——」

「だまれツ」

だしぬけに、俵一八郎、それを遮さへぎって、きびしく言い返した。

「阿波守が何者である、蜂須賀家じやとて、かような狼藉ろうぜきを、無辜むこのものに加えてよいか」

「ふん……」というように、一角の白い歯が闇の中に剥むいてみえる。

「白々しいことを申すな！ 阿波の侍従重喜公じじゅうしげよしこう、おそれ多いが名君でおわずぞ。いわれもなく、何でかようなことをするものか。その科とがは汝らの胸に覚えがあらう。申し開く

筋があるなら、とにかく安治川のお下屋敷へきた上にいたせ」

「いや、なんと申そうが、この方どもは、さような所へ引かれてゆく覚えがない」

「阿波の御禁制を犯し、お家の内秘ないひをのぞこうとする不敵な大罪、言いのがれはかなわぬ」

「禁制とは阿波領だけの禁制で、よも天下の大法ではござるまい。ここは天領、すなわち

將軍家の御支配地、一国の太守にすぎぬ阿波守が、掟おきて呼よばわりを召めさるいわれがない」

一八郎の弁舌は、さすが同心役を勤めていただけに練れていて、理の明めい晰せきと語氣の鋭さが一語一句にひらめいている。

「ましてや吾々として、また阿波の禁界をふみ越えた覚えもなし、内秘を探ったこともござらぬ。それをしも疑心暗鬼に見らるるにおいては、なんぞ御当家には、それまでも世の耳じ目をおそれる秘密もくがおりとみえる」

痛いところを罵ののした。

いかにも、阿波以外の領土で、阿波の国禁を無む碍げにふりかざすのは暴ぼうの限りである。

けれど、もとより、その暴と権力が、横行し濶かつ歩ぽした時代。天堂一角のごとき、暴をもつて禄ろくを食はみ、暴をもつて誇りとする原土気質はらしかたぎが、そんな条理に耳をかすべくもない。

「よし！ 問答無用」

こういうと、彼は、もの蔭から手を振って、

「それツ、江戸の廻しもの唐草銀五郎、またしきりにそこらを嗅ぎまわる天満浪人や、手先の犬どもを、一網打尽にしてしまえ」

「あつ」というと、ムラムラと動いた覆面の影が、一度に八方から喚いてかかる。

「何をツ」といったのは、万吉であろう、寄つてきたのを、真ツ先に、イヤというほど十手で撲りつけた。

おお！ ええ！ ともつれあう声の乱打ち。人と人、剣と剣が、ただ真ツ黒に渦巻いた。雨は少し小やみになって、チラとほころびた乱雲の隙間から、カーツと空の明るみが射し、一瞬、目ざましい剣の舞を描いてみせた。

だが、雲の閉じるとともに、それもまたたく元の闇——、修羅の叫喚、吹きすさぶ嵐。

しばらくすると、その渦の中から、

「ううむ、残念！」一八郎の絶叫が聞こえた。

「あつ、だ、旦那」

「万吉、拙者にかまわずここを落ちろ」

「逃がすな、あいつを！」

群むらがっていた人数が二ツに割れた。

一方は、長蛇となつて万吉を追いかけ、残った人数は一八郎へ折り重なつて縄をかけた。銀五郎はどうしたろう？

時雨堂の灯が消えたため、多市の様子も分らない。

万吉は、垣を破つて逃げだした。と——その時だ、すさまじい大音響が時雨堂の庭先にあたつてしたのは。

鼓膜こまくをつきぬかれて、あツ、と思つた一同の眼先へ、一条の朱電しゅでん！ピカツと見えた火の柱。

落雷だ。今しがた、一角が立っていたあたりの大おお櫓おけやきが異臭を放つた。刹那せつな、すべての姿が一度に大地へうツ伏してしまった。人の暴を超えた自然の暴力。

虚空こくうには、幹を白くみせて大櫓がダラリと裂け、寂寞せきぱくとしてしまった大地を嘲あざけるように、遠雷鳴とおかみなりはゴロゴロとうすれゆく。

一番船

今しがた二、三カ所へ落雷があつてから、嵐の空はけろりと霽れて、研ぎ出された半月のかげが、蒼黒い湖水の狂浪をすごいばかりに照らしていた。

打出ヶ浜の松原にも、あなたこなたに、根こそぎにされた痛ましい松の木が見える。

幾軒かの掘立小屋が、その辺に散在していた。打出瓦を焼く瓦師の小屋である。

人は住んでいないとみえて、松と松との間に、その小屋は見えても灯影はなかつたが、やがてどこかで、

「オオひどかつた……」と、つぶやく者がある。

見ると、瓦小屋の軒下に立って、ビツシヨリ濡れた着ものの裾をしぼりながら、久しぶりの月に思わず眼を吸われている風情。

見返りお綱であつた。

月の光をうけた鼻すじが、なんといいかたちだろう。

髪も少し濡れたとみえて、ほつれ毛の渦が、象牙の白さへペツタリとついているのを、指で梳いて櫛巻の根へなでつけながら、

「困つたねえ……とうとう今夜は宿をとりそこなつてしまった。こんな御難に会うという

のも、みんなお十夜のため、あんな奴こそ、さツきの雷かみなりにうたれて死んでしまえばいいのに」

腹立たしそうに独り言ごとを洩らしている。

すると、そこから六、七間離れた向うの小屋にも、誰か人影が立っていたので、お綱は、なんともつかずにぎよツとした。

執念深いお十夜かと思つたのである。だが、まさか……と思いなおして見ると、先でも気がついたとみえて、チラとこつちへ顔を向けたが、別に氣にとめる様子もない。

お綱は、今の動悸どうきの消えないうちに、またあわただしい胸騒むなさわぎを重ねた。けれど、それは前の不愉快な驚きではなく、あまり不意に与えられた喜びの狼狽ろうばいであった。

人違いではないかと、いく度も心を落ちつけて見直したが、やはり自分の錯覚さつかくではない。時雨堂しぐれどうの虚無僧しるしである。一節切ひとよぎりの主ぬしである。今も手にはその尺八を持つているのが紛れまぎのない印だ。

「どうしてあの人、今頃こんな所にいるのかしら……」お綱は不思議に感じたが、尺八を携たずさえているのから見るに、この打出ヶ浜へそぞろ歩きに出て、自分と同じように、雨宿りをしているのだろうと推量した。

しかし、それにしてはあまり夜が更けすぎている。自分はお十夜の眼から遁れるための、わざとこの松原に姿を隠し、もし矢走へ出る渡船があつたら、草津あたりで宿をとろうと考えている間に、今夜の大嵐に逢つて退ツ引きならなくなったのだけれど、あのお方はなんだった、今頃こんな淋しい所にぽつねんとしているのかしら？ と、法月弦之丞の悩みを知らぬお綱には妙に思えた。だが何よりも、こうして意外な人に逢えた機縁の欣しさに、胸の裡はいっぱいだつた。

何とかして、声をかけてみたい、かけられてみたい、と心はわくわく燥ぎ立つが、どういってよいものやら、いって悪いものやら、黙然としている人は、いつまでもつれなく機会をつかませてくれない。

じつと目を眺めているが、お綱はしどろになつて思い乱れた。乳のあたりで痛いほどの血の響きがする。ええ、どうしたんだらう私は！ と口惜しき悩ましさにじれていても、喉まで出そうになる言葉が齒がゆくも心の奥へ掠れてしまう。

「こんないい折はありやしない」と知りながら、みすみす恋に意気地のない自分を、お綱はどうにもしようがなかつた。

男を男とも思わず、他人のふところの物さえ神技のように掬りとるお綱に、こんな女

らしい悶えがある。

その女らしい苦しみを、お綱もこの頃初めて知った。よほど変則な生い立ちに今日まで紛れていたものが、悪土の中から芽を吹いたのだ。性格、本能、すべてがグングンと伸びきって悪の花を咲かせてしまった年頃まで、たった一つ、純な芽生えを忘れ残されていたのは、まことの恋——それであった。

世間にすれていて男にすれず、男にすれていて恋にはすれていない——見返りお綱も、今度こそは、その恋の試練にかけられねばならぬ。

「いい按配だこと、明日もこの分で晴れてくれると嬉しいけれど……」
やつとの思いでお綱がいった。

いったけれど、それは弦之丞へ話しかけた訳ではない。こう呟いたら、向うでそれを緒口にして、なんとか声をかけて下さりはしまいか——というはかない頼みの溜息なのである。

瓦小屋の柱に凍りついてしまったように、お綱はジツとして動かなかつた。

「ひどい雷鳴でした……」とか、「お一人でございますか」とか、今に向うの瓦小屋か

ら、弦之丞が話しかけてくれはしまいかと、きまり悪さの物騒ぎを押さええている。

「小娘でもない年のくせに、私はなんていう初心うぶなんだろう」

お綱は、急に自分がいとしくなった。

こないといしい吾身わがみを、初めて見出したように、自分と弦之丞の姿とを、偷ぬすみめにそつと見くらべたお綱の素ぶりには、あばずれた所などは塵ちりほども見えず、まったく、純なはにかましさだけがこぼれていた。

義仲寺ぎちゆうじの鐘であるう、大きく八刻やつを打った。

打出ヶ浜の波音にまじって、鐘の余韻よゐんが遠くうすれて行くと、弦之丞はフイと立って、向うの瓦小屋から歩みだした。

その人にはまたその人の懊惱おうれうがある。行くに行かれぬ江戸を偲しのび、逢あうに逢われぬお千絵の境遇を偲しのびやって、帰ることも夜更けたことも忘れていたが、四更よこしの鐘を聞くとにわかになががついたものであろう。弦之丞の白い姿が、松の間を縫ぬってピタピタと帰りかける。

はかない頼みがぷつぷつ切れて、お綱はハツと悲しくなりながら、

「あつ、もし……」

われを忘れて呼んでしまった。そこにたたずむ女のあることを、あらかじめ知っていたので、弦之丞は別に意外なさまもなく、松を隔てたすぐ前に足をとめて、

「なんでございますか」

静かに、にべもない返辞でふりかえった。

「あの……」お綱の唇は、いつにも似ずワナワナふるえて、われからいうべくあまりに舌がもつれがちである。

「あの、もしやあなたは……」といいかけてから、しどろになって後の言葉を探したように、

「もしや今日の日暮方ひぐれがた、あの時雨堂で、一節切ひとよぎりを吹いておいでになったお方ではありませんか」

いぶかしげに、女を見つめていた弦之丞は、月に隈くまどられた顔をニッコとさせて、

「ようご存じ……。気まぐれな手すさびゆえ、人に聞かすべきものではござりませぬ」

「いえいえ、ほんによい音色、関の山で聞いておりますと、骨身に沁しみるようでございますました」

「お身も尺八が大好きとみえるの」

「深く聞くことは存じませぬが、ただわけもなく好きなのでございます」お綱は自分でも気がつかない間に少し流暢りゅうちようになりながら、「殊ことにあなたの宗長流りつげいを立慶河岸たけがしで初めて聞いた晩から、もう妙に心をひきずられて……あれから後も、どんなに音色をお慕したい申していたかしれませぬ」

「お……」弦之丞は五、六歩寄つて、「ではあの時、酒に酔つた阿波侍が、無礼にも二階から拙者へ金を浴びせ投げた後で、お呼びなされた女客というのは？ ……」

「はい、私でござりました」

眼のやり場にうろたえながら顔を赧あからめている女の様子に、弦之丞は初めて注意するのであつた。しかしその身装みなりや肌合はだあいは、どうみても、この辺の者らしくなく、江戸の下町に見馴れたつくりである。

櫛巻くしまきや小柳帯こやなぎの引っかけで、いけぞんざいな身仕舞みじまいなのが、お綱は、その人だけに気がひけた。ともすると、自分が女掏摸すりだという奥底まで、弦之丞の涼しい眼に見透みとおされはしないかと怖ろしい気にも襲われる。

お綱が話を途切とぎらすと、弦之丞もまたいつまでも、取りつきにくく無口でいた。

ザブン、ザブン……と、打出ヶ浜に寄せ返す波も、冴さえ過ぎて冬に似る月の寒さも、恋

に意気地のないお綱の心を縮ませるばかりである。

虫の知らせか、弦之丞は、その時なんとなく、早く時雨堂へ帰らなければ、銀五郎や多市が、さだめし案じているだろうと思いだされてきた。

いつまでたっても、二人の仲に、何も結びつけられてこないの、ともすると相手がそこを立ち去りげに見える。それをやるまいとしてお綱はまたあわてて話しかけた。

「お言葉の様子では、あなたも江戸のようでおいでなさいませんが」
江戸と聞くと、弦之丞もつい心を惹かれて、

「お察しの通りであるが、すると、お身も江戸であるとみえるな」

「はい、本郷妻恋でござります。一人旅にひけをみせまいと、わざとこんな風姿をしておりますが、挿花の師匠をしておりますもの、どうぞおついでがありましたら、お訪ねなされて下さいませ」

「同じ江戸の者であつてみれば、いつかまたお目にかかる折もあろうが、少し仔細があつて、しばらく江戸へは帰らぬつもり……」

「おや、なぜでござりますか」

「なぜということもないが、旅が気まままでござるからのう……」

「いえいえ、旅もようございませうが、江戸の住心地すみこちも捨てたものではございませぬ。山の手のお屋敷町は知らぬこと、下町の小ぢんまりした格子作りこうしで、朝の膳ぜんには鎌倉かつおの鰹は、二階で寝ながら將軍様のお城を眺めて、太平楽たいへいらくをいっておられるような、そんな暮しはお嫌いでございませうか」

懐かしいものとは聞くのであつたが、弦之丞には、それとお綱とを結びつけてみても、なんの魅惑も感じなかつた。けれど、この女のなだらかな江戸言葉で、江戸の風物を語られることは、決して悪い思い出ではない。

「お武家様にしてみれば、江戸はなおさら羽振はぶりのいい土地。同じ編笠をかぶるにしても、刀の差しよう、鬘まげの結ゆい方まで、どこか違つておりますので、見る目もなんとなく頼もしゆうございます。私は気まぐれに、上方かみがた見物にきた帰りでございますが、もしなんなら、その江戸まで一緒に帰るなさつてはどうでござりますか」思ひきつて、こういつてのけてみたものの、もし弦之丞が承知したら、なんと間が悪いことだろう、道中も洒々しゃしゃとして歩けはしない、などとお綱は他愛たあいもない取り越し苦労までする。

弦之丞はただ笑っていた……そして不意にきつとなった。

誰か二、三人で駈けてくる者がある。

見ると、松林を縫ぬつて、肩に月影の斑ふをチラチラ浴びて急いできた者が、弦之丞の姿を見つけると、そこへ飛んできて、

「おつ、ここにおいでなさいましたか」と息を弾はませた。と、また一人があわただしく、

「弦之丞様、た、大変でございます」と、少し声をわななかせてつけ加えた。その者たちは、弦之丞も見知っている、大津絵師半はん斎さいの店の若い男どもであった。

「大変ですと？ ……」彼にも、さすがにギクとした色がある。

「な、なんといつてよいやら分りませぬ。とにかく、すぐ時雨堂へお戻りなすつて下さいまし」

「して、何ぞ異変でも起こりましたか。帰ることはすぐにも帰りますゆえ、まず落ちついて、その仔細しさいをお聞かせ下さい」

こういったのは、使いの者よりは、自分自身を落ちつかせるためだった。

「弦之丞様、驚いちやいけません。実はこうなんでしょう……。もう少し前に、凄すごい雷が鳴りましたろう。あの時師匠の半斎が、ちょうど廁かわやに入っておりましたが、出てくる

と私たちへ、今の雷はたしかに時雨堂の近くへ落ちたらしい、もし誰か怪我けがでもありやしないか、すぐに見舞に行ってみるといわれましたんで、まだ少し降っている中を、まっしぐらに駆けだしました。行ってみると、さア一大事です。どこの奴だか知りませんが、真つ黒に覆面した侍が大勢で、二挺ちようの駕を引かつつ昇かぎ、時雨堂から一散に閨の裏道へ登ってゆくじゃありませんか」

「や、大勢の侍が？ ……」

「二十人余りの人数でしたよ、何しろこいつア大変だと、あわてて中へ飛びこんでみると、雷が落ちたどころじゃありません……、銀五郎さんをよんでも返辞へんじはなし、多市さんをよんでもウンもスウもありません。時雨堂の中はガランとしていて、そのうちに月が出たので、こわごわあたりを見廻すと、どこからどこまで血の池のようなんです」

「おまけにあすこの大おお櫂おけへ、さツきの雷が落ちたものとみえまして、黒装束の者が二、三人、その木の下に斃たおれていますし、時雨堂の中はといえば、そこも、切ツつ切られつした返り血と、土足の痕あとがいっぱい、目も当てられない狼ろう藉せきでございます」

「おう……」と呻うめくがように弦之丞、次の語をやや急せぎ気味に、

「して、銀五郎と多市はいかが致しました」

「その多市さんは……」

半齋の弟子二人は、そこで、見てきたばかりの酸鼻さんびのさまを、まざまざと思い浮かべたらしく、気の毒そうに顔を見あわせた。

「手足が利きかなかったから、真まつ先に斬きられたのでしよう。多市さんのほうは、縁先と部屋の間で、ズタズタに斬きられておりました。ところが銀五郎親分のほうは、どうなったものでしょうか、いっこう行方が知れませんかです」

「姿が見えない？」

「はい」

「そして、関の裏道へ向むかったという駕かこは、たしかに二挺ちようでござったか」

「群むれ鴉がらすのような大勢に、取り巻かれて行いったのを見ただけで、しかとは申まされませんが、その駕かこはどうも二つのように思おもいました」

嵐の間におこり、嵐とともに去いった変事へんじを聞き終おって、弦之丞は驚おどきのあまり、しばらく愕がくぜん然ぜんとしていたが、やがて口の裡うちからただ一語。

「……しまった！……」

日頃から、多市や銀五郎の身辺には、蜂須賀家の者がつけ澄ましているところを知りぬいていたので、それとなく護まもつていてやったものを、今日に限って家を出たのが第一の失策——と及ばぬ臍ほぞをかまれもする。

いや、及ばぬといつて、空しく手を束つかねてはられない。襲おそうたものは、川長でも見かけたことのある天堂一角、その他の阿波侍あわぎむらいであろう。そして、彼らが拉らっし去つたという駕の一方には、必ずや銀五郎が押し込まれているに相違ない。

こう、直覚したので、弦之丞はにわかまなに眼まなざしをかえて、
「関の裏道はどこへつづいているな？」

声こゑまで凜りんと張つて訊ねた。

「京へは近ちかうございますが、大阪へは廻り道で、山から山を音羽おとわや笠取かさとりの里へとつて、宇治の富乃莊とみのしょうへも出られると申します」

「うむ、まさしゆうそれへさしてまいつたに違いあるまい。これ二人の者たち、まことに勝手ではあるが、今の場合は、一刻こくも早く、その駕や侍の群れに追おッ着いて行かねば相あならぬ」

「おお、あれを追つておいでなさいますか」

「時雨堂のあと始末や、半齋殿へご迷惑を及ぼしたお詫びなどは、いずれ立ち帰った上で御意ごいをえるほどに、よしなにお伝え申しておいてくれ」

「ええ、ようございますとも」

「では、お頼み申すぞ」

この間うちから、常に寡黙かもくで沈鬱ちんうつにみえていた法月弦之丞は、その時、まるで人が違つたように、そういうや否や、血相すごく身仕度して、阿波侍の一行を追うべく宙を飛んで走りだした。

変事を知らせにきた半齋の家の者も、それと一緒に、これまた時雨堂の方へ、落ちつかぬ足どりを急がせて戻つて行く。

こうして夜は一段と更ふけ沈み、打出ヶ浜にはうねうねと白い波ばかりが、あとの寂寥せきぼくとした大気の中なにほしいままな舞躍ぶやくの声をあげている。

お綱だけは、まだそこに立っていた。

しよんぼりと、瓦小屋の柱にもたれて――。

「……やっぱ縁がないのかねえ……」と、思わずもれる溜息ためいきがやるせない。

月影の中へ月より白く消えてゆく弦之丞の姿を、いつまでもいつまでもジイとそこから

みつめているうちに、辺りの月光は茫と霞んで、松葉の露のような泪が、お綱の両の睫毛にいつぱいな玉を泛かべていた。

弦之丞には、行路の一顧にもすぎぬ女であつたらうが、お綱の身にとつてみれば、手のうちの珠を奪われたよりは、もつと絶望的な空虚が胸をひたすのであつた。

明けやすい短夜である。五更といえども有明けの色がどこにもほのかである。

誰もいない打出ヶ浜……。

見る人もなく聞く人もない瓦小屋。

瓦へかむせてある濡れ庭へ、居崩れたままにうつ伏したお綱は、生まれて初めて真から悲しいということを知つて、誰に気づかぬもなく、シク、シク……とすすり泣きを洩らしていた。

やがて、ボウーという法螺の音が聞こえる。

矢走へ通う松本の船渡しから、一番船のでる知らせである。

(江戸へお帰り、江戸へお帰り、お綱さん、諦めて江戸へお帰りよ。月夜の風邪をこじらすと、命取りになりますよ)

一番船の貝の音はこういつてお綱をなだめ促すように鳴っていた。

岐路の峠きろとうげ

ららんとした太陽が照りつけていた。小鳥の音が晴々はればれとひびく、山や峰は孔雀色くじやくいろの光に濡れ、傾斜の樹々きぎは強烈な陽をうけて、白い水蒸気をあげている。

「急げ、急げ」

今しも、笠取かさとりの盆地から、禪定寺ぜんじょうじ峠とうげの七曲ななまがりを、ヒタヒタと登ってゆく武士の一群れがあつた。

昨日の嵐にふるい落とされた病葉わくらばが、道一面に散りしっていて、そこを踏みしめてゆく大勢の足音の前に、山小禽やまこどりが腹毛を見せてツイツイとおどろき飛ぶ――。

「急げ、急げ」

「峠を越えると郷ごうの口くち」

「郷の口には休み場もある」

「何しろ支度をかえなければやりきれない」

「明け方から急に疲れを覚えてきた」

「兵糧がほしい」

「もう一息、もう一息!」

「道も河内へ入れば平坦になる。大阪表まで六、七里とはないぞ」

一行はヘトヘトに疲れていた。

先に立つて励ますのは天堂一角、九鬼弥助、森啓之助。

二挺の駕を列に挟んで、以下二十人ほどの侍がつづいてゆく。難路へかかるたびに

愚痴は、夜を徹してこの悪路を、関の裏街道から休みもなしに押ししてきた汗と喘ぎの悲鳴

である。

繩括りにした二挺の山駕、それをついでいるのも侍だ。時折、肩を代え、肩を代え

して、螺旋状にうねった道を峠の頂まで登ってきたが、

「あつ、また血がこぼれる……」

ドカンと、一挺の駕尻を下ろしてしまった。

その駕の裾から、おびただしい血汐が滴りだしている。みる間に、それは幾すじもの赤

い線となって、生ける蚯蚓のように、土の上を横縦に流れだした。

「こう血をだしては死ぬであろう」

「だめだ。死ぬぞ、こいつは」

下ろした駕を取りまいてガヤガヤしだした。

「この分では、所詮、大阪までは保つてしまい」

「お下屋敷へつく前に、死骸になつてしまつては、骨折り損というものだ」

様子をふりかえつた天堂一角は、森や九鬼とともに、つかつかとそこへ戻つてきたが、半ば疲労に挫けている一同を見て、

「死なしてはならん！」

一喝をくれて、みずから駕の繩を切りほどき、垂れを上げて中を覗くと、自分もいつそ
う狼狽した気色である。

「すぐに手当てを加えろ。これから大事なお調べにかける奴、死なしては、ここまで骨を折つてきた甲斐がないぞ」

大勢の手で、駕の中から引きずりだされたのは、唐草銀五郎であつた。

深股の傷は、柘榴のように弾けている。ほかにも一、二カ所の掠り傷があつて、五体はむごたらしい紅に塗られていた。

「用意の金創は誰が持つている」

「はっ、これに」

「指先へ付けて塗りつけろ。そして血止めをギリギリと巻きしめておけ」

「はっ」

「誰か、水を探してこい、水を」

「はっ」すぐ二、三人が溪流へ駆け下りた。

銀五郎は、おびたらしい出血に、グツタリと気を失っている。情けにあらずしてそれを手当てする侍たちには、無論荒々しく扱われた。

「一方は大丈夫だろうな」

水を待つ間に、九鬼弥助がいった。一方とはつまりもう一つの駕を指すので、その中には、表一八郎が無念の縛めをうけて、押し込まれているのは明白である。

中の一人が、こう答えた。

「あの者のほうは、捕える時に深傷を負わせてございませんから、まず御懸念には及びませぬ」

「そうか……」

九鬼はうなずいて、一角と啓之助が立っている岩の側へ歩みだした。

その時、天堂一角は、腕ぐみをしたまま、峠の七曲りを見下ろしていたが、何を見出したものか、眉に険を立てて、にわかにならぬ色を現した。

「悪い所へ……」一角は舌うちを鳴らして、

「誰かここへ登ってくる」と、ひそめた眉のあたりへ手をかざした。

「高野詣りか三塔の行者か……それともただの通行人か、なにしろ四、五人でございませぬ」

それをうけて、森啓之助がつぶやくと、九鬼弥助も側に立って伸び上がりながら、「なるほど！」と同じほうへ眼を据えた。そして三人とも、しばらくの間、峠の上り道からここへ指してくる人影を眺めていたが、そのうちに九鬼弥助が一笑に附して、

「まさか追手ではありませんまい」

「無論、そんな者でないことは分っているが……」と一角は注意ぶかい容子で、あたりにいる侍たちへも聞かすように、

「ただの旅人にいたせ、かような態を見れば、何かと眼をそばだてて行くに相違ない。万一、蜂須賀家の者と知られて、世間へ噂いたされては後日の不為であろう。とにかく、銀

五郎の体を、どこかへ隠したがようござる」

「いかにも！」啓之助も同意して、にわかにあわてた眼づかいをしながら、

「こりや、手当ては後にして、先に銀五郎の体を見えぬ所へ運んでおけ。そして、各

《おのおの》もしばらくの間、姿の見えぬようにしているがよい」

「はっ、承知しました」答えると、侍たちは、ただちに銀五郎の手足を取りあつて、かんぼ灌木の夏草の茂みにつつまれた細道へ隠れてしまった。

そして、二挺の山駕も、邪魔にならない所へ片づけさせた後に、天堂一角は陽よけの笠を傾かたげ、弥助と啓之助は、道ばたの岩に腰を下ろして、何気ない風にたばこをくゆらしている……。

しばらく森しんとしていたうちに、さつき、ここから姿の眺められた旅人たちであろう、何か声高に話してくる声か足音とともに近づいてきた。

「よく晴れましたなあ、谷の霧が」

「まったくいい気持で。何しろ、山を歩きつけると、あの埃ほこりッぽくって物騒な本街道は歩けません」

「街道すじも、喧嘩がなくなつて大名の往来さえなければ、決して悪かありませんが」

「おお、ここに立つと、ちょうど、宇治川の流れが、水でくの字を描いたように見えます」
「山もよいじゃありませんか。東のほうをごらんなさい。昔、徳川様に見出されて、お抱かかえになった忍者の出生地——有名な甲賀の山国があの辺です」

「なるほど、つまり幕府の甲賀者が出た郷さとで……」

「さよう、あの尖とがった山が矢筈やはずヶ岳たけ、その右手のが猪いの背山せやまとかいいましたよ。まあ有名なぞはどうでも、あの鬘ひだになつてゐる山の皴しわが、なんともいえない深味のある色じゃございませんか」

すぐそこまで来たのをみると、六部、高野詣り、道者などの五人連れで、いずれも白い甲こうがけ脚絆きゃはんに杖をもっているが、中に一人、それをもたない虚無僧てんがいの天蓋てんがいが一つまじつていた。

「どうです?」

高野詣りが腰をのばしていった。

「この辺で、一服やるとしましょうか」

すると、六部がソツと袖をひいて、道ばたにいる侍を目で知らせながら、さりげない調子で、

「いや、もう一息まいりましょう」

「そうですか、じゃあ……」

「下りへかかる岐れ路に、たしか、眺めのいい場所があつた筈で……」スタスタと通り過ぎてしまった。多少何か無気味にも思ったようなふうである。

一人の虚無僧も、他の行者たちについて足を早めたが、行き過ぎてから、二、三度うしろをふりかえつた。わざと、やりすごす気で、たばこをくゆらしていた一角や弥助は、その五人を一樣一色な遍路とばかり思っていたので、虚無僧のまじっていたことも、またその天蓋のかげに明敏なまなざしが働いていたことにも気がつかなかつた。

気味の悪い侍を見かけたのがきツかけで、無口になつた五人の道者連は、それから二十丁ほどタツタと下つてきたが、やがて、甲賀路と宇治の岐れ道へきた時、

「では、皆様……」

と、虚無僧だけが、ふいに立ちどまつて、

「私だけは、ここでお別れ申します」

「おや」と、四人は変な顔をして、

「虚無僧さん、あなたは甲賀へおいでになるので……?」

「はい」虚無僧は慇懃に、

「もとよりあてのある旅ではございませんが、最前、峠の上から甲賀の山を見ましてから、急にまいりたくなりましたので」

「そうですか——ですが、ここからまいりますと、木元、裏白なんていう、峻しい山や峠ばかりで、いくら山好きでもあきあきしますぜ」

「ほかにちと思いだした用事もございますゆえ」

「そうですか、じゃせっかくお大事においでなさい」

「ありがとうございます。今朝からご一緒になりました、いろいろお世話になりました」

「なんの、遍路の者はお互いでございます。草鞋の代えや旅籠銭は大丈夫ですか」

「はい、用意しております」

「お一人になったら、必ず、暮れないうちに宿をとることですよ。じゃ、お気をつけなすつて……」

半日の道づれを捨てるのも、何か名残惜しそうに、一人を減らして四人になった道者たちは、コトン、コトン、と杖の音を淋しくさせて、禅定寺の峠を下りにかかって行く。

虚無僧は、寂然と立って見送っていた。

旅の人の情けはうれしい！ しみじみ思うのである。ことに、ああした遍路同士が、貧しい情けをおくりあうことは、泪ぐましいほどで、鬭争の巷や富家の門では見られない美しさだと思ふのであつた。

そして、静かに、道端へ寄つて行つた。

朽木の根から、滴々と落ちてゐる清水に喉をうるおそうとして、ふと、苔や木の葉に埋もれてゐる道しるべの石をみると、

南——郷の口をへて奈良街道。

北——裏白越え甲賀路。

としてある。

「甲賀……」じつと見つめてゐる虚無僧の胸に、懐古の念が清水のように湧いてきた。

「甲賀といえ、甲賀組の発祥地、いうまでもなくお千絵殿の祖先の郷じゃ……」不思議な心地がするのである。

ゆくりなく、恋人の祖先に巡り会つたような心地がする。そしてそこに、なお道しるべの文字を見入つてゐた虚無僧は、法月弦之丞なのであつた。

弦之丞は、ゆうべ、打出ヶ浜からまつしぐらに立つてきた。無論、蜂須賀家の者を追いかけて、銀五郎を取り返すためにである。

一八郎のことは、彼の念頭に薄かった。およそのことは察していたが、まだ深くその人を知らないために。

しかし、銀五郎の一身だけは、命を賭しても取り返さずにはおかない決心であった。自分というものが、江戸の地をふむことのできない境遇である間は、銀五郎こそ、お千絵様の身を守り、甲賀家を支えてくれる唯一の力だ。

蜂須賀の侍たちは、世間の目を避けるためにも、必ず裏街道をとつて大阪へ戻るであろうと察したので、彼は、迷うことなく道をとつて、夜の暁方に、醍醐の山寺で一刻ばかり休んでいた。

そこで落ちあつたのが、今、別れた遍路の人々である。天蓋や、わらじなども、その人たちが、寺で工面してくれた物だった。弦之丞は、先の目をくりますために、その人たちとここまで同行してきたのである。

そして、計らずも、峠の頂で、天堂一角や九鬼弥助の姿を見かけた。

先では気がつかなかったが、弦之丞は、あの瞬間にそれを見遁していない。駕も二つあ

った、その他の侍たちはどこかに休んででもいるのだろう——そううなずいて通り過ぎた。ここは岐路きろになつてゐるが、ここまではどうしても一本道。いやでも応でも、天堂一角やあの駕が、目の前を通りかかる筈である。

弦之丞は、一口の清水に、湧き沸たぎる血を抑おさえながら、ゆたりと、道しるべの側へ腰を下ろした。

「……もう急ぐことはあるまい」

彼は、ことさらに心を落ちつけるため、尺八を取つて、眼を半眼に閉じ、ゆるやかに唇くちを湿しめしていた。

禪定寺ぜんじょうじ峠とうげ——、あの頂から少し下くだつて、森々しんしんたる日蔭へ入ると、右は沢へなだれて、密生した檜ひのの傾斜で、上にも、栃とちや松まつが生おい茂もつており、旅馴れた者にも気味悪い暗緑このしたやみな木下このしたやみ闇——。時たまつんぎく鳥のけたたましさは、斬られた女の声のようだ。

程もなく、シタシタと、地をうつ大勢の足音が、その勾こう配ばいを湿しめつぽく流れてくる。さきに峠の上の平地ひらちで、二挺の山駕を下ろしていた阿波侍の一群れである。

森啓之助と九鬼弥助は、俵一八郎を入れた山駕わきの側につき、その後からは、天堂一角が

銀五郎の駕を守って、なんの予感もなさそうに、例の岐れ路まで進んできた。

と——不意に、どこかで、

「待てッ」

ピンと、耳をつんざいた声があった。

すぐ続けざまに同じ音おんじょう声が、

「しばらく待て！」

こう、叫んだかと思うと、道しるべの石から、躍やくぜん然と立ってきた法月弦之丞が、あわてる列をかきわけて、すばやく、一八郎の駕の棒ぼう鼻ばなをドンと抑えてしまった。

「や、や……」とうろたえる者を睥へいげい睨して、

「蜂須賀の方々へ、ちと申し入りたい儀があつて、ここにしてお待ちうけ致していた。とにかく、この二挺の駕をお止めなさい！」

と、身をかためて、目に余る一行の道を阻はばめた。

「なにッ」

聞くより九鬼弥助は、刀のこじりをはね上げて、弦之丞の姿へ目をいからしつつ、「知らぬことならとにかく、吾々を蜂須賀家の者と知って足を止めよとは言語道断だ。」

「一体汝はどこのうろたえ者だツ」

「もう、見忘れ召されたか——」と、弦之丞は片手で天蓋の紐を解いた。それは、早くも八方の敵をうける用意である。

「——いつぞや川長の門口で、お志の鳥目を浴びたあげく、その夜裏庭では各のお手の内まで拝見いたした虚無僧でござる」

「えつ……」弥助は胆をヒヤリとさせたが、怯みをみせまいとするのであろう、なおも、額に青筋をうねらせて、

「おお、その虚無僧がどうしたというのだ。何のゆえにこの駕を止めるのだ」

「されば、もとよりその夜の意趣遺恨ではなく、拙者の知人である銀五郎と、ほか一名の者が、故なくして、方々に捕われたと聞き、お下げ渡しを願ひに出たのでござる」

「ならぬツ」

弥助は一喝をくれて、かたわらの森啓之助を顧みながら、

「こんな奴にかまっついては暇つぶし。それツ、お先へおやんなさい」

「心得た」というと、森啓之助、ほか八、九人の侍とともに、一団になって駕尻をあげた。

「ええ、待たぬか」と、弦之丞が、それを支えんとする隙を狙って、

「邪魔するなッ」

粗暴な九鬼弥助が、抜き打ちに斬りつける。

はっ——と思うと、弦之丞は、身を沈めて、手元へのめッてきた弥助の大刀を、目もとまらぬ隙にもぎ取った。しまッた！——弥助は、色を失って飛び退いたが、時遅し、法月弦之丞に持たれた一刀は、あだかも名刀に変わったかと思われるばかりな冴えを増して、片手打ちに、ズウンと弥助の肋まで斬りこんでしまった。

「わッ……」細かい血が濛とあがる……。九鬼弥助は空をつかんで、櫓の傾斜へ落ちこんで行った。

銀五郎の駕を止めて、こなたに立っていた天堂一角は、その態を見るなり、

「おのれッ」といいざま、ジリジリと詰め寄ってきた。

一角は、啓之助のような、白面柔弱でなく、また、弥助よりも兇暴であるかもしれないが粗暴ではない。その剣を放つにしても、彼らの腕とは格段な差があり、弦之丞にとつても、侮るべからざる剛敵である。

この隙に、柔弱者の啓之助は、人数の半分以上を引きつれて、一八郎の駕一つを固めながら、ダッ——と麓へさして急いでしまった。

その後の怖るべきものは、天堂一角だけである。あとの葉武者はむしやは何ほどのことがあろう——と、弦之丞は、それに三分の氣を構え、七分の心しんりよく力を一角に向けて、血ぬられた大刀を青眼せいがんにとりなおした。

ガラガラした大刀の数が、車の齒のように、弦之丞のまわりを取り巻いている。天堂一角は、たえず彼の前へ前へと、切ツ尖きさきを向けていた。

しかし、いつまでたつても、弦之丞に微傷びしょうを負わせることもできない。

無碍むげに、一歩でも、手元へ近づいて行つた者は、たちまち、相手の一閃せんを浴びて、あえなき血けむりを揚げてしまう。

すでに四人は斬られていた……。

また斃たおれた！ パサツ——と、濡手拭ぬれをはたくような血の音。

だんだん頭数が減つてゆくばかりだ。一角を除く以外の者は、もう怯氣おしけに襲われてか、ともすると逃げ足にみえる。

斬つても斬つても、弦之丞の構えは、すぐ鉄壁に戻っていた。そのために、一角はどうしてもつけ入ることができない。何という流名だろう？ 何という構えであろう？ そし

て何と倫りんを絶つした技わざだろうか。

一角にとつて、頼み甲斐のない助太刀は、また一人が朱あけになつたのをきツかけに、わつとひるみ立つて、麓ふもとの方へ逃げだした。

うまくはずして行つた森啓之助でも呼んでくる気か？ おそらく、あの啓之助に、ふたたびここへ戻つてくるほどの勇氣はあるまい。

だが、さすがに天堂一角は、あくまでそこを退ひかなかつた。人ひとまぜをせぬ一人と一人、ややしばらく息をひそめて睨はらみ合つた。原土はらの中で、有名な使い手だけあつて、難波なんば一方ほう流りゅうと覚うしき太刀筋はたしかなもの。弦之丞とて、迂濶うかつにはあしらえない。

こういう筋のいい太刀は、ほとんど、その斬る手も引く手も見せない迅はやさを持つている。裏かつ！ とばかり、たつた一度、双方の白刃が摺すり合つたかと思うと、天堂一角の姿は、忽然こつぜんとしてそこらにあらず、弦之丞のすぐ側の樹きに、どこから飛んできたのか、一条すじの捕縄とりなわが、蛇のように絡からみついて、ピンと向うへ張つていた。

弦之丞と一角の技わざは、とうとう優劣がつかかなかつた。この時の場合は、まず互角といつていい。なぜならば計らざる者が、その刹那せつなを引き分けてしまったのだ。

と、いうのは。

時雨堂しぐれどうから、危うく逃れた目明し万吉。この変事を、住吉村にいる常木つねぎ鴻山こうざんへ知らせようとして、ヘトヘトになりながら、折も折、この山越えにかかってきた。

そして二人が切り結んでいる態ていを見るや、彼はなんの猶予ゆうよもなく、得意の捕縄とりなわをスルスルと解いて、天堂一角へ狙いをつけた。

そこで、捕縄の先が、宙ちゆうをうねって行つた途端に、一角は早くも感づいて、櫓ならの茂つた谷間たにあいの崖へ身を躍らしてしまつたのだ。

「もしやあなた様は、時雨堂においでになつた、法月様ではございませんか」
 的まとをはずした捕縄とりなわを輪わにしながら万吉は、弦之丞の前へ姿を見せた。

「おう、してお身みは何者でござる」

「あの晩、泊り合せた万吉という者ですが、深いお話は後にして、どうか、あすこにある駕から先にみて上げて下さいまし……、何だか、苦しそうな呻うめき声が洩れております」

駈け寄つて、山駕を括くくした縄を切りほどくと、銀五郎の体が力なく外へ横仆れになった。さつき、多少の手当てを加えられたので、気はついてしたが、奄々えんえんとして苦しそうな息づかい。

「おッ、銀五郎ではないか」

弦之丞は、白い膝の上へ、その体を抱え込んで、二度ほど、耳元へ口をつけて名をよんだ。

「あ……弦之丞様……」

「分ったか。気をたしかにもて」

「分りました……」ガツクリとうなずいて、「お助けなすって下さいましたか」

「おお、蜂須賀家の者の手より取り戻したのじゃ。もう決して案じることはないぞ」

「せつかくですが……弦之丞様、そのお骨折りは無駄でした」

「な、なんと申す。この弦之丞がそちを取り戻したのが無駄じゃというか」

「無駄です！ わ、わっしや、ちつともうれしかありません……」

「うれしくない？」

弦之丞はせきこんだ。彼としてこれまでの力を^{つく}尽して助けた者から、こんな情けない言葉^{しんがい}を聞くとは、あまりに心外であるに違いない。

静かに^{ひよ}鴨が啼いている。

万吉は、あたりの死骸を谷間に蹴こんで、あっちこっちを見張っていた。

「弦之丞様……」銀五郎は、傷手いたでを忘れて改まった。

「さだめしお腹が立ちましよう。命がけで助けた者が、うれしくないの無駄だのといえ、誰だつて、むつとするのが当り前です。……ですが、嘘の嫌いな唐草銀五郎、まったくうれしくございません」

「心得ぬことを申すではないか。腹藏ふくぞうなく、そのわけを承ろう」

「申しましよう……これをいわないでどうするものか」

ほつと熱い息をついた。

こらえてはいるが、あれほど出血した銀五郎は、深傷ふかででよほど体も疲れているとみえ、眼の縁ふちには青い蔭くまが隈どつており、きれぎれにいう声にも、どこかしら精がない。

「わけというのは、この銀五郎が、失礼ながらあなた様にあいそをつかしているからです。早くいやあ見きりをつけてしまったんだ……法月弦之丞という方は、腕すくは優すぐれているけれど、泪なみだもなければ血もない武士だと……」

「待て。ではそちは、あくまでお千絵様のことをいうて、この身を責めるのじゃな」

「責めます！ 弦之丞様。わつしをこうして助けてくれる程なお心で、なぜ、お千絵様を救つて上げては下さいませぬか」

「ウーム、いゝな銀五郎！ そのことだけはいうてくれるな」

「いえ、いゝ、いゝわなくちやありません……」銀五郎は彼の手頸てくびを固く握りしめた。怖ろしい力のふるえが感じられる。その眼は衰えた中にもあらん限りの訴えを燃ねん焼しょうしている。唇かゝわが濁くわく、舌かゝわがもつれる……しかもまだ烈々の俠きやうけつ血けつは唐草の五体に溢あふれ返かへつて見える。「先の晩にも、あの通り、諄くどいお願いを致いたしました。もうこれが最後のお言葉をきく時です。さ、おつしやつて下さいまし。江戸へ帰かへつてお千絵様を救すくつてあげて下さるか。それとも厭いやか……それを」

「無理じや……」弦之丞は良心の苛か責やくと、銀五郎の言葉の鞭むちに、顔まで蒼白そうはくになりながら身を悶もだえる。

「江戸へは帰られぬ仔細しさいがある。それはたびたびいうてあるではないか。おう！ この弦之丞の心も察さつしてくれい」

「では、どうありましても？」

「……身に骨肉がないならば——父や母や兄弟や、そして家門や徳川家の直参じきさんなどという家統いえすじがないならば……」

「わ、わかりました」いかと思つたと銀五郎、ガバと前へうつ伏した。いつの間にか、弦

之丞が側においた刀を忍ばせていたらしい。びつくりして抱き起こしてみると、切ツ尖深く自分の手で脇腹を抉つていた。

こんこんと流れでる鮮血が、自分の膝へも温く浸み徹つてくるのを感じながら、弦之丞はなにもいわずに、ただひしと銀五郎を抱きしめた。

唐草は断末の朱に悶え苦しんだ。が、彼には、ふたたび起てない自覚があつた。多市が最期をとげたこと、一八郎が捕えられたこと、すべての破綻とともに、自分の終るのも当然だとは知っている。

恨むらくは、ついに、阿波の土を一足もふまないこと——そして法月弦之丞をついに動かすことができなかつたこの二つ。

この二つの恨事は、彼が白骨となるまでも、永劫に抱く心残りであらねばならぬ。急に、抱えている腕へ重みがかかった。ガクリとこときれた様子。

石のようになつて、睫毛に涙をさえ溜めていた弦之丞。はツと吾に返つて、眼がしらの露を払い、銀五郎の頬へ自分の頬をピタとつけて耳に口。

「これ、銀五郎！ 銀五郎！」

声のかぎり呼びかえすと、さつきから始終を見ていた万吉が咄嗟の気転、手拭に清水を

湿しめして飛んできて、銀五郎の口へタラタラと注つぎこんだ。

ぼかと、眸ひとみを開いたのを見て、弦之丞はきつとなった。そして、彼の薄らぐ魂へも、はつきりとうなずけるような音おん声じやうでこういった。

「こりや唐草！ そちの最期さいぎに一言の手向けたむがある。今日までは、大府大番頭だいふおおばんがしらの家名をけがすまいとおもい、また私の両親はらからや兄弟あにたちに憂うき目を見せたくないばかりに、恋を捨て武士を捨て、血なみだも涙なみだもない懦夫だふとなり終つていたが、今こそ、岐路きろに立つた弦之丞は、自分の指して行く道を瞭あきらかに思い決したぞ！ 臨終いまわのきわによう聞いてゆけ！ そちの頼みはたしかにこのほうがひき受けた！ 必ずお千絵どのの今の境きやうが界がい、骨身こつしんにかけ救つてとらす。また甲賀の家も支さえてみせる。なおそのためには、この身の武運ぶくわんが尽きぬ以上、阿波の本土に入り込んで、世阿弥殿よあみの末路を見届け、蜂須賀家の内秘を必ず突き止めてみせるであろう。よいか！ 聞こえたか、銀五郎！ 法月弦之丞の今日の誓い、これを黄泉よみの餞はなむけ別わか別わかとして受けてくれい……」

銀五郎のなきがらを埋めた土の上に、淋しい山の花が手向けたむけられたのは、それから一刻とときほど後のこと。

弦之丞は合掌して、しばらくの間、めいもく目した。万吉ですら、しきりに涙がさしてきてたまらない様子。

そこは峠の道を横に入つた崖の中腹で、甲賀の山、かわちだいら河内平、晴れた日にはきたん紀淡の海も望まれよう、風に鳴る静かな古松こしょうと榛はんの木にかこまれている。

「じゃ弦之丞様、いよいよあなた様も御決心の通り、これからただちに江戸表へお立ちでございましょうか」

万吉はこう改まって、先ず一通り自分たちのいきさつから今日に至るまでの事情を話した後、もし弦之丞がここから江戸へ向うならば、自分はお千絵様に会うことを一時思い止まつて住吉村にある常木つねきこうざん鴻山へ、事態の急変を知らせたいという気持を述べた。

すべてを聞きながら、思案をしていたが弦之丞。

「いや……」と向きなおつて、

「その住吉村へは拙者がまいつて、一度常木うじ氏にもお目にかかつておこう。ところで、江戸のお千絵殿や銀五郎の身寄りのほうへも、早くこのことを知らせねばならぬが……」と、また、小首を傾かしげて考え沈む。

「む！ 万吉」ハタと膝を打つて、「江戸表へは、そちが一足先へまいつてくれぬか」

「えつ、お千絵様のお屋敷へ？」

「そうじゃ。銀五郎のかたみとなつたこの髪の毛を持って、お千絵殿に会つた上、仔細しさい残りなく話してくれい。そして、いずれこの弦之丞も追つつけ江戸へまいるであらうとな」

「蔭ながらわつしもいろいろ伺つております。そう申し上げたなら、さぞお喜びでございましょう」

「しかし、それもごく密々みつみつに——本来江戸へは帰れぬ事情のあるこのほう、必ずとも他ひ人の耳には触れないようにな……」

「そこに抜かりはございません。じゃ、わつしは行きがけに大津絵師の半齋はんさい老人の所へ寄つて、何かの詫わびや礼をすました後に、その足で江戸表へ急ぎます。ところで、あなた様と江戸で落ち合える段どりは、およそ何日ごろになりましような」

「まずふたつき二月か三月みつつきほど後であらう」

「たいそうお手間がとれるんですね」

「聞けば、近いうちに蜂須賀阿波守は、卍丸まんじをしたてて徳島城へ帰国いたすとある。安治あじが川尻わしりの下屋敷の様子、その取りこみに紛まぎれてザツとうかがってくるつもりじゃ。さもなくては、お千絵殿に会つたところで、充分この後の謀しめし合せがつかぬからう」

「へえ……」といったが、万吉は相手の顔をけろりと見ていた。十手を箸はしのように持つて、この年まで目明しの飯を食つてきた自分でさえ、あの下屋敷の堀ふしあなの節のぞ穴のぞさえ覗のぞけずいたものをと、少し片腹痛い気がしないでもない。

「ですが、ずいぶん危あやのうございますぜ」

「なんの、危あやなかつたら引き退さがるまで、あわよくば、俵たわら一八郎を救い出せるかも知れぬ」

「ああ、俵の旦那も、とうとう阿波の犠ぎせい牲せいになつてしまった……」ふと暗然とつぶやいたが、気を取り直すように立ち上がった。

「そう事が決まりましたら、一刻も早くお別れと致します。今度こそは、かけがえのねえあなたのお力、どうぞめつたな足を踏みださねえように。また、常木様にお会いになりました節は、万吉はこうこうと、俵様のことのついでに、お伝えなすつて下さいまし」

「心得ている。それではもう出立するか」

「へえ、にわかせに気が急せいておりますので」

「銀五郎が、この土の下に眠つておるかと思うと、拙者は、何やらここが立ち去りにくい」
 「ごもつともでございます。江戸であなたとお千絵様が、恋とやらに燃えていた頃は、ずいぶん世話をやかせたという話だそうで」

「その昔、お千絵殿の父世阿弥よあみ殿から、少しの恩義をうけたのに感じて、こうまで義理を尽くしたのは見上げた男。弦之丞が岐路きろの迷いを離れたのも、銀五郎の血と熱に染め揚げられたようなものじゃ」

「わつしも江戸へまいりましたら、偽紫にせむらさきに染まないで、その真つ赤な男おとこぎツてところにあやかりたいものでございます」

「おお……」と弦之丞は尺八を取り上げて、

「銀五郎の手向けたむに一曲吹こう、そちも別れに聞いてまいるがいい」

「あ、そいつはご勘弁願います。でなくてさえ先程から、俵様のご無念がおもわれたり、唐草親分の非業ひごうな姿が目について堪たまらねえところ——。この上哀れひとよぎりッほい一節切ひとよぎりを聞いた日には、嬬かかあのことまで思いだしやす。泪なみだのなの字も目明しにや禁物きんもつ、一足お先へ押おッ放はなしてお貰もらい申まします」

怖い物から逃げるように、万吉は、道中笠を西日かたへ傾かたけて、禅定寺ぜんじょうじとうげ峠たけから江戸へ心を急がせて行いった——。

机が一脚、寂然としてある。

柿の木から洩れる秋の陽が、古畳の目に明るく射していた。

あたりは草深い百姓家らしいが、その部屋の中は百姓家らしくなく、和漢の書籍だの、
 船載のエレキテルだの、そうかと思うと、葉を刻む薬研が見えるし、机の上には下手な
 蘭字が書きかけてあり、異人墓の石のかけらがその文鎮になっている。

そして誰も人はいない。

ガランとして、明けッ放しになつたまま、しばらくは日向溜りの秋の蠅が、黒豆のよ
 うにジツとしていた。

「おほん……」

ややあつて、どこかで一ツ咳払いがしたかと思うと、厠の戸のさるがカタンといった。
 厠の戸をギーと開けて、悠々と出てきたのが、すなわち机と薬研の主であろう。

誰かと思うと、久しぶりにその細い丁髷と細い顎を見せた、平賀源内なのである。
 手洗鉢の水を、南天の葉へチョツチョツとかけて、手拭掛けに手を伸ばしながら、
 さて、おもむろに庭の秋色を眺め廻した後、机の抽斗から薬草の胚子らしいものを取り

出して庭へ下りた。

長崎で手に入れてきたばんしゆ 蛮種たねの薬草の胚子を蒔まいて、一つまた暢のんき気な漢方医者どもを、あつといわせよう下した心こころとみえる。

縁の下からくわ 鋏を取りだして、それを杖のように突きながら、離り々とした秋草の中を歩きだした。

そして、ここらあた 辺りだと思う所で、サクリと鋏を入れたが、その鋏を土にさしたまま、源内はヒョツと妙な顔をしてしまった。——というのは垣の外に、胡う散さんくさい人影が、しきりに辺りをうかがっていたからであろう。

「また嫌な奴が立ち廻っているな……」

こう思ったので、平賀源内、障さわらぬ神たに崇たりなしというふうたに、胚子の袋をそこにおいて、こつそり部屋へ戻ってきた。

「おれは医者だよ。天下が誰のものになろうとおかまいはない。そう執念深くつけ廻さなくつてもよさそうなものじゃないか……。常木こうぎん 鴻山とんざんと一緒にいたので睨まれたのだろうが、もうよい加減にして貰もらいたいな。心しん煩ぼんという病気になる、蘭方らんぼうでいえば神経衰弱

……」

煙管へ一服つめてみたが、うまくないのでほうりだした。今度は薬研を引きよせて、桂皮か何かをザクザクと刻みはじめる。

「おれは医者だから漢薬蘭薬なんでも売るが、病気は薬で癒らない。まして心煩——神経衰弱なぞはてこずりものだ。罹りたくないな、あんな病には。他人はかかってくれなければ困るが、おれは罹るのはご免だよ」

手さえ動かしていればザクザク薬が切れて行く。空想をするにはいい仕事だ。

「——驚いたなあ、あの時は。あの時から心煩だ。常木鴻山がぬきや仲間のを使って、阿波へ渡ろうと準備をしているのを、いつの間にか蜂須賀に嗅ぎつけられた——今考えてみると、あれは三次の密告だな。住吉村のぬきや屋敷へ、不意に覆面のやつが斬り込んできた。二、三十人はいただろう。堪ったものじゃない。鴻山は浜から小舟で逃げだしたが、おれは異人墓へもぐりこんで、やつと命だけは無事にすんだ……。だが、どうもそれ以来、人を見るとびつくりしていけない」

小鳥の声が朗らかだ。

薬研の音が面白い、医者はのんきな商売だとは、平賀源内、思っていない。

「一体おれが物好き過ぎる……」反省心が出てきたらしい。

「何も好んで、常木鴻山などと一緒に、ぬきや屋敷に潜もぐっていることはなかつたのさ。ここにこうして、百姓家の一間を借りて、小遣こづかい取りの病人も来るのだから、おとなしく、異人墓の文字でも写して勉強しておりやいいことさ。だがどうしたろう鴻山は？ 舟で逃げたから捕つかまりはしまい、紀州の奥でも隠れたかな、何しろおれは迷惑した。もう、天満浪人だの隠おん密みつだの、蜂須賀家だのツて、そんな物騒な渦の中へは飛び込むまいぞ。そうともそうとも、早く一つエレキテルや火浣かかんぶ布でも仕上げて、大金儲もつけをしなくっちゃ……」
動悸どつきがやむと、大分考え方が明るくなる。

その時、門垣根の外から、妙たえな尺八の音が静かに訪れてきた。

尺八の呂り々よりよはいつまでも門かどを立ち去らない。

源内は、耳うるさくなつたように、薬研の手も止めずに、

「お通とおなさい」と断つた。

在方ざいかたを徘徊はいかいする悪い虚無僧の中には、断れば断るほど下手へたな尺八を吹き立てて、揚あ句げくの果てには強請ゆすりだすような者もあるが、今のは源内の一言ひとことでピツタリ止んだ。

いい按配あんばい、蜂須賀家の探りでもないらしい、行ってしまったな——と思つてみると、

また同じ所から、

「少しものを訊ねたいが」という声がする。

源内は、うんざりした顔で、

「なんですか」

「こちらに住まわれているのは、もしや平賀殿と申されはすまいか。間違ったらご容赦にあずかりたい」

「いかにも、源内ともうす医家でござるが……？」

「おう、やっと尋ね当てましたな」と虚無僧の者、木戸がある訳でもないので、垣の門から、ズツとそこへ入ってきた。

「どなた？ ……」医家の尊厳を保つために、机の前へ帰って、片肘を乗せ、「ご病気でござるか、診て進ぜよう、さあお上がりなされ」とどぼけている。

「いや、薬餌を求めに伺った者ではございませぬ。拙者は法月弦之丞と申す者——」

「待たつしやい。言葉も江戸のようであるし……法月とは聞いたような」

「麴町に住居いたす法月一学の粹。江戸ではかねて御高名を承っておりますが、お目にかかるのは初めてにござります」

「ほほう……麴町の法月一学殿といえは、大番頭おおばんがしらをお勤めになる七千石の旗本、その御子息であらつしやるか。ふうむ……」と少し意外な顔をしたが、「そして私に何の御用がありますかな。だいぶ尋ね廻つたようなお言葉であつたが」

「実は」

いいかけると、源内、

「まず……」と蒲団を縁先へ出して、「お掛け下さい」

「いただきます。宗法しゅうほうでござれば……」

天蓋えしやくの会えしやく積たをして、ゆつたりと腰を下ろし、根瘤ねこぶの煙草盆たばこに一服つけて、のどかに紫煙むらさきをくゆらしながら、徐々じょじょと訊ねだした話たずはこうである。

禪定寺ぜんじょうじ峠とうげから、万吉まんきちを江戸に立たせ、自分だけ大阪へ戻つてきた弦之丞げんのすけ。訊ねれば、すぐにも会えると思つていた住吉村へ行つてみて、思わぬ失望をした。

ぬきや屋敷は、住む人もなく荒廃こうはいして、そこには、以前のようなやからも住んでいなければ、常木鴻とこぎ山こうざんも源内もすでにいなくなつた。

浜の者に聞きあわせると、なんでも四、五日ほど前の夜に、手が入つて上げられたという話。これは理に合わないので、なおも詮索せんさくしてみた揚句、どうも蜂須賀家の者に意図

を知られて、姿をくられましたらしく思われた。

つい、一月ひとつき余りの日が空しく過ぎて、いつか秋風が立ちそめた。

そういつまでも、鴻山こうざんの所在を探しているゆとりもない身——弦之丞は阿州屋敷あしゅうやしきへそれとなく目をつけ初めた。ところで、今日も安治川尻から何気なく波除山なみよけやまの裾すそへ来たところで、偶然、源内の住居すまいを覗のぞいた訳であった。

かいつまんだ話を聞いて、

「そうですか、それはもう住吉村には誰もおりますまいよ」といつてから、「では、いまだに鴻山殿の居所は分りませんか」

それを訊ねに来た弦之丞へ向って、源内の方から訊ねている。

「皆かいもく目聞き及ぶところがございませぬ。拙者は、源内殿こそご承知ではないかと存じて、お見かけ申したのを倅さいわいに、こうお邪魔申した訳でござるが」

「いかさま、一緒にいた私がそれを知らねばならぬ筈だ。ですがな弦之丞様、何しろワツと来られたのが真夜中で、鴻山殿が浜から小舟に飛び乗ったのは見ましたが、それから先はお互いにちりぢりばらばら……もつとも、この源内はあなた方のもくろみに、何かの関かりわもないのでして……」

変なところで断りを付け加えた。するとその時、

「ご免下さいまし……」

優しい声の訪れがする。見ると、萩はぎの乱るる垣根越しに白い横顔——下婢かひを連れてたらずんだのが、細かい葉の間から艶なまめかしい姿をチラつかせている。

「お入り」

源内が机の側から細い顎あごを見せると、下婢かひを外へ残して、つつましやかに入ってきた若い女は、病家びょうかの者であろう、

「あの、先生、おさしつかえはございませんの？ ……」と、弦之丞の後ろでちよつと立ち淀よじむ。

「なアに、かまいませんよ。別に気のおけるお客人ではない。先にちよつと診みて上げよう……どうだな、寝汗の工合は？ 相変らず寝られない？ それやいかん、グウグウ寝て、おいしいものをウンと食べて、心を明るく持つのが一番。お化粧つくりもせいぜいきれいになさるがいい、遊山ゆざんもいい、芝居も結構。こんな割のいい病気はない……だが一ついけない、男はな。いくら暇があつても、色恋だけは禁制でござるよ」

「あれ、あんな……」

「ははは、それは冗談、まずこちらへお寄んなさい」

ここで病家をとっているのは、長崎帰りのホンの旅りよちゆう中の内職だが、源内、医業にか
けてもなかなかちよくで、殊に女には当りがよい。

まるで子供をあやすほどに優しい。人形のように前へ坐らせた。

弦之丞は少し退さがつて、その診察の手際てぎわを眺めていたが、女の後ろ形が、極めて痩せてい
ることから眼をみはつて、帯つきや肩の線や、※した襟えりの生えは際に、おや？ ……という
面持おももち。

「ありがとうございます」と、源内の前を離れた時に、女もチラと弦之丞の天蓋を正面か
ら覗のぞいて、

「まア、あなたは！」

びつくりしたような声である。

「や、お米殿よねであったか。最前から、どうも見たようななど思いだされておりました」

「私はまたちつとも存じませんで——」お米の頬には白粉おしろいの下から桃色の血がボツとし
てきた。蟬人形せうにんぎょうの冷たい顔に灯あかりが映はえたようである。

「こんな所でお目にかかろうとは不思議なご縁でございます……私はまさかあなた様とは思いませんでしたの」言葉の辻褄つじつまを失っているのは、お米の胸に、川長で初めて会った時のことや、関の山で死のうとまでした思い出が、いつぺんにこぐらかつていたのである。

川長のお米にそれほど思われているとは、夢にも知らなければ、また素そぶりにも気づかない弦之丞は、心もち天蓋てんがいの頭ずを下げて慇懃いんきんに、

「ここでお目にかかったのを倅さいわいに、何よりはこの夏の頃お世話になったお礼を申し上げねばならぬ。殊に大津の半齋殿には、きついご迷惑をかけまして、蔭ながらお気の毒に存じている」

「いいえ、そのご挨拶は、万吉というお人が、あれから後江戸へ行く途中に寄って下さいまして、いろいろお話も伺いました。その時の様子では、弦之丞様がまた大阪へお戻りになったとやら……実は心の中だけで、もう一度ぐらいは、キットどこかで会いはしまいかと思っておりましたら。まあほんとにこうして……」

細々ほそほそとした指と指を綾に組んで、前髪の蔭からじつと熱ッぽい流し晒めを向けた。もつと人目のない所で、しみじみと話したいようなふうも溢れている。

「ではお米殿にも、あれから後に、間もなく大津より戻られたと見えますの」

「はい、叔父に厳しく叱られました。気が進みませんけれど、こちらの先生へも通い始めました。私、ほんとにわがままなのでごさいますよ」

「ご病気であれば是非がない、近頃はどうぞござります、少しはおよろしいか？」

「ええ……」と眸ひとみを納めて、お米の顔は急に暗くなった。心に悲哀やひるみが湧きでる時には、争われぬ病のかけが目くぼに漂ただよいだしてくる。

「病さえなければ——」とお米は血に渦を巻かせて考える。

「私は必ずこの人を自分のものにしてみせるのだけだ！」

ほんとにそれだけの熱がある。男というものの体験がある。病さえなければ、お米の性格はもツと強く恋にぶつかって行くだろう。それを、己おのれも知る癆ろう咳がいといういまわしい病が邪魔をする時、お米は、その悪魔を飼っている自分の血と呪のろわれた身を亡ぼしてやりたくなる。

床の間の薬くすり笥ばこに向って、真しん鑰ちゆうの匙さじをにゆう鉢に鳴らしていた源内は、様子を振りかえって、

「ははあ……」と、お米の容体を診みてしまった。

源内の手前、永居もできず、お米は調薬ちようやくを渡されると、是非なく帰り支度をして、弦之丞に心を残しながらそこを出ていった。

「若い身なのに、癆咳ろうがいであるそうな。不憫ふびんな者でございますのう」

その後で、弦之丞と源内の話。

「あまりきれい過ぎますよ、あの縹織きりようがな」

「ご丹精たんせいで、癒なおるお見込がござろうか」

「イヤ、癒なおりませんな。叔父御おじごにせがまれて薬は上げているものの、不治の病、ことにあの年頃——男恋しい盛りですから。蛇精じゃせい亀血きけつを啜すすりましても、それ、一方の煩惱ぼんのうを煽あおるにすぎません。まことに可哀あはれそうなもので」

とまた、門口で弦之丞の名を呼ぶ者がある。

出てみると、お米の召し連れていた女中のお藤、弦之丞の手へ蝶結びにした裸はだか文かぶみを渡すと、返辞も待たずに小走りに戻つてしまう。

何気なく解といてみると、そこらの茶店で、筆や紙を借りての走り書であろう。文辞ぶんじもそそくさと、是非お話ししたいことがある、待つています、九条村の渡舟わたしの前まで来て下さ

い。とある。

弦之丞はいささか当惑とうわくの面おももち。

お米の方では、思いがけないよい機おりを、どうかして遁のがすまいと、九条安治川の渡舟小屋の側わきに立つて、秋陽に縈よれる川波をまぶしそうにしてたたずんでいた。

「そして弦之丞様は、キツト来るとおっしゃったかい？」

裸文を手渡して、そこへ帰ってきた女中のお藤に、こう念をおすと、お藤は自分の恋のように顔あかを赧あからめる。

「いいえ、そこまでは伺きつてまいりません。だって、奥で源内様が、聞いておいでになるのですもの」

「気がきかないねえ、お医者様にはかかわりのないことじゃないか」

「けれど、やきもきなさいますな、きつとおいでになりますよ。お嬢様きりようのようなご縹きりよう織ようよしに思われて、心を動かさないお人なら、よッぽどどうかしております」

「あら、よいほどにお世辞をお言い……」

袂たもとでフワリと打ぶつた時、楊かわ柳やなぎの黄色い枯葉がピラピラと舞まつて光る。

川口へ下くだつてゆく、高瀬舟や番所船、十反帆たんぼの影などが、ゆるゆると流れてゆく合間に、

向う岸の四貫島の森から白い鳥群が粉のように飛び立つのが見えた。

「もしやあなたは、川長の御寮人様ではございませんか」

渡舟待ちの前から、こう話しかけてきた中年増がある。身装は地味、世帯やつれの影もあるが、腰をかがめた時下げた髪に、珊瑚の五分珠が目につくほどない土佐だった。

「おや、お前は元、私の家の仲居をしていた、お吉じゃなかったかえ？」

「さようでございます、ずいぶん久しくお米様のお顔も見ませんでした、大そうご成人なさいましたこと」

「お前も、家にいた頃と違って、すっかり堅気のお内儀らしくなりましたね」

「いいえ、気苦勞ばかりしているので、装にも振にも構えなくなりました」

「そして今でも、家を出た時の人と、一緒に暮らしておいでなの？」

「はい、添い遂げているという名ばかりで……」

「それが一番倅せじやないか。私なんか、他人には羨まれるような身の上でも……」とツイ自身へ反れるのを口ごもつて「結構だよ、そういう苦勞はね。で、ご亭主さんは、何を稼業にしているのかい？」

お吉は、言いにくそうにうつむいて、

「いやな渡世とせいで、十手持ちなのでございますが、かんじんな東のお奉行所の御用はおツぼり放しで、この二月ふたつき程前に、プイと家を出ましたつきり、生きたものやら死んだものやら、何の便りもございません。それでこうして、四貫島の観音様へ、毎日お詣りまいしているのですが、お米様、ほんとに、人の女房となつてみると、いうにいえない苦勞があるものでございますよ」

「二月ふたつきも戻らないでは、さぞ心配なことだろうね」

「もうもう、どんなに思うた男でも、目明しの女房になど、決してなるものではございませぬ」

「いつも命がけの渡世だからね。そして、お前のご亭主は、何という人だったかしら？」

「万吉と申しまして、仲間なかま受けだけはよい人なのでございますが」

「あ、万吉？ その人ならツイこのあいだ、私が大津で逢つたばかり」

「えつ、お米様、じゃ万吉は、あの、無事でおりましたか……」お吉は、観世音かんぜおんの靈れいにでも会つたように胸をおどらせて問いつめた。

ピタ——と草履の音が止つた。四、五間先の砂利置場の蔭、そこから、じつとこつちをみつめたのは、この辺りに下屋敷のある蜂須賀家の森啓之助けいのすけ——例の素迅すばやい仲間ちゆうげんの

宅助たくすけを後ろにつれて。

いきにんぎょう
生人形

「出るよう」

船頭の声に急せかれて、渡舟わたしの棧橋かけはしへドタドタと人の跣音あしおとがなだれていった。

お米との立ち話で、良人おっとの万吉が天津の半齋はんさいの所へ立ち寄り、その足で江戸へ向つたと聞いたお吉は、わずかの消息にでも、ほつとした嬉しさを感じたが、渡舟の出るのに気き忙ぜわしく、

「じやお米様、いずれまたゆるりとお目にかかります」

いそいそと駈けだして、船の上からもう一度頭を下げた。

「お嬢様、こつちへ隠れておいでなさいませ」

「あれ、なぜだい、お藤」

「でも、これで渡舟をやり過ごすのが、幾度目だか分りませんもの。船頭や待ち合せていた者も、変に思つて、私たちを見ているじゃありませんか」

「そういえば弦之丞様げんのじょう、どうしたのだろうね」

「そろそろ日が暮れてまいりますのに、男という者は、水を向けるとこの通り、わざとじらすでございますよ」

「じらされるのならいいけれど、もしかして、私を嫌っているのではないかしら、病気のこともございだからね」

「いやですよ、またカーツとして、短気なことをなすっては」

「ああ、日が暮れる。お藤や……どうかしておくれなねえ……」

「だって、困ってしまうじゃありませんか。こうなると弦之丞様も憎らしい。では、私がもう一度、源内様の所へ戻って、いるか、いないか見てまいりますよ」

「じゃ、早くにね……」と、お米が振りかえると、女中のお藤は、もう小刻みこぎみの足になって、砂利場の側を駈けだしていた。

と一緒に、石置場の蔭から、急に仲間態ちゅうげんていの男が立って、ドーンとお藤にぶつかって行った。

「あぶない……」

こつちでお米が声を筒拔つつぬかせた。——ハツと思つて眼をみはるとお藤の体はグツタリし

て、仲間の脇の下に掻い込まれ、声も得立てずズルズルと川縁へ。

「あれッ！ お藤や、お藤や！」

夢中で走りだしたお米の眼の前にザブーンとすごい波音がして、雨のような水玉が、陸の上まで飛び散ってきた。

「助けて下さい——召使が突き落された！ あれ！ 流れて行きます。誰か来て——ッ」
必死に人を呼ぶその口へ、何者か、大きな掌を蓋してしまった。そして羽交締めはがいじに強く抱きすくめた。お米の指が離そうともがく、抱えた両手の力は強い。折も悪く、早や逢魔おうまが刻どきに近い九条堤つつみ、人通りも絶えている。

「騒いではならぬ。こりやお米殿、案じた者ではないによって、少しの間静かにしているがよい」

「オ！ その声は、ケ、啓之助様……」

「手を離して進ぜるが、逃げてはならぬぞ。逃げる影へは思わず刀が追いかけたがる」

「く、苦しい……」

「宅助、すまぬが、しばらくの間、向うの堤どてに立って、人通りを見張っていてくれ」

「切せつのうござんす……も、森様、逃げは致しませぬから、この、この乳の上の手を早く離

して下さいませ」

「そうだ、そなたの病気はここにあつたの。うっかり肺臓へ力を入れて、さだめし胸が苦しかったであろう。ゆるしてくれ。これというのも一念にそちを想う煩惱ぼんのう盲目もうもく、悪い心でしたのではない」

「エエ、何ほ何でも、罪もない女中を河へ突き落して、その上こんなご無態むたいは、あんまりでございます」

「そう怨むうらのはもつともだが、いよいよ阿波への帰国も近く、待てど暮らせどそなたからの返事はなし。ここで見かけたを倅さいわいに、是が非でもあの話を取り決めたいと思うたからじゃ」

「……とおっしゃるのは？」

「もうそなたの胸には考えがついている筈！」

「阿波へ連れて行くごと、いつぞやおっしゃったあのことでございますか」

「折もよし、四、五日のうちに太守の御帰国まんじ丸の船出！ どうにでも隠す工夫をしてそなたを連れてゆく所存。もう否いや応おうはあるまいのう……」

森啓之助が手離すとともに、お米の体は朽木倒れに、砂利場の山へうっ伏してしまつた。

「どうした？」

寄つてみると、ひどく息が切ないらしい。肺臓の喘ぎに背中は大きく波打っている。しかし一度は真ツ蒼になった顔色が、その時急に、反動的な紅潮をさし、針で突けば血の吹きそうな耳朶をしてゐる。

「拙者が、阿波へ連れて行こうというのは、恋ばかりではない。そなたの苦しむ癆咳にも、あの潮の香や山の気が、どんな薬よりも利くであろう——、そう思うて勧めるのじゃ」

「……………」

「な、お米、今が心の決め所じゃ、よもやいやではあるまいの」

「……………森様……………」

「うむ、得心がまいったか」

「どうしても私には、阿波へ渡る気になれませぬ」

「あの鳴門の渦の海、越えぬ者は怖ろしがる。だが、恋もそれに同じこと、渡つてみれば苦もないのじゃ。ましてや千石積のお関船、渦に巻かるるおそれもなし、楽しい彼岸

は一夜のうちに迎えてくれる」

「そんな訳ではなく、どうしても」

「な、何ッ」ふるえを帯びた啓之助の声。

「いやだというのか！」お米の耳をつんざいた。

「……………」

「うーむ、ではとくからの量りょうけん見みであろう。なぜ、いやとあらば早くから、キツぱりといいきらぬッ！」

「お察しなされて下さいませ……………素気すげないことをいいきれぬ、弱い客商売かしょうばいの娘でございませ

「だまれッ。客商売じやと申すいいわけは、つまり、いろは茶屋ちやの売女ばいた同様に、この啓之助を手玉に取ったという意味かッ！ よしッ、拙者もお船手の森啓之助、腕にかけてもつれてゆく。オオ、キツと阿波へつれてまいるぞ」

「あ、ご無態むたいな……………」

「逃してなろうか。宅助、宅助ッ、手を貸せい！」

帛きぬを裂くような悲鳴が流れた。

風が出た——いつかドツプリと深い宵闇。

大川の三角洲、四貫島、うす寒い川風が、蕭々と芦を鳴らしてやまぬ。

鬢を吹かせて走りだしたのは森啓之助。その小脇に引つ抱えられたお米は、あわれ悶絶、猿轡の無残な姿が、もがく力をさえ失つて、ダラリと白い手を垂らしたまま……。

堤を下りて市岡新田、耕地の闇を四、五町走ると、道はふたたび大川の洲へ出て、そこに一艘の高瀬舟。

「旦那、わしの肩へお貸しなさい」

「ウム、さすがに疲れた……よいか、水へ落すなよ」

「生人形のようなもの、軽いもんでさ」

「よし、船は拙者が抑えている」

「おツと！」

お米を肩に引つ担いで、仲間間の宅助、ぽんと舟へ飛び移った。

続いて啓之助。

グンと棹を押すと、舟底をザラザラと折れ芦が撫でて、二つばかり舳が廻った。

藁わら箒ぼうきを取つて、櫓ろべへ湿しめりをくれた宅助、ツウと半町ほど流れにまかした所から、
向むかう河岸がしかすがで春日出すがでの、宏大やかたいな館いらかの藁わらをグツと睨にらんで、

「旦那、お長屋ながやの方なたじやありますまいね」

「違う！」

「じゃお船蔵ふなぐら？」

「水門へ着きける」

「目付ひかが控ひかえておりますぜ」

「まづいな」

「生きものですから、バレた日には困こまりますよ」

「うむ……お下屋敷げへはなお持ち込こめぬし……」

「女一人のために、家断絶いえだんぜつなんぞ、まじやくに合あいません」

「意地いぢだ、どこかへ着きける」

「と、しますと、六軒家けんやの森もりですね」

「お船蔵ふなぐらの外ぐわいにあたるではないか」

「白状はくじょうしますが、実は、仲間ちゆうげん部屋べや船番ふなばんの下したツ端はが、こっそり夜遊よあそびびに出いる抜ぬけ道みち

が一つあるんで」

「よしッ、そこへやれ」

「合点です！」意気込んだ宅助、三角洲を右に見て、腕ッ限りグングンと櫓を撓める。

この一伍一什を、源内の所から帰りがけに、ふと見かけてつけて来たのは、法月弦之丞であった。やや暫し、芦の洲に半身を没して、じっと行手を見定めていたが、何思ったか、俄かに芦を掻き分けて走りだした。

裸火

芦の深みに隠されて、苦をかぶつた一艘の輕舸がある。ザワザワと掻き分けてきた弦之丞、苦をはねのけてそれへ跳び移り、早くも砂を崩して川底から離れだした。

退き汐時か水脚の迅いこと、満々たる大河へのぞんで、舟は見る間に木の葉流し――

彼方の川面を水明りに透かしてみると、さきに陸を離れた啓之助の舟、櫓韻かすかに、今しも三角洲の先から舳を曲げて、春日出の岸へと真一文字に漕ぎ急いで行く。

「おお、案に違わず……だが女をかどわかして、どこから屋敷内へ運びこむつもり？ ……
 ……どうして阿波へつれ行くつもり？ うむ、ことによると阿州屋敷にも隠し道が」
 流れに任せた輕舸の中では、法月弦之丞の目と手足、その時怖ろしく迅速に働いてい
 た。

まず先に、顎の紐を解いて、かなぐり捨てた天蓋、ヒラ——と河へほうり投げた。
 鼠木綿の手甲脚絆も、一瞬の間に解きほぐし、斜めにかけて袈裟掛絡、胸に下げた
 三衣袋、すべて手早くはずしてしまふと、次には平紵の帯、白の宗服、そっくり
 そこへ脱ぎ捨てる。

と、思うと。

かねてから三衣袋に潜ませておいた黒奉書の拾一枚、風をはらませてフワリと身にま
 とい、目立たぬ色の膝行袴をりりしくうがち、船底の板子を二、三枚はねのけた。

取りだしたのは藁苞である、グイとしごいて、苞からむきだされたのは、蠟色鞆の
 滑らかな大小。

蜂須賀家の下屋敷を探る上に、これらのことは、疾くから用意のあったこと。かくて、
 軽快な武士姿と変った弦之丞は、櫓仕立をしてグングンと先の船を慕い始めた。

一方は、森啓之助もりけいのすけ。そんな者がつけてくるとは夢にも知らない。

舟は矢の如く安治川を横切つて春日出岸、蜂須賀家のお船蔵ふなぐらや下屋敷の下をさかのぼり、六軒家の真つ暗な藪岸やぶぎしへ着いた。

「さ、旦那、女を下から抱き上げて下さい」

仲間ちゆうげんの宅助は、先へ這い上がつて両手を伸ばした。闇にも艶えんな姿がズルズルと引きずり上げられる。

川長のお米よねは、猿轡さるぐつわをかけられて藪やぶの中に横伏せとなつたまま、もがき疲れたか、脛はぎも露あちわにグツタリとしていた。

もしかして、こときれては玉たまなしだぞ、と啓之助、そつと猿轡へ手をやってみたが、大丈夫、温ぬるい涙が指先へ触れた。

「宅助、そちのいつた抜け道とはどこか」

「向うに見える森を抜けると、お屋敷堺ざかいの高堀たかべいがあります。そのどん詰りづまの藪やぶ置だたみで」

「さつきも申し上げた通り、仲間ちゆうげん部屋の者が夜遊びに出るだけで、めつたにお見廻りが来る所じやありません」

「そうか」

「ところで女は、どこへ押し込んでおくおつもりですかい」

「お船蔵の綱部屋はどうじゃ。あの部屋の鍵は拙者が預り役だによって、余人に開けられるおそれもない」

「なるほど、そいつあいい所へお気がつきました。綱部屋へほうり込んでおけば、いざお閉船が出るつていう場合にも、ほかの荷物に紛らわして、卍丸の船底へ積んでしまうのは、何の造作もございません」

「なにしろ、ここ三、四日がかんじんだ。無事に阿波へ着いた上は、幾らでも褒美をつかわすから、ずいぶん骨を折ってくれ」

「ようがすとも！」宅助は再びお米を肩にかけてドンドン走り出した。如法闇夜の鼻の森は、たちまち、その登音と三人の影を吸ってしまった。

と——安治川の中ほどには、弦之丞の輕舸が、ギツギツとこつちへ向っている。

さかのぼるので舟脚が遅い、面を掠める飛沫の霧！息づまりそうな川風に鬢髪が立つ。

「おお、六軒家の藪岸へつけたな！」弦之丞は、さらに必死と漕ぎだしたが、岸が近づく

に従つて、思わず櫓音を偷ませた。

蜂須賀家の船蔵が、すぐ目の前に横たわっているからだ。百本杭の柵が見え、掘割が見え水門が見える。乱松の間から高く聳えているのは汐見櫓、番所の灯がチラチラと水に赤い影を繕らせ、不寝の番が見張っている。

そこから続いて川下へ数丁、堀囲いの別廓をなして、宏壮な棟を望ませている所は、阿波守重喜が大阪表の別荘——いわゆる安治川のお下屋敷。ここ須臾の間に、法月弦之丞が、探りの眼をつけ初めた目標の建物である。

六軒家の梟林に、荒れはてた誓文神の祠がある。この辺一帯、梟や渡り鳥の巢をかけるのが多く、冬になると綿屑のようなものがどの梢にも絡まって見えるそうなの。

今は秋。林の中は芒明りといいたいくらい、ボウと白光の花叢がほのかである。川から上がった弦之丞、草を分けて奥へ奥へと入ってゆく。そこで、誓文神の狐格子をふり仰いで、はてな！ と少し立ち迷った。

「たしかにこの辺へ来た筈だが？」

森啓之助らの姿を、ここまでつけてきたところで、皆目見当がつかなくなってしまう。

と——狐格子の前に、何やら光る物が落ちてゐるのに眼を止めた。

拾つてみると、滑かな瑠璃の笄。お米のものと判定するよりほかはない。

「あ！ ことによると」と誓文神の狐格子をポンと押して覗きこんだ。

はたして、その中は抜け道の口であった。

祠の内は床板もなく洞然として、六尺ばかり掘り下げてある。そこを下りて、しばらく横へ歩いて行くと、案のごとく、仲間部屋の者が博奕や夜遊びに出入りする隠し道、弦之丞は、まんまと蜂須賀家の囲い内へ出た。

「しめた！」と胸がおどる。

物かげに潜んで、一応辺りを眺め廻すと、船手組のお長屋や役宅の棟が鉤の手なりに建てならび、阿波守の住む下屋敷の方へも、ここからは何の障壁もなく、庭つづきで行かれそうだ。

「いよいよ重喜の身边に近づいて見ることができた。これも銀五郎の導きであろう」

弦之丞は、四圍鉄壁のこの屋敷内へ、あまりやすやすと入れたことを奇蹟に思った。

この隠し道を知つたとたんに、かれの心は、片恋のお米を不憚と思うことすら忘れていた。燃えているのは功名心、探秘心、それはお千絵様のためである。

広い屋敷の中はシンと寝静まっていた。弦之丞は、物の影から影へ移って、下屋敷へ近づこうとしたが、道に迷ったものか、思わぬ所へ出て、思わぬ物の影を見上げた。

それは、安治川から水を引いて水門のうちへ諸船を繋いでおくお船蔵——。荷船、脇船、色塗の伊達小早などが七、八艘みえる中に、群をぬいて大きな一艘のお関船は阿波の用船千石積の卅丸。

寛永このかた、五百石以上の船は、幕府の禁令なので、表積みは半分に称しているが、長さ十八間、幅七間、二十四反帆、二十四挺櫓、朱の欄干を立てめぐらし、金ちりばめの金具や屋形の結構さ、二十五万石の太守のお座船だけあって、壮麗目を奪うばかりである。

「さすがに裕福な阿波の楼船だけあって、將軍家の安宅丸にも劣らぬものだ」と、弦之丞も思わず物蔭からしばらく見とれていたものだった。

そして、何かの物音に、ひよいと後ろをふりかえると一軒の綱倉がある様子。

金網を張った白壁の切窓に、かすかな灯影がゆらめいていたので、何心なく覗いてみると、さっきの二人が、ここへ入り込んでいた。

「やいッ」という声は仲間の宅助。

蠟燭ろうそくの裸火はだかびを前に置いて、

「これほど俺や啓之助様が、ことを分けての親切なのに、いい加減駄々をこねやがれ。旦那はとにかく、この宅助が承知しねえぞ」

優しい言葉に乗らないので、今度は脅おどしにかかっているらしい。

すすり泣きの声をする……。お米の姿が裸火にてらされていた。蛇のようにとぐろをまいている船綱ふなづなのなかに身を埋めて、

「嫌です、嫌です！ 阿波へなんか……」

「ちえツ」と、宅助は舌を鳴らして、「旦那、とてもこいつア諦あきらめものだ。旦那丸まんじが出るまでに、お目付へ知られては一大事、いつそのこと今のうちにバツサリ斬やつて、煩惱ぼんのうの根を断たつておしまいなすつたほうがよすがすぜ」

ただし、脅かしに——と目まぜに知らせていうと、森啓之助も心得ている。大刀の鞘さやを払つて、お米の頬へ切きツ尖さきを突きつけた。

「あ、不愠ふびんな……」と外にいた弦之丞、助けてやる工夫くふうはないかと、綱倉の戸へ抜ぬき足あしさしてゆくとまた、それに添そってよれてゆく一つの影。

不寝ねの番の武士であろう。ジ——と隙をうかがって、

「うぬ！ 曲者くせものッ」

気殺きごつの声と早技はやわざ。

弦之丞の脾腹ひばらを狙つて、りゆうツと突きだした手槍のケラ首！ 対手あいてをはずしたか、ぶすツと白壁へ刺し込んだなと思うと、法月弦之丞の姿は、時すでにそこにあらず、どう切られたものか藩士の侍さむらい、槍をつかんだまま肩かた口くち柘榴ざくろなりに割れている……。

血祭り

パチツ……と一石せき。いい音だ。

櫃かやの碁盤なちぐろへ那智黒の石。

ここでしばらく間まがあるう、というふうには、竹屋たけやさんみきようありむら、扇子せんすをとって肘ひじをのせ、

「まず、ごゆるり……」と、余裕しやくしやくの緯つち々つちさをみせたものである。

局きよくに対している人は阿波守重喜しげよし。

「なんの」

といったが、指に挟んでいる朝鮮貝の白一石、盤面の宙をさまようことやや久しく……。
 パチリ！ やがての音である。

「いよいよ本丸火の手と見えました」

「猪口才」

白、電瞬に打ってゆく。

「ごうまいる」

「はて、きたなき敵でありつるわよ」

「孫子九變の伏手と申し、すなわち兵法の一手でござる」

「あな笑止、苦しい言い訳」

パチリ、パチリ、たちまち戦雲漠々としてきた。

碁盤碁石は立派だが、阿波守も有村卿も、やはり衆にもれぬザル組でおわすらしい。

しかし、負けぬ気の殿と、慷慨家で壮年の公卿様との対局は、技を別にして興のある碁敵だ。

ここは下屋敷の一部、名づけて隣帆亭という茶席。

初更ながら深沈とした奥庭、秋草や叢竹が、程よく配られた数寄屋の二亭に、古風

な短たん繫けいに灯をともししてパチリ、パチリ、と鬪とう石せきの音……そして、あたりは雨かとばかり啼なきすだく虫。

その虫の音がフトやむと、

「殿……」

庭先の踏石へ、一人の家臣がうずくまった。

「何じゃ？」

阿波守は盤面から目も放たない。

「明日あすお出船に相成ります、卍丸まんじのことについて、ちと御意ぎよいを得たいと存じまして」

「何じやと申すに」

「船中お屋形の御調度の物」

「ウム」パチリ！ と打って、「ウム……」後の手を考えている。

「例年の通りにてよろしゅうござりませうか」

「啓けい之助のすけに任せておけ、森に」

「は、京都よりのお荷物は、あれだけで余よの物はござりませぬか」

「ない」

「それから、汐の都合で、まんじ卍丸は明日のあかつき暁にともづな纜綱を解きます。これは森様よりのお言葉、殿にも何かのお支度、今宵のうちに願わしゅう存じます」

「ウム……。分っている」

家来の者が、礼をして立ち去りかけると、

「あ、待て！」と呼んで、阿波守初めてたんけい短檠の光を顔にうけてこちらを向いた。

「京都よりおしのびの方達はまだ見えぬか」

「は、まだ御着邸なさりませぬ」

「申しつけてはあるが、見えられたらすぐここへ」

「心得ております」

しばらくするとまた虫の音とごいし碁石の音。

竹屋さんみきよう三位卿は、年まだ十八の頃、かの宝曆ほうれきへん変の陰謀にくみして、徳川討つべしをね熱つきよう叫つぎようしたため、真ツ先に幕府からくげ睨まれた公卿である。けれど時のももぞのてい桃園帝からは、いたくたの頼わほもしく思おぼされていた一人である。

他の十七卿の堂どうじよう上うが、問もんざい罪ざい謹きん慎しんをうけるはめとなるや、有ありむら村むらは忽こつぜん然ぜんと姿を隠した。

自殺したという説——その頃、もっぱらであった。

「幕府などの手に、自由を縛られて堪るものか」

という気概の有村、自殺などをする筈がない。コッソリ蜂須賀家の奥に隠れ、長々と寝たり起きたりして垂加流すいかりゆうの神学書、孫子呉起そんしごきの兵書などを耽読たんどくしていた。

重喜しげよしとよく議論もやる。

兵学、弓術、馬術、邸内きやうでできることなら何にでも対手あいてになる。居候のくせにして三さん位卿有村、妥協が嫌いだから時々口舌火こうぜつを発し、ひいては、ただちに、幕府討つべし

！ ということになる。これには阿波守もてこずるらしい。

一兵一矢しの蓄えもなく、居候をしている素寒貧すかんびんの若公卿わかかくげには、どんな過激な議論も吐けようけれど、重喜には、譜代ふだいの臣、阿波二十五万石の足枷あしかせがある。そう、滅多に動けたものではない。

たとえ、尊王の赤心、反徳川の意気、胸に炎々たるものがあっても、下手なことをしたひには、藩祖はんそ正勝まさかつ以来の渭之津いのつの城の白壁に、矢玉やだま煙硝えんしやう玉たまの穴があくはめとなる。

「殿！ おしのびのご来客、ただ今お着きになりました」

さっきの家臣が報しらせてきた。

庭伝いに、数寄屋へ通つた客なる人、京浪人と称しているが、まことは七条左馬頭、梅溪右少将、交野左京大夫の三卿で、歴々たる公卿たちである。一様にしのびの目立たぬ身装、茶室であるから仰山な会釈はなく、短檠の灯もほの揺らがぬ程、もの静かに席へつく。

「お待ちうけ申しておツた」

盤面の石をサラサラと掃いて阿波守が座に直ると尾について、

「ずいぶん遅いお見えでありました」と、居候の竹屋三位卿主人顔して不平をいう。

「例の京町奉行の目が、うるさく見張っておりますために……」右少将がおとなしく言い訳する。

七条左馬頭、改まつて、

「阿波侯におかれては、いよいよ明日、卍丸でお国表へお引揚げなさる由、何やら盟主を失うような寂寥を覚えまする」

「されば、そのほうが、策を得たものではないかと存じまして」

「無論、異議なくよろしゅうござりましょう」と、賛同したのは交野卿。語を次いで

「宝曆の大変より、早八年の星霜を経ておりますゆえ、幕府そのものには、近頃油断のふうも見えてまいりましたが、かえつて、天満組の一部の者や、また江戸方の隠密中に、執念く目をつけている輩がありますとやら」

「あるどころか、彼らの暗中飛躍こそ怖るべきで——」と竹屋三位が、這個の消息通をもつて任じながら、

「第一に、吾々たちに御当家という後ろ楯のあることを観破した者は、江戸方の隠密甲賀世阿弥。これは、御本国 山の山牢に、終身押しこめてありますゆえまず安心。ところがここにまた、天満浪人の常木 鴻山、俵一八郎などと申す者あつて、江戸の隠密どもと結託なし、御当家の内秘を探りにかかつております」

「すりや大事、また宝曆の轍をふむことにならうも知れぬ……」右少将は色をかえた。「しかし、御安心なさるがよろしい」

竹屋三位卿、わが手功のように、

「鴻山は住吉村から追つ払い、また一八郎はすみやかに召し捕りました。やがてこれも剣山へ送つて、世阿弥同様、終身間者牢の住人となりますわけで……」

「やれ、それは何よりな」

「水も洩らしは致しませぬ。御明敏な重喜公、それに、不肖三位有村が帷幕にあつていただきますこと」

「ははははは……」と、それまで黙っていた阿波守は、いじげずにして潤達で、若々しい居候の言葉が気に入つたらしく哄笑した。そしてすぐに真顔になり、

「余事はおいて三卿の方々、かねて、諸方へつかわしました密使の模様は？」

「即答、または評議中、御返事まちまちではありませんが、今日まで内諾あつた諸国諸侯の御連名……」と年長の交野左京太夫、ふところを探つて細長い包みを解き、帛紗を敷いてその上へ、スラリと一卷の連名状を繰り展げた。

「三位殿、御苦労ながら」

阿波守が目くばせすると、

「は」立つてあたりに人なきやをたしかめ、縁の端に坐りなおして見張役となる。

世が世なら竹屋三位卿も、九重の歌会、王廟の政治に参じる身分、まさか、見張番まで勤めるのもあるまいが、朝廷の御衰微今より甚しきはなく、公卿の無視さるること幕府の小役人にも劣つてきた今の世である。是非がない時勢なのである。

「食客だからと思えば癪にさわるが、これも一天の君の御為と思えば……」

三位卿は、かこち顔な見張の端居はしじ。

「おお……」と乗りだして扇子せんすをつき、連名状へ眼を落した阿波守、三卿とともに息をのんで、ズーと血判をたどりながら、

「盟主、徳大寺公城公！」固唾かたずをのんで呟つぶやいた。

「堂上お味方二十七家け、事いよいよに迫りますれば、京方すべてを含みます」と左馬頭がそれに応じる。

「宇治おわに在す竹内式部先生！」

「軍師ぐんしと仰ぎますつもり」

「江戸表は山県大弐やまがただいに、まッ先に火を放つて、箱根の嶮けんに王軍を待つのか」

「しかと謀ちようじあわせてあります」

「して、大義に呼応の諸大名は？」

「筆頭！」交野卿かたの、扇子の要を文字について、

「蜂須賀阿波守重喜公。すなわち御当家」

「ウム！」

「肥前、久留米の有馬忠可公ありまただよし」

「オオ」

「大洲おおすの加藤家、柳川やながわの立花家」

「ウム」

「佐賀の鍋島なべしま、熊本の細川、濃州のうしゅう八幡やわたの金森家……」と言いかけた時、

「やツ、怪しい気配！」見張の三位卿が手を振った。

怪しい者！ と聞いて、三卿の面々、あわただしく連名状を巻き納めた。

阿波守もきつとなる。

短檠たんけいの灯がボツと燻いぶつて、一抹まつの不安が燭しよくをかすめ、なんとなくいやな空気がみちた。

「誰だツ——、何者じゃ！」

若気わかぎな三位卿は、もう庭手へ降りて木立の闇へどなっていた。

ザワツと奥の方で樹木が揺れた、つづいて人の足音がする——と思うと、不意に姿を見せた一人の武士、六尺棒を搔かい込んで、血眼になりながらバラバラと飛んできた。

「あツ、止まれ」

「はっ」

「控えろ！ 阿波守殿がおいでの場所じや」

屋敷の者らしいので、三位卿がズカズカ寄ってみると、六尺棒を持った男は、数寄屋のうちにいる歴々の姿をみて、びつくりしたように両手をついた。

「無礼なやつめ！」有村ありむらは叱りとばして、

「今宵は、この亭ちんの近くへ、何人なんびとたりとも近よるなど申しつけてあるのに」

「はっ、私は、その庭番の者にござります」

「いよいよ不埒ふつちではないか、警固すべき者自身が、お席を騒がしては何もならぬ」

「重々恐れ入りました」

「退れ退れ。御前へは身みが取りなしてくれる」

「しかし、なおもう一応、お庭内うちをあらためませねば、そのお役目が立ちませぬので」

「何故ゆゑ!!」

「先頃から、奥牢へ入れてあります俵たわら一八郎という天満浪人」

「ウム、大津より差し立てきた一八郎。それがどうした」

「いや、その浪人は牢舎中も、きわめて神妙しんみょうに致しておりますが、外よりして、しき

りに牢へ近づこうとする者がござります」

「奇怪なことを申す、すりやまつたくか」

「今も今とて、何気なく見廻りましたところ、吾々の眼を偷ぬすんで、怪しい影が奥牢の戸に近づき、何やら声をかけようとしておりますゆえ、思わず、待てッ！ と厳きびしく追いかけてましたが、たちまち影を見失い、ツイ御座所近くになるのも忘れて、この不始末をつかまつりました」

「役目の忠実、こりや咎とがめる筋はなからう」と、三位卿は数寄屋の縁から阿波守のほうへ向いて、

「お聞き及びの通り。どうやら、この邸内にも、一八郎へ気脈を通じる者がある様子でござりますぞ」

「心得ぬことじや。番士ばんし！」

「はッ」

「すすめ、もつと近く」

「は」六尺棒を置いて夜番の侍、おそろおそろ沓くつぬぎの前へきて、墓がまのようにつくばった。
「只今の申し条、偽いつわりはあるまいの」

「なんで！ 畏おそれ多うござります」

「では訊くが、しきりに俵一八郎の身に近づこうとする者は、一体、どのような風采、また面貌おもぎしなど、しかと見届けておいたかどうじゃ」

「手抜かりのお咎とがめある節は、申し開きもござりませぬが、前の夜さきも今夜も、チラと見た影を追い失いましたばかりで、その辺、残念ながら突き止めておりませぬ」

「そうか……」と阿波守の顔は暗い。三卿の人々も首をひねって聞いていた。

「しかし、ただ一つ瞭あきかなことがござります」

「フム、それは？」

「曲くせもの者はたしかに女であるということ——。これは夜目ながら見受けました」

「なにッ？」

阿波守は眸をキラリとさせて、

「その怪しい奴が女じゃとは、ますます不思議な沙汰さた、さては、女中どもの中に、一八郎と同腹どうふくのやつが住み込んでいるのではないか」

「にわかには申しきれませぬが、前後の様子から推しましても、やはり御邸内ごていにいる者の所し為よらしく考えまする」

「不覚な訳じゃ！」重喜は、それを自分に向っていった。緻密ちみつにかがっておいた秘密の目

を、何者かに乱されている不快がこみあげていた。

「では……」と、しばらく重苦しい考えに落ちていたが、何か一策を案じたらしく、気をかえて、

「番士！」

「はッ」

「森啓之助もりけいのすけを呼べ！ すぐに。そして別の広間へは、明々あかあかと燭の数をつらねて、この

下屋敷の女中どもを一人残らず居並べておけ！ 酒肴しゅこうの用意手早くいたせよ！ よいか

！ 明日あすは正丸まんじの船出ゆえに、別れの宴を酌くむのである」

晴々としていいつけた。

白々とした粉黛ふんたいの顔に、パツと桃色の灯をうけながら、十四、五人の侍女こしもとたち、皆

一つずつの燭台をささげ、闇を払って長廊下から百畳じようじき敷の菊の間へ流れこんだ。

まもなく阿波守重喜しげよし、茶亭さていからここへ席を移し、京浪人と称する三卿を初め、食客の竹屋三位卿さんみきようもついてくる。

明日は船出の別れの宴、ここに大名らしい大まかな歓楽の夜となつて――。

「方々、心ゆくまで酔いませうぞ」

まず、阿波守から盃を上げてこういう。

「長夜の宴！」右少将が即興に答えた。

「されば、名残の宴でもある。藩祖が阿波の国を賜うて以来、上府帰国の船中では、太守を初め水夫楫主、一滴の酒をねぶることもゆるさぬ家憲でござりますゆえ」

「得たり賢し、飲みませう！」常に無聊な食客の三位卿、こういう晩は大好きである。阿波守もそろそろ微醺をおびてきた。

「おお酔おうぞ、謡おうぞ」

「舞いませう！ 何なりと」

「よかろう。鼓を——」と、すぐに侍女の手から受けて、阿波守が緒を締めるのを、

「いけません」

と、三位卿が横から奪った。

「小鼓はかくなん申す有村、大倉流の鍛えを以て打ちます。舞人は殿、いざ——」

「では舞おうか！ 鳴門舞！」

「一だんと見ものでござろう、阿波守殿の鳴門舞——」と、七条卿、梅溪卿、交野

卿、みないい色になってやんやと興がる。

「侍女どもも見ておけや」

襖ふすまぎわ 際に居並んでいる奥仕おくづかえの女たち、ホホと笑えんで珍しい殿の舞振りに眼をあつめた。

「打てや三位卿、秘蔵の小鼓撫子なでしこを——」

「あつ」と有村かたちは容を正してポーン！ 打ったり、撫子！

津の名人大倉六蔵おおくらろくぞう、それには及びもないけれど、どうやら居候の芸達者。

ポン、ポン！ ……音冴ねさえをみすまして阿波守、白足袋たびの爪さき静かにすべに江り出る……。

「おおウ鳴門、大鳴門！」

舞えば三卿も声について、それに合せて謡うたいだした。

「大——鳴門！ 大鳴門！」

「濁世じよくせ無限の底に鳴るウ——大鳴門！ 大鳴門！」

「流せや濁世、侵わかせよ鳴門！」

「濁り世にごしの底に、鳴るわ鳴るわ」

「怒いかるわ怒るわ——鳴門の渦！」

「洗えや鳴門——」

「澆季ぎょうきの濁り世」

ポーン！ と三位卿、吾を忘れて、

「討てや徳川ツ」

はツと驚いて三卿が、謡うを止めた時である。長廊下をツツツと小走りに来た近侍きんじの者。殿様——と、両手をつく。

「なんじゃ！」

「お召めしになりました森啓之助殿」

「ウム、最前から待ちかねているのじゃ、なぜ早く姿を見せぬ？」

「まんじ卍丸御用意のため、川口の脇船へ何かの謀しめしあわせにおいでになり、只今、お船蔵ふなぐらに

はおいでがないそうでござります」

「なんじゃ今頃——、きやつ、近頃どうか致している」と、舌打ちしてつぶやいたが、

「是非がない。では天堂一角を呼べツ」

「はっ」

退ひこうとすると、阿波守、またあわただしく呼び止めて、

「待て待て、ここへ参るついでに、奥牢へ入れおいたたわら俵一八郎、庭先へ曳いてこいと申せ」
 近侍が立ち去るとともに阿波守、また朗々たるおんじょう音声で鳴門舞を舞い出した。だが、
 舞いながらその眼まなざし、襖ふすまぎわに居流れている女中たちの数をスツカリ読んでいた。
 と、庭先へ動いてくる人影がみえた。

「一角、まいったか!」

舞い納めて、阿波守がこういうと、

「はっ」天堂一角の答えがして、

「俵一八郎をここに召し連れしました」

「ウム、早かった」

強くうなずいて、さて、大きく、

「あらぬ疑惑ぎわくをもつて当家の内幕を覗のぞかんとする天満の瘦浪人、船出の別宴さかなによい肴さかなじや、
 重喜がみずから血祭りにしてくりよう! 女中おんなども、誰かある! 佩刀はかせを取れ」

と、居流れた侍女こしもとたちを、鋭い眼で見廻した。

「お佩刀はかせ」

すぐに小姓が差し出すのを、

「ウム」と左手へ引つ提げた重喜。「その燭台を廊下へ出して、女どもも余が血祭りを見物せい！」

自慢の銘刀、ほたる斬り信国の柄に手をかけてギラリと抜く。

「阿波殿、少し酔ってまいられたかな？」と三位有村は、腑に落ちない顔をして小鼓を片寄せたが、ほかの三卿は、血を見ることを珍しげに端近く褥を進めた。

女中たちは命じられたまま、燭台の幾つかを廊下へ出して花のごとく居流れたものの、一脈の殺気、殿の眉宇から流れて、なんとなく恐ろしい。

「こやつか、血祭りの生贄は！」

鳴門舞の謡声より、なお太やかな音声をして、阿波守重喜ハツタと庭面を睨みすえた。

そこには憔悴した佻同心、一角に縄尻をとられて控えている。

関の時雨堂から、ここへ囚われて来てより早百日、肩骨張って色青白く、めつきり瘦せ衰えてみえるが、意気は軒昂。

晃々たる菊の間の燭へ正面を切ツて、臆する色もなく重喜の面を見上げた。

見下ろす眸と一八郎の眸、カチツと絡み合つたまま、互いに睨みすえながら無言の争闘ややしばらく……。やがてのこと阿波守、

「その面構えでは、問うても容易に口を開くまいが」と、前置きしてほたる斬りの切ツ尖を、廊下の上から突き向けた。

「余が下屋敷へ、汝の手から住み込ませた同腹の女があろう。ここに居並んだ奥仕えの女の内にその廻し者が潜んでいる筈。有態に名を明かさば、命だけは助けてつかわそう」
耳うるさし、というふうに、一八郎は眼を閉じたが、その時、廊下に並んだ侍女の三人目に、十六、七かと見える丸顔の少女、首を垂れてブルブルと肩骨をふるわせた。

「面倒じゃ！ 瘦浪人を荒座へかせて水の用意ッ」阿波守が呼ばわると、「はっ」と庭先にいた天堂一角や番士たち、あわただしく働いて、瞬間に成敗すべき死の座を作る。

「御用意、整いました」

一角が庭下駄を揃えると共に、ほたる斬り信国を引つ提げた阿波守、ズカリとそれへ足を進ませるかと思うと――。

ふいと側の女中へ眼をつけた。

十六、七の愛くるしい小間使、ハツとして手を袖の裏へ隠したが、帯の前から懐劍の袋の紐ひも！ タラリと解けて下がっている。

「天満浪人の廻し者ッ！」

咄嗟とつさにうしろへ寄るや否、阿波守重喜の片足が、ポンと女の帯を蹴った。

「あッ！ ……」と優しく魂切たまぎった声——と一緒に、蹴落された少女の姿は落花微塵みじん、隠し持っていた懐劍をほうり投げて、一八郎の側へ仆れるとともにワツと泣き崩れた。

声を揃えて朋輩ほうばいの女たち、

「オッ、お鈴殿！」と意外に衝たれて眼をみはる。

鳩の密使を飛ばして、常に佞同心の手へ、屋敷の内事を洩らしていたのはこのお鈴。

「泣くな！ うろたえ者めがッ」

一八郎は激越げきえつな声で叱りつけた。そして思わず側へ仆れた妹を、抱き寄せようとしたけれど、両手の自由はきかないのである。

「ああ、すべてこうなる世であるのだ、泣くな、妹よ！ よいか、兄の側で死ぬるを嬉しいと思うがよいぞ」苦しい声を唇で噛みしめた。

ところへ、一人の近侍が、森啓之助の来たことを告げた。阿波守は、一八郎を血祭りに

すると称して、思う壺に女中の中から諜者を見出した満足になつこととして、

「啓之助、啓之助」

呼び立てながら信国の太刀を鞘に納める。

「はっ」と一角の側へ、頭を下げたのは森啓之助。「明日の御用意のため駈け廻っており
ましたゆえ、ツイお召しも知らず遅うなりました」

こう言い訳したが、実は、密かに公務の暇を偷み、お米を隠してある綱倉に潜り込んで、
何をしていたか分らない。

「明日、正丸の脇船へは誰が乗るの？」

「石田十太郎殿の組手が乗ります」

「そちが代れ、都合がある」

「はッ」

「そして脇船の荷底へ、この一八郎とお鈴の二人、積み込んでまいるのじゃ」

「心得てござります」

「撫養の浦へ着船の節は、渭之津城へ寄るには及ばず、すぐ吉野川をさかのぼって、
山の間者牢へ二人の奴を送りこむよう。この大役、しかと申しつけたぞ」

剣

欣よろこんだのは啓之助、お米を阿波へ連れこむには、本船ほんぶね正丸より脇備わきぞなえで行く番船の方が何かにつけて好都合。得えたりや応おう、という色は隠して、俵一八郎とお鈴を番士に引つ立てさせお船蔵へ急いで行つた。

お船歌ふなうた

お鈴と一八郎の兄きょうだい妹いを、啓之助の手へ渡して、阿波守が席へ戻ると、三位卿は物足らぬ顔だつた。

「常にご自慢のほたる斬ざり信国、とうとう血祭りの御用に成りませんでしたな」

「もとよりあれは重喜の手策てだて……」

ほほ笑えんで盃を取り上げたが、ふと苦い味を覚えて下へおく。

「御炯けいがん眼のほど恐れいつた。しかし、あれまでにしてなぜ御成敗なさらぬのか、この左馬頭には少し腑ふに落ちかねまするが」

こんどは、七条卿の疑問が出た。

左京太夫や梅溪うめたにきよう卿も同感らしく、

「密事を嗅ぎつけている輩、劍山に封じおくのも無事であろうが、いッそ、断刀の錆と致したほうが、安心でもあり、お手数もないことと考えますが……」

「その儀、重喜も承知しておりますが、当蜂須賀家の掟として、捕えた隠密は、昔から必ず劍山へ差し立てることになっている」

「ほう、それはまたいつ頃から？」

「今より百二十余年前、蜂須賀三代の国主は義伝公、当時南には天草の乱が起つておりました」

「フム、義伝公。蜂須賀至鎮とおおせられて、非常に英俊豪邁なお方、巷間の伝えによれば、眼点の瞳が二ツあつたとか承る」

「さよう、とにかく、群臣も懼伏する威風がござつた。その頃江戸に將軍たる者は三代家光、この義伝公を怖るること一方ではありませんでした」

「なるほど、大いに頷けます」

「折も折とて天草の乱には、戦に破れた落人どもが、阿波こそ頼るべしとあつて、海伝いにおびただしく紛れこみ、また義伝公は、左右なくそれを劍山に匿われた」

「では当時にも、天草乱後の虚をうかがつて、徳川討伐の壮図があつたのでござろう」

「いや、その辺は分りかねる。しかし、今日なお渭山いざんの城たぐわに蓄えある、武器、船具、楯たて、強薬ごうやく、鏃やじり、金銀の軍用は、みな当時、天草より持ち込んだ物や、義伝公の御用意であったことはたしかでござる」

「ウーム……それが百二十年後の今日になって、皇室の御おんため為ために、役立ってまいるとは不思議な訳」

「少し話がそれましたが、さてその義伝公、泰平の豪傑はとかく不遇で、遂に毒殺されました」

「ア、誰に？」

「家光の廻し者」

「隠密でござるか」

「イヤ、義伝公の奥方であった。それは家光の姪めいで、幕府より義伝を毒殺せいという旨むねをうけて、阿波へ嫁とついできた美女でござる」

「己おのれが殺そうとする者へ嫁いでくる花嫁の心。それは思いやられるが、徳川の陰険政治、よく現れておりますのう」

「記録によれば正月の末、城下千光寺の徳命とくめい観梅かんばいの日でござった。義伝公の梅見の酒

へ毒を盛りました。それは世にも恐ろしい鳩毒、さすがの豪傑も濠の石橋まで馬を返して斃れました。徳川家より嫁いできたその奥方、また毒を仰いで助任川に身を投じた。すわ、城内城下は申すに及ばず、阿波一国の騒動、鼎のわくがごとしでござる」

「徳川討てと叫びましたろう」

「無論、浦々軍船の仕立てをなし、城下は甲冑の騎馬武者で埋めたと、今も古老の話でござる。しかし、当時四囲の情勢では、まだ若い幕府の力、所詮、仆すことはできませぬ。恨みをのんだ家中ども、ここにすさまじく結束して、江戸より奥方に従ってきた腰元用人は申すに及ばず、到る所の徳川に縁ある者を隠密と見なし、日ごと夜ごと、これを助任川の河原にだして斬りました。ために、富田の浦は血に赤く、河原は鬼哭啾々として、無残というも愚かなこと、長く、渭之津の城に怪異妖聞やむことを知らず、という結果になりました」

「才殺戮の祟り！ それで」

「一種の迷信を生じたものか、四、五代目の太守の世より剣山の山牢制度ができたのでござる」

女中や小姓は遠ざけられて、その時、菊の間には阿波守そのほか四人の影だけ……。

白い襖ふすまという襖一面、伊藤いとう若冲じやくちゆうの描いた乱菊の墨色あぎやかに、秋の夜は冷々と冴さえ更ふけている。

と……、床わきの書院窓の外へ、スルスルと蜘蛛くも這もばいに寄よつてきて、ジツと、中の話を聞いていた者があつた。

頭かしらは切きり下げ、無紋むもんの黒着くろぎ、腰から二本の蠟色ろういろ鞆たもとがヌツとうしろへ立たつてゐる。

それはのりづきげんのじよう法月弦之丞ほつげんげんのじようであつた。

書院窓に耳をつけて、なおも、菊の間の話をジツと聞きいている……。

お米よねが、綱倉つなぐらへかどわかされてきた晩——。彼は、番士の手槍を引ひつぱずして一太刀に斬きつて捨すてて、もとの誓文せいもん神じんの抜ぬけ穴から姿を隠かくした。

そして四日目。

いよいよ明日あすは正丸まんじが出るという今宵。お船蔵の混雑にまぎれて、大胆にも、この下屋敷いぎの域いきまで足を踏ふみ入れてきた。

宵よのうち、隣帆亭りんぼんていの方で、阿波守初め四人の公卿くげが、密議をこらしていた様子も樹こ立だちの中ちゆうからうかがつていた。

しかし、そこでは、容易に近づけなかったが、やがて、広間の方へ席を移して、別宴になった隙を計り、彼は用部屋の床下から奥へ匍い進んで、ムツクリ、ここへ姿を現したのである。

足拵あしごしらえはわらじ膝行袴たつつけ、身軽にしたのはイザという場合の用意だ。

剣山の問者かんじやろう牢ろうの由来——天草あまくさ当時のいきさつ、また義伝公毒害のことから徳川家へ根強い怨恨をふくんでいる訳——。それらの話をきくにつけて、弦之丞うづちは心の裡で、

「ウーム、いよいよ阿波の密謀はたしかだ」と信じた。

さらにまた、それが一朝一夕せきの陰謀でなく、義伝公以来歴代の太守が、幕府に隙さえあらばと、常に鑢やじりを研いでいたことに違いない、とも思った。

およそ、一国の民心に彫りつけられた程の怨みは、必ずその子に伝え、その孫に語られ、報復の遂げられるまで、世々、代々忘れぬものだ。ましてや、一代の英君と仰いでいた義伝公を、徳川家の詭策きさくに害せられた阿波の怨みというものは、弓取の子孫は無論、半農半武家の原土はらしの胆きもにも銘じ、野に働く藍取り唄うたにも現れたろう。

してみると、阿波の反徳川思想は、今日や昨日きのうのことではなく、永い歴史と根深い宿怨のある所。

それかあらぬか、蜂須賀の子女は、当時すこぶる貧乏で幕府からは好まれぬ公卿堂上へ多く嫁いでいる。重喜のすぐ先代をみても、一女は花山院大納言の正室に、また鷹司家、醍醐大納言、中院、中将などとも浅からぬ姻戚の仲であつた。

そこへ宝暦の氣運が芽ざし、尊王皇学の風が起り、倒幕の風雲がわづかながら動いてきた。

公卿縉紳と密接な結びがあり、しかも如上の歴史をもつ蜂須賀家が、その裏面に策動するのは、あまり、当然すぎるほど当然なこと。

今——菊の間の話をきき、それやこれを思い合せて、法月弦之丞、思わず、慄然とせざるを得なかつた。

「ああ、幕府は遂に仆されるのかもしれない」
フイと、そんな氣持がした。

これほどあきらかな、危ない氣運が芽ざしつつあるのに、何という江戸城ののんきさだ。前將軍家の重の遊惰なこと。今の十代家治の悠々逸樂。

義伝毒害の宿怨を忘れぬ阿波や、塩を舐めて皇学を起さんとしつつある公卿とは、その意気なり境遇なりが、あまりに雲泥な相違である。

しかし、弦之丞一箇の立場はまた別だ。

幕府が危ないと感じたなら、未然に救うのが彼の立場だった。

あぶないのは江戸城のみか、恋人お千絵様の前途はなお暗い——。その禍いは、彼女の父世阿弥が、阿波に入つて帰らぬことが第一の原因だ。

おお！ 甲賀世阿弥といえば。

ことによると彼はまだ生きている。いや！ きつと生きているに違いない。

どこに？ それは劍山の間者牢だ。彼は囚われて十年の月日をおそらく間者牢の中に送っているだろう。

もはや、疑うべきもないことだ。今も、阿波守自身が、菊の間で話していただではないか。

「——で、囚えた隠密は必ず、劍山の山牢へ送つて、終身封じこめるのが掟でござる」と。

彼は、心の奥で叫んだ。

「今夜の忍びはムダでなかつた！」

そこで、書院窓の明りを避けて、ソロ……と四、五尺身を退いた。——と思うと長廊下、忍者ふせぎの仕掛張が、キキキキ……と鳴くかのように軋みだす。

はッとしたが弦之丞、甲賀組の者ではないから、浮体とか音伏とかいふ忍法を知らな

い。思わず片膝を立て、一足跳びに廊下から庭先へ飛ばうとした。

途端に、杉戸すぎとを蹴すつて駈け寄つた天堂一角。

「おのれッ！」とばかり、うしろから組むが早いか、腕を輪わ締じめに喉首のどくびを引つ掛けて、タタタタと大廊下を五、六間引き戻した。

うしろから咽のどを巻き込んだ一角の腕、荒木流のやわらで首くび門かんぬきという必殺の手である。

この際、声をだすのは自殺するのと同じわけになる。自力をしぼつてもがくのはなおあぶない。といって、連れ拍子つびょうしに五、六間も後あとへ持つてゆかれれば、グツタリとして顎あごの下が紫色になりおわるのは必然なこと。

不意であるから、弦之丞もハツとしたには相違ない。

まず呼吸に気力をあつめたるう。

無論、心得のある彼、声もださず力もこめず、一角の引き戻すまま大廊下を逆に歩いた

——いや、よろけた。

そのまに、左の肩を探つて、対手あいての拇指おやゆびをギュツと握る。いわゆる技わざの手懸り、一瞬の妙機である。

氣当の一喝！ 相手の耳をつんざいたかと思うと、エエイツ、襷を切つて払つたよう。身を沈めた弦之丞の肩越しに、天堂一角の体は斜めに飛んで、大廊下から庭先へと、見事もんどり打つていた。

——と思うと一閃の剣光、シユツと走つて弦之丞の毛を斬つたかと思われる。

一角とてさすがである。櫓落しに投げ飛ばされた咄嗟には、空間に腰の大刀を払つたのみか、トーンと猫がえりをして庭先へ立つていた。

「くせ者！」

と、この時初めて呼ばわつた。

同時に右手の大刀を、颯然と横に払つてきたので、彼はすばやく後ろへ身を開いた。その弾みに塗枰の襖障子一、二枚を煽つて菊の間の中へドツと仆れる。

と見れば、広間は暗澹たる暗闇。

いつのまにやら一点の燈灯もなく、阿波守を初め三卿の人々は、物音と同時にすばやく奥へ退座してしまつたらしい。

倒れた襖を踏みつけたので、弦之丞は菊の間の闇へよろけこんだ。その影こそ、不敵な曲者にまぎれもあらずと、胸を躍らしたのは衝立のかけに身を潜めていた竹屋三位。

いつのまにか切目長押きりめながしに掛けられてあつた小薙刀こなぎなたを引き抱えている。

壮気はさかんだが、世間見ずの有村は、この屋敷の懸かかり人ゆうどになつてから、いっばしの武芸者となつた氣でいる。だが轆轤かんか不遇とやらで、まだいっぺんも真劍の場合にのぞんだことがないのを常から嘆じていたところだ。

折から今の曲者という声！ よき獲物えもの、ごぎんなれと息まいたものであろう。日頃の鍛た錬れんを薙刀なぎなたの柄えにこめて、そこへよろけてきた弦之丞の影を見るや否や、月山流がつさんりゅうの型どおりにその腰車こしぐるまを手強く払つた。

だが人一人、そうたやすく斬れないこと無論である。

弦之丞の身は飛燕ひえんのごとくかわつていた。そして三位有村は薙刀なぎなたの坂刃さかばに風を切らせ、のめりこんだが、ウム！ と踏み止まつて左手の一本延ばしに切り返すと、一緒に薙刀なぎなたは、空を躍つて天井からはね落され、三位卿その人はと見れば、はるかなる床の間の花瓶かびんと共に仆れて、花と水を狼藉ろうぜきに浴びていた。

「ちツ！ ……残念」

起き上がった薙刀なぎなたを拾つた時、次の間の襖ふすまがサツと開いた。甲斐甲斐しく装立いでたつた近侍の者、三人、五人、七人、十人ずつ——得物を取つて続々と八方へ駈け散つてゆく。

「初太刀しよだちをつけたのはこの有村、余人よじんに功を奪われてなるものか」
腰の痛みを忘れて自分も一緒に走りだすと、

「三位殿、三位殿」

後ろで呼び止める声がある。

ふりかえってみると阿波守、微笑を含んで立っていた。

「どこへまいらるる？」

「どこへといつて、今の騒ぎ、殿にもご存じでおわそうが」

「知っております。それゆえ、すばやく次の間へ逃げ退のいたのじゃ」

「日頃の口ほどにもない殿じゃ！」三位卿は歯がゆそうに、

「この奥深い所まで、入り込んでまいった不敵なやつ、逃がしては一大事でござる。この有村が引から縛めてまいる所存」

「はははは」重喜は愉快そうに笑った。

「さようなことは家臣どもに任せてお置きなさるがよろしい。あなたの月山流がつさんりゆうではちとむずかしい曲くせもの者、手配は天堂一角が常から残りなく固めているゆえ、おおかた、今にどこからかここへ捕えてまいるであろう」

築山つぎやまの辺からお船蔵境ふなぐらざかいの木立——または大殿の屋根から床下に至るまで、弦之丞ついでを尋ねる武士が、今や、右往左往に入り乱れて見える。

下屋敷の騒音を後にして、弦之丞は今、脱兎だつとのごとく船蔵の方へ走ってきた。

ほつと、息をついて、あたりの闇を透かしてみると、ここはいつかの晩、綱倉の窓からお米よめの啜り泣く声をきいた記憶のある掘割岸。

翌日あしたは、安治川を出る筈まんじの卍丸も、岸をかえたとみえてそこには影なく、ドボリ、ドボリ……と掘割へ揺れこむ波の音があるばかり、無月の秋はことさらに暗い。

「オオウーイ」

不意にすぐ近くの闇の中で、こう呼ぶ者の声の水へ響いて行つたので、弦之丞は陸おかへ引き揚げられてあつた過書舟かしぶねの底へ身を退ひいて、その陰から様子をうかがっていた。

「オオウーイ」

続いて別な声がまた呼ぶと、木魂返こだまがえしに向うからも、応こたへと答える声がある。

と、掘割の水門から、ギイツ、ギイツ、と櫓ろを押してきた一艘そうの見張舟がある。黒い波紋を大きく描いて人影の立っている棧橋さんばしへ漕ぎ寄せてきた。

「ご苦労だった」

という声は森啓之助。

続いて繫綱もやいを取る者、舟へ飛びのる者、しばらくドカドカ騒いでいる様子は、下屋敷から引つ立ててきた俵たわら一八郎とお鈴を、脇船わきぶねへ移すためにこの見張舟を呼んだものらしいか
つた。

「繩目は大丈夫か」

啓之助がしきりに聞いている。

「脇船へ積みこむまでに、川の中へでも飛びこまれては身の失策になることじゃ」

「横杭よこぐいへ縛りつけておきました」

「ウム、それならまず間違いはあるまい。念のため、その帆布ほぬのを二人の上からかぶせてお
け」

「はっ、こう致しますか」

「よかろう！ ところで方々にはもう御用がないゆえ、ここをお引き揚げなさるがよい」

「でも、森様お一人では」

「いや、ご配慮には及ばぬ。卍丸まんじの方も手不足であろうし、やがて殿のお座ざがえも仰せだ

されるであろう。これまでお手を貸していただけ、あとは拙者が仲間相手に送りこみます」

「では」と、番士船手ふなての人々は、そこを去つて各の持場へ分れて行つた。

その人々のいなくなるのを見澄ますと、啓之助はヒラリと陸おかへ上がつてきた。なお念入りに前後を見廻し、足早に飛んできたのはすぐ前の綱倉。

「宅助、宅助」

戸を叩くと、用心深く四、五寸開いて、

「おお、旦那でしたか」

「どうしたお米は？」忙しく中へ入つて見廻したが、少し色をなして、

「見えないではないか」

「あわてちやいけません、夜半よなかになつたら卍丸まんじへ運びこむから、支度をしておけと旦那がおっしゃつたんで、たツた今女をこの長櫃ながびつへ押し込んでいたところでき」と、仲間の宅助、意味あり気に側の長櫃を指さした。

「ア、それがにわかの様様変えでな」

「えッ、手違いに？」

「なにさ、こつちにとればなおさら都合のいい話。 劍山つるぎさんへ送る者があるので、急に脇船の方を承って行くことになった」

「おお、そいつア旦那、お誂えじやありませんか」

「されば、今すぐに俵一八郎と一緒に積み込むつもり、その長櫃ながびつをあれまで持ちだしてくれと申すのじや」

「オット合点、と言いてえが、旦那、こいつア一人じや持ち切れませんや」

「よし、身どもも手を貸そう」

「そうまでお惚れなさいましたか」

「ばかを申せ。ウーム、これや重い！」

「恋の貫目めかたでございますもの。わっしのほうがなお重い！」

「つまずくなよ」

「まッ暗だア、いろ色情やみじの闇路」

「ソレ、そこに繋つないである見張舟へ……」

「旦那、わっしが先へ下りますから、手をはささないでいておくんなさい……はずしてドボンと沈めたところで、この宅助は元々だが、旦那が浮かばれねえでしょう」

小舟の中へ、ドンと長櫃を下ろした時だ。

物蔭から走りだしたのりつきげんのじょう法月弦之丞。

「待てッ」

繫綱もやいを解きかけている宅助をほうり投げ、驚く啓之助を突きつけて、舟の中へ躍りこもうとした。

かねて、目明し万吉から仔細しさいを聞いていた俵同心とその妹、また片恋の不愍ふびんな女も、事のついでに救つて行こうとしたのだが、人の運命はともあれ、彼自身の危機が、すでにそこへ迫つていたのは是非もない……。

闇を、低く流れてくるのは檣である。閃々せんせんと横に光を刻んでくるのは白刃である。

蜂須賀名物の猛者もさ、原士の者や若侍の面々はらし。曲者くせものがお船蔵の方へ駈け抜けたときいて、天堂一角をまッ先に、今、ここへ殺到した。

先の一角がピタと足をとめて、

「おおあれだッ——法月弦之丞！」

指を指し示すとともに、

「それッ」

浪がしらがかぶったような勢いで、槍や刀、入りまじった二、三十名の武士が、ドツとその人影の後ろへ衝いて行つた。

あやういかな、法月弦之丞。

前は満々とみなぎる水。

うしろは刀を植えならべた殺陣。

唐草銀五郎の遺志をついで、今宵初めて望む所の秘密境へ、一步の足跡をつけた彼も、それをわずかの思い出として、ここに進退きわまるであろうか？

と思われたが……。

ハツと振りかえつた途端に、弦之丞、案外落ちつきすまして、刀の柄をソロリと握つた。果たして凄い意気ごみで来た若侍たちも、六尺以上は近寄つてこず、自然と、そこへ半円の陣を作つて、

「神妙にしろッ」

「のがれる道はないぞ」

口々に、空気合いの声ばかりが激しい。

彼がここでユツタリと構えたのは、充分な理由があることで、弦之丞には尊い一つの体験がある。

その話は――。

江戸雁木坂がんぎざかにいる戸ヶ崎夕雲とさきせきうん。当代の名人であり、弦之丞の師であつた。上泉かみいずみり流の剣法に虎白和尚こはくの禅機を取り入れ、称して無住心剣夕雲流せきうんといつてゐる。彼はその夕雲門で、まず第一の使い手だつた。

ある年の春である。朧夜おぼろよだつた。

何かのことに夜を更ふかして、護持院ごじいんヶ原はらを帰るさ、怨うらみを含む他流の者が、三十人余り党を組んで待ち伏せ、いわゆる闇討やみうちを食つた。

追い散らして血路をひらき、無事に屋敷へ帰つたものの、五、六カ所の薄傷うすでを負つたので、数日床についていると、やがて様子を見にきた夕雲先生、それを見て、

(大たわけ者！)

見舞いでなく、叱りつけた。

(夕雲流の名を汚し召された。一体その夜の敵は何人か?)ときかるるまま弦之丞は、むしろ得意に、

(三十人)と答えると、夕雲、

(三人か? ……)

(イヤ三十人程で)

(違うであろう、三人であろう)

(イヤ、たしかに三十人で)

(はアて! 会得えとくの悪い!) 不機嫌にいったがまた面おもてを和やわらげて、(およそ一人が数人に

取り囲まれる場合、敵は三人よりないものじや。どんな場所にも必ず背を守るたて楯たてはある。

右敵うてき、左敵、前敵、これ以上に敵はない。対手あいての数はあつてもただ一人へこれ以上の剣が

一度にかかれる理由がない。さすれば三十人も三人の敵と同じ、四十人も同じこと。要は

身しんと心しんの据すえ方かた一つ。どうだ、分わつたか)

この時、口伝くでんをうけたのが獅子刀ししとう、虎乱こらんの剣けん。二つながら衆あいてを対手あいてとする時の刀法であ

る。弦之丞はそれを味得みとくしていた。

今——。

彼は、無銘むめい二尺七、八寸の大刀を静かに抜かんとしている。一人と一人との立ち合いな
ら別だが、衆あいてに囲まれてしまった時は、この抜く時があぶない! いかなる居合いあいの達人に

しても、ここは毛ほどの隙——隙といい得なければ手塞ぎが生じる。

両面の剣が、その虚につけ入ってくるのは必然だ。こう張りつめた殺気というものは、瞬間、そこに剣もなく人もなく音もなく、ただ凄愴な鬼気だけがシューッと凍りつめてくる。

ブルツと動く太刀尖は見えても、容易に手元へ斬りこんで行かず、キラリと光流を閃めかす槍の穂も、無碍にはさつと突いてこない。

一つは弦之丞が、癡々たる眼くぼりのみで、柄に手をかけたまま抜かずにいるのが、かえって無気味であつたかもしれない。

こうして、五ツ息六ツ息する間がたつ……。

と、後ろの船で、長櫃の蓋を四、五寸持ち上げ、

「げ、弦之丞様——ツ」

と、お米が死身で声を揚げた。

弦之丞様——ツ、とお米が助けを呼んだのと、天堂一角の構えていた槍が、ダツ——と彼の右へ向つて突き出されたのと、ほとんど同時。

だが、その槍の穂がくるより早く、弦之丞は刀の柄をつかんだまま、踵を蹴って左へ跳び、同時に鏢鳴りさせて一刀を抜き払った。

と思うと姿が見えない！

相手の姿は見えないで、そこには濛とした血煙だけが残っていた。衆は渦を巻いて混乱し、一人は真一文字に走っているのだ。

「のがすなッ」

タタタツと、八、九人は駆けつづけたが、それも、追いつくたびにただ一刀で薙ぎ伏せられた。虎乱の太刀風、獅子刀の切ツ尖、寄るべくもない鋭さで、彼の行くあと行く跡へ、幾人かの若侍が苦鳴と血煙をあげてぶつ仆れた。

「ええ、これほどの手配りを破られたか」と、齒軋りをした天堂一角、檜柄の槍を抱えなおして、疾風のごとく追いかけたが、その寸隙に十間ほどの隔りができていた。

弦之丞は、一八郎を救うこと、またお米のことも諦めてしまった。今はこの屋敷から身を脱するだけが容易でない。しかし、綱倉から例の誓文神の祠へ出る抜け道までは、さほど遠くなく、充分地の理も見究めてあるので、やや窪地になった藪の中へザツ——と姿を隠してしまった。

途端に、彼の隠れた所から、ものの四、五尺と離れていない銀杏いちようの幹へ、プーン！と凄ひそい音がして一本の飛槍ひそうが突き立った。

刺かしさった櫛柄かしえの震動が止まらぬうちに、駈かけてきたのは、それを投げた天堂一角。

「しまった！」といつて、すぐ藪くぼの窪へ走りこんだが、そこに意外な抜け道の口を見出し
て、

「オーツ」ぼうぜん 呆然として立ちすくんだ。

「天堂一角！」するとまた彼の姿を追ってきた者が、藪の外から呼びだした。

「誰だ」

「竹屋三位みじゃ」

「才才三位卿様で？」

「阿波守殿がすぐに来いとこの御意ぎよであるぞ」

「ただいまの曲くせもの者が、この抜け道より屋敷の外へ逃げ出しました。せつかくながら一角、それを追つてまいりますゆえ戻られませぬ」

「いや、曲者の逃げたこと、殿も御承知。何せいまんじ卍丸へお座がえの時期が迫った。早く早く！」

才、そういえば、夜は疾くに子の刻を過ぎ、やがて八刻半（午前三時）にも近かるう。暁の七ツから六ツ半刻の間がその日の満潮。浅瀬や洲を交わす都合の上に、ぜひ卍丸はその時刻に纜を解かねばならぬ。

とすると——一角もあわてざるを得なかった。

彼はぜひなく三位卿について足を早めた。

卍丸は下屋敷の裏庭——安治川の横について、阿波守はすでに楼船の屋形へ褥を移していた。

支度は一月も前から手廻しされているが、重喜の身の廻りの物を運ぶ侍女たちや、潮除けの幔幕を張りめぐらす者や、櫂をしらべる水夫楫主、または朱塗の欄の所々に、槍お船印の差物を立てならべる侍などが、事俄かのように目を廻している。

その混雑の中を通つて、天堂一角、おそろおそろ船屋形の座所へ伺候した。そして弦之丞をとり逃がしたことを首尾悪そうに言い訳するのだった。

阿波守は、別に不機嫌な様子もなかった。その代りに、一角の足がしびれのきれ程黙然として考えこむ。

やがて、明快な言葉が出た。

「ぜひがない！ 昨夜の混雑をつけこまれたのじゃ」

そういったのはよかつたが、次に突然、

「一角、そちは帰国を見あわせい、しばらく暇いとまをとらずであらう」

「あつ、お暇を？」一角は冷やりとした。しばらくを、永ながのと、聞き間違えたのである。

「ウム！ まず一兩年遊ゆうれき歴しする気で、思う所を歩いてこい。ただし、その間にも役目があるぞ。ほかでもない、法月弦之丞、きやつをつけ廻して必ず討って取ることじゃ！ 彼

こそ昨夜の密話を残らず聞きおつたに相違ない、生かしておいては後こうし凶さまたの妨げ、大事の破は

綻たんを醸かもそうも知れぬ。よいか！」

「はっ」

「充分、そちに討てる自信があるうの」

「身に代えて刺し止めとまする」

「それで、余の船出も心安い。何かのことも、江戸表へ立ち廻った節上かみやしき屋敷の重役どもに、計ろうて貰うがよい」と座を立つて、三位卿と共に船楼ふなろうの欄おぼしまに立つ阿波守。

「才、ちぬの浦が明るくなつた」と眩つぶやいた。

霧の底から海があらわれ、霧の上から朝の陽がさんさんと射る。一の洲二の洲の水尾木も、順に点々と明け放れて、潮の満ち満ちてきた安治川一帯、紺の大水に金泥を吐き流したよう。

高いところで法螺の音が鳴った。

蜂須賀家の水見櫓——。

阿波へ出るべき卅丸は、今、ともづなを解いている。

上の過書船支配所でも、それに答える川合図をする。と、半刻ほどは舟止めとなり、ウ口舟、物売り、石垣舟、すべてが影をひそめてしまうところは、ちようど陸における大名行列が下座先触れの法式と変りがない。

森啓之助の乗りこんだ脇船は、一あし先に川口へ漕ぎ出していた。

ところで、お米はどうしたろう。

今朝は彼女の船出ともいえる。だが、ああ、それはなんと暗い運命の船出だろう。

脇船の底——長櫃の中——そこにあるのは永遠の悲恋と恐怖の闇ではないか。このかがやかしい光明の微塵もないのである。

やがて着く彼岸で、その泪と闇の長櫃の中から、どんなお米の運命が生まれることやら

……？

それは知るよしもなく、知る者は、今船やぐらに立っている啓之助のみだった。

「才オ……よく風なぎた、よく風なぎた。潮の色あい風都合も上々吉だ」

自己の幸運を祝福する言葉とも聞こえる。

彼には溢あふれる光明があった。

ニヤリと、いやな思い出し笑いを洩らして……また役目の水見八方へ小手をかざした。

ボウ——と川上から二番貝。

卍丸まんじは徐々じよじよと川口へ向つて迂すべりだしてくる。そして、やや取舵とりかじに一の洲すの杭くとすれ

すれに鏡の海へ泛うかみかけた。啓之助の船は、脇備えの形をとつて、その後から漕こぎ従じゆう

用意をする。これも渡海の際の常例である。

阿波守の乗っている卍丸——その舩ふなべりに立てつらねた船印の差物さしものには、桐のかげ紋まんじと卍

の紋、朝の潮風をうけてへんぼんとひるがえった。

檣ひらしやの緋羅紗ひらしやは太陽より赤く、燦さんとして波に映はゆる黄金の金具は魚群も遠ざける威風があ

る。艫幕ともまくいッぱいに風をはらむかと思うと、やがて、颯さつ！ 颯！ 颯！ 二十四挺ちよつの櫓ろ

拍子びょうしが、音頭おんどと共に快く波を切った——。

「有村殿！ 有村殿！」

こう呼んだのは船上の阿波守である。

「はっ、御用で！」と、胴の間梯子どうまげしげを駆け上がったのは元気な三位卿。海をのぞむと誰しもが自然と大きな声になる。

「お召しでございましたか」

「されば、あまりに好い眺め、一人でほしいままにするのは惜しいと存じてな」

「一天晴朗せいろう、今日のお船出祝しゅうちやく着あに存じます」

「不吉な昨夜の騒動も、これで清すがすが々すがしく拭ぬぐわれた」

「ちようどこの船が、沖から浦曲うらわを見るころには、お別れにみえた、三卿のかたがたも、

京都へお帰りある時刻」

「あつ……」阿波守は不意に、屋形の鯨幕くじらまくをパラリと下ろして、三位卿の眺めを塞ふさいいでしまった。

その時船はちようど、川口の左岸にある目印山めじるしやま（後の天保山）の裾すそから遠からぬ辺にあつた。丘には、松の間から黒い燈明台とうみょうだいがそびえている。諸国廻船の目印となる丘だ。臥龍がりりゆうに這つた松の木に足をふみかけ、その丘の上から卍丸の船影を見下ろしていた武

士がある。それは法月弦之丞であつた。

「やがて見よ、阿波守」

彼は梢こすえに手をかけながら、心のうちで声をあげた。

「いかに関を封じておくとも、弦之丞が、きつと一度は汝の領土を踏みまいるぞ！ うごかぬ証拠をつかみに行くのじや。——オオ、一度江戸表へ立ち帰つた上に、改めて、阿波二十五万石の喉笛のどふえへ、とどめを刺しに出なおそう！」

見送つていると、その一刹那。

どこからか、風を切つてきた妻つま白しろの矢が一本！ 危なくも弦之丞の耳を掠かすつて、ぷつん！ と後ろの幹へ刺さつた。

「さすがは重喜しげよし、油断なく自分の姿をもう見つけたか？ ……」と、弦之丞も先の用意の周密しつぱいなのに驚いて、矢柄やがらを見ると切銘きりめいにいわく、

——竹屋三位みふじわらのありむら藤原之有村。

のどかな音頭に櫓拍子ろびょうしの声——そして朗らかにあわせるお国くに口調くちようのお船歌ふなうたが、霧の秘密につつまれている秋の鳴門の海へ指してうすれて行つた。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2004（平成16）年1月9日第20刷発行

※副題は底本では、「上方《かみがた》の巻」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴門秘帖

上方の巻

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>